

# 大日本帝国と末期ドイツ 召喚

鎌森

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

突如として異世界に放り出された大日本帝国と末期ドイツ。本来ならば第二次世界大戦で滅ぶはずだったこの二カ国。彼らは果たして異世界で生き抜くことはできるのだろうか……。(日本は1941年時点の日本軍全部隊と満州・朝鮮半島・台湾・委任統治領が付いてきます。)

10 / 3

タグに「原作改変」追加

10 / 27

矛盾点を発見した為12、13話を一部修正

12 / 4

作中登場オリジナル兵器解説に挿絵を1つ追加

1 / 7

作品リメイクにつき更新停止

# 目次

設定

作中登場オリジナル兵器解説（随時更

新）（挿絵）

序章：転移

それぞれの転移

日独接触

歙稲と独逸

閑話章：日本編

日本陸軍の憂鬱

艦政本部

二章：ロデニウス戦争

終わりの始まり

37

31

24

19

15

9

1

戦争に向けて

出撃

ロウリア艦隊空襲

轟く砲声と航空支援

各国の考えと魔王降臨

侵攻に向けて

緑作戦その1

緑作戦その2

緑作戦その3

終戦

戦後の三カ国

各国の分析

閑話章：色々編

42

50

55

63

76

86

93

104

115

123

136

142

電探開発と舌戦	149
より強く、より速く。	155
悲しみのレーダー提督と日本海軍	161
戦車	168
三章：没落する列強	
モノノフの国	174
軍祭	183
秋月襲撃	191
パーパルディア監査軍 v s . 日本海軍	199
不穏な気配	207
異界の工業国	218

アルタラス王国	229
ルミエスのその後と大東洋諸国会議	237
開戦	249
フェン王国沖大海戦①	260
フェン王国沖大海戦②	274
勝利の影響	288
ムーの視察①	297



## 設定

### 作中登場オリジナル兵器解説（随時更新）（挿絵）

大日本帝国

・試製二式砲戦車

日本陸軍の自走砲。一気に性能が陳腐化したチハを輸出以外で有効活用する方策として試験製作された。

三号突撃砲リスペクト。

搭載砲は九〇式野砲。

最高速度 43 km/h（平地）

武装

九〇式野砲×1

一〇〇式軽機関銃 主砲脇に一丁、キューポラ前に一丁

イメージ画像

・石狩型防空巡洋艦

重巡並みにでかい船体に高角砲や機関銃、機関砲、電探を載せまくったヤツ  
無論本作オリジナル

ぱつと見重巡であり軽巡詐欺

決してクリーブランドとか言っつてはいけない（戒め）

・G14（葛城）型航空母艦

性能は未定。外見は多分でっかくなつた大鳳

・改秋月型

実は史実では各艦の名前まで決まっていたりする

（北風・早風・夏風など）

だが正式な艦型名は決まっておらず改秋月型以外にも秋月改型、超秋月型等表記揺れがある模様

個人的には超秋月が強そうで好き

性能面では電探装備以外は機動性向上程度。

各艦の名前（改マル五計画時）（一番艦から順）

北風（きたかぜ） 早風（はやかぜ） 夏風（なつかぜ）



冬風（ふゆかぜ） 初夏（はつなつ） 初秋（はつあき）

早春（はやばる）

・あ号飛行爆弾

V1ロケットの国産型。ぶつちやけドイツではいらぬ子扱い。

・い号飛行爆弾

V2ロケット国産型。

・伊400号潜水艦

あ号飛行爆弾を搭載したミサイル潜水艦的な物。

本来なら晴嵐が搭載されていた所に3機のあ号飛行爆弾を搭載する。

・伊500号潜水艦

い号飛行爆弾を3機搭載したミサイル潜水艦的な物。

ミサイルはタイフーン級みたいに搭載されていると思つて頂ければ

・橘花

日本製Me262劣化コピー。

設計図がキチンとあるため史実よりはマシだがドイツ製よりは性能で劣る。

航続距離は短く艦上運用は難しい。

日本本土に防空用の局地戦闘機として配備が進められている。

ースペックー

エンジン

三菱ネ12

最高速度856km/h

巡航速度約720km/h

航続距離 956km

武装

固定武装 30mm機銃二丁

爆装 500または800キロ爆弾1発

ドイツ

・Tiger III

主砲：10,5 cm Kw.K. L/68

エンジン：HL234

重量：75トン

どっちかっていうとTiger IIIよりもTiger II C型とかの方が良いかもしれない。

・Tall 83

ドイツ国防の新型ジェット戦闘機。

ハインケル HeS 011を搭載しており、史実よりも速度は速い。

最高速度 1089 km/h

巡航速度 約900 km/h

固定武装： 30 mm MK 108機関砲×4

（以下2つのうちどちらか1つ選択）

ロケット弾： R4M 55 mm 空対空ロケット弾

爆弾： 最大500 kgまでの爆装

・ Fa 223—a

大ドイツ国が開発した攻撃ヘリコプター。

エンジンはより大出力の物に換装されており、武装により重量は増加しているが速度を上昇させる事に成功した。

超過禁止速度：192 km/h

巡航速度：136 km/h

航続距離：700 km

└武装└

2 cm 機関砲

機首下方に一門

R 4 M

機体両脇に各3発ずつランチャーに入れられて装備

・強襲上陸支援船

上陸支援船とか抜かしているが要するに軽空母である。

上陸用舟艇とかはまだ考えてない。

排水量約13,000トン

全長190メートル

上陸支援機15機搭載

・E-100

ドイツ軍幻の超重戦車。本来ならば140トン程度の筈だったが Maus 開発中止の煽りを受けてどんどん要求は過剰になり、最終的に予定重量380トン、搭載砲は17センチ砲というゲテモノになった。

・E-75

ドイツ軍の Tiger II の後継車軸として開発され始めた重戦車。

しかし、度重なる設計変更を受けて開発が遅々として進まない。

こちらも設計変更されており、12.8センチ砲を搭載し、重量は90トン程度であ

る。

・E-50

詳しくはまたいつか

・バロン・リヒトフオーフェン

1943年（中央歴1640年）就役。

ドイツ国防海軍の空母。

一刻も早く航空母艦を大量生産する為に日本の神戸港から帰国した客船シャルンホルストを改造して作られた。

ジェット機運用を想定し甲板は装甲に覆われている。

裏ではやれ上陸支援船にするだのやれ空軍が管理するだの一頓着あったらしい。

史実の日本海軍の神鷹とは異なりに格納庫は上下二層設置され、飛鷹型に匹敵する搭載量を持つ。

スベック

兵装

10・5cm（65口径）連装高角砲4基

37mm連装機関砲×10

20mm機銃×20

## 搭載機

T a l 8 3 × 1 2 + 3

J u l 8 7 D | 4 × 1 8 + 3

計 4 0 (補用 6)

パーパルディア皇国

・ 鋼鉄製軍艦一番艦

? パーパルディアの秘密兵器でオリジナル兵器。スペックは考えてない。ついでに  
 出番も・・・あるかもしれない。

クイラ王国

・ 戦艦クイラ

かつての日本海軍戦艦敷島。

河内型に搭載されていたアームストロング 1912年型 30.5cm(50口径)  
 (徑)を二基四門と副砲として50口径三年式14cm砲を25基、7.7mm機銃30挺  
 を有する。

その代わり速度はガタ落ちで13ノット出たらいい方。  
 風神の涙を使えば14ノットくらいは出るかもしれない。

## 序章：転移

### それぞれの転移

？薄暗く、冷たい空。ブリザードが吹き荒ぶ北の海。まるで墨のように黒く染まった海面は全てを飲み込んでしまうような荒れ模様である。

？極東の大国、大日本帝国の北の端。択捉島単冠湾。

ここにとある艦隊が停泊していた。

？航空母艦6隻、戦艦2隻を含むその大艦隊の名は日本海軍第一機動艦隊、又は南雲機動艦隊と呼ばれる。

その中でも一際大きな存在感を醸し出す大きな空母。

旗艦赤城艦橋の作戦室の中で数人の男が話し込んでいた。

「中止？作戦は中止なんですか？」

？司令長官である南雲に詰め寄る一人の男。

数ヶ月前から山本五十六の命を受け、今まで必死にこの作戦のために邁進していた源田実中佐である。

「何故！何故！ここまで来て中止するのですか!!」

まだ天皇陛下のご聖断の結果とか対米交渉に成功したとかなら納得できる。

しかし、南雲が作戦中止の理由を聞いた際にはぐらかそうとしたことが源田を激しく興奮させていた。

?そして、源田の隣からも南雲に向けて厳しい視線がビシビシと飛んで来ている。その痛い視線の主は淵田美津雄中佐。

?彼もまた源田と同じく米艦隊に必殺の一撃を与えるべく必死に努力していたうちの一人だ。

彼は源田のように詰め寄ってはこないもののその目は冷たく鋭い。彼がその目で訴えていることも源田と同じことだろう。

「わ、わかったわかった。源田君。少し落ち着きたまえ。」

淵田中佐の視線や怒気迫る源田の物言いに怖気付いたのか南雲は源田を諫める。

?すると、彼も頭に血が上っていたことに気づいたのか姿勢を正してから深く深呼吸をした。

暫しの静寂が作戦室を支配する。

・・・どうやら少し落ち着いたようである。

?しかし、未だその目は鋭く南雲を貫いておりはぐらかすことは許さんと目で語っていた。



助けを求めるように後ろに待機している草鹿参謀長に顔を向ける南雲だが、草鹿にも視線を逸らされてしまった。

？ 八方塞がりとなつてしまつた南雲は一つ大きいため息をつき、『絶対に口外しないように』と前置きをしてから作戦中止の理由を述べた。

「なんでも、外洋に展開していた船と陸さんの第25軍が内地に出現したんだそうだ。」  
『は？』

その子供の妄想のような言葉を聞いた2人の男の呆けた声が作戦室に響いた。

今から少し前

？ 現在、日本政府と大本営は大騒ぎであつた。

何と、各国の日本大使館やマレー作戦の為に移動中であつた陸軍第25軍・海軍南遣艦隊と何の前触れもなく連絡が途絶したのである。

？ 陸海軍の部隊に関しては無線機の故障や英軍の先制攻撃など様々な理由が考えられたが、諸外国の大使館との連絡途絶は全くもつて原因不明であつた。

？ それから少したち、単冠湾の艦隊に作戦中止命令を下してから今回の責任のなすりつけ合いを始めていた頃に横須賀鎮守府から突然無電が送られてきた。

その内容は突然目の前に大量の輸送船とそこに満載された陸軍兵士や物資が現れた、

と言う物であつた。

ベルリン 総統地下壕

？千年帝国を自称していた第三帝国こと大ドイツ国総統、ちよび髭伍長はじつと地図を睨みつけていた。

「・・・何とかならんのか？」

？ぼそりと小さく出された声。だがその声は部屋の中で反響し、この場にいる全員にキチンと届けられる。

前に立っている将校達は彼がまた痲癩を起こさないかとハラハラしながらその様子を見守っている。

彼が睨みつける地図にはドイツを中心にした欧州が描かれていた。

しかし、その地図から読み取れる戦況はかなり劣勢である。

同盟国のイタリアは既に降伏し、遠いアジアの友邦たる日本も体勢を立て直した連合軍の手痛い反撃を受け旗色が悪い。

そして、ここドイツにも西側からはフランスを奪還した連合軍が。東からは共産主義者共がバルカン諸国に手をのばし、着々とここベルリンへと迫りつつある。

万事休す。絶体絶命。そんな言葉が似合う戦況だ。

?ちよび髭自身も負けを察しているのか最近では老け込み外に出ることも少なくなっている。

反ナチ者の中には気が狂ったという者までいる程だ。

「くそっ!」

ちよび髭が手に持っていた鉛筆を机に投げつける。

勢いよく机に打ち付けられた鉛筆は小気味のいい音を立てながら地図の上を転がる。

多くの者がああ、また癩癩が始まるのか。と思つたその瞬間。

『ッ!!!』

突然、世界が真っ白に染まる。

・・・そう、真っ白なのだ。

眩しい、などという次元ではなく視界に真っ白のペンキをぶちまけられたかのようだ。

「な、何だ!何が起こっている!!」

ヒトラーが吼えるが誰一人としてその言葉に返答する事は出来ない。

10秒ほど経つた頃に漸く視界から白が退場し始め、30を数える頃には視界は元に戻っていた。

しかし、彼らの動揺は続く。

「て、敵の照明弾か☒」

「い、いや。敵機や敵軍が近づいているなどという報告は入ってきていないぞ!?」  
「というか今は昼だ！照明弾を使う必要がない！」

混乱する将校達。騒めく室内で、大きな声が発せられた。

「皆落ち着け！状況を確認しろ！まずはこれが連合国の攻撃なのかどうか調べるのだ  
！」

ちよび髭の号令を受け、将校たちは急いで状況確認に走るのであった。

## 日独接触

約1週間後 九州から西に800キロ程度

? 太陽光がよく当たる晴れたとある冬の日。雲ひとつない澄み渡る青い空に立ち上る数本の黒煙。

その煙の源では数隻の船が波を打ち砕きながら勢いよく進んでいた。

? その名も初春型駆逐艦。初春 子日 若葉 初霜である。

彼女ら4隻で構成される第二十一駆逐隊は件の部隊大転移時に内地にいた。

そのおかげで艦内の混乱が少なかったため近海の探索を行っているのである。

「ふーむ。今の所海ばかり、だな。」

? 初春艦長、牧野少佐は艦橋でそう呟いた。現在、大体南西に800kmほど進んだが未だ遠くまで水平線が続いている。

穏やかな海は遠くまで続いており、水平線の彼方まで見渡せそうだ。

「そうですねえ……。」

? 副長も牧野の言葉に同意の言葉を発してからまた前を見つめる。

? 最初の頃は支那大陸があるはずの場所が海になっていて驚いた。しか

し、内地に報告を終え暫く進んでいるとこの景色にも慣れてしまっている。

その後は静かな海を淡々と進むだけだ。・・・まるでクルージングである。

「これじゃあ探索をしているんだかクルージングをしているのかわからないな。」

牧野が冗談を言うと言っている副長や航海士が笑う。

少し艦橋が和やかになった時、見張所に繋がる伝声管から緊迫した声が飛び込んできた。

『こちら見張所、上空に機影を確認！一時的の方向！』

その声を聞いて先ほどの和やかな雰囲気は消し飛び、パツと双眼鏡を取る牧野。

同じく双眼鏡を手に上空を睨む副長らと機影を確認する。

しかし、その機影を確認した彼の驚きは相当な物になった。

「あれは・・・ドイツさんか？」

「あの国籍マークは・・・ドイツ国防軍ですねえ。」

牧野はあんぐりと口を開けてポカーンとそのドイツ軍機・・・FW190を見るのであった。

「おおおう？一体どうなってるんだ？」

機内で困惑した声を発した一人の男。ドイツ国防空軍に所属するクリストフ兵長は

眼下の海を航行する4隻の駆逐艦を見て驚いていた。

「全く。突然目の前の陸地が海になったと思つたら日本の駆逐艦がいるなんてなあ。この世界はどうなつちまつたんだ？」

駆逐艦たちが掲げる太陽が光を発しているようなマークをつけた旗を見ながら呟くハイドリヒ。

この前まで陸だった場所が海になったのは驚きだがその元陸を日本海軍の駆逐艦が航行していることも驚きである。

第一どうやって日本からここまでアメリカやイギリスの妨害をかいくぐって来たのか。

「機長！下にいるのは日本の駆逐艦だ！日本が連合国共の妨害をかいくぐってわざわざ会いに来たぞ！」

機長の方に報告しながら再び日本の駆逐艦を観察する。

4隻とも目立った破損箇所は見当たらず彼には無傷に見えた。

「本当に不思議だなあ……。」

苛烈な連合国の妨害を無傷で乗り越えてやって来るとは、日本海軍は滅茶苦茶に高練度な乗員を持つているかあり得ないほど運がいいんだなと考えながら彼は日本の駆逐艦を観察するのだった。

こうして接触した日独両国は接触した日から一週間後に首脳会談を行なった。その席ではお互いの時代が違うことに驚きながらもより一層関係を深くすることで合致した。

そして、その会談の席上で日本にとっては驚愕の事実が語られる。

「そうそう、近衛大臣。そちらのお耳に入れておきたいことがありますな。」

ドイツ側の代表、ちよび髭は会談に出席していた日本の総理大臣近衛文麿に笑顔で話しかける。

「何ででしょうか？」

不思議そうに聞き返す近衛に伍長はニマリとしてこう述べた。

「わが国の西に、クワ・トイネ公国なる国があるのですよ。」



## 鍬稲と独逸

約3週間前 クワ・トイネ公国 東部

? 透き通るような青い空。雲ひとつない快晴の空の中を一つの影が進んでいた。

猛々しい体。固そうな鱗。厳つい顔。

現代人が見たらドラゴンと言うであろう生物、ワイバーン。

? その生物の背中に取り付けられた鞍にまたがる1人の男。

竜騎士マールパティアは愛騎の上で首を傾げていた。

「……あれ? おかしいなあ……そろそろ海に出るはずなんだが……。」

手に持った地図をもう一度見直す。

位置や見方を間違えてないか念入りにチェックするが、どう見てもここは海のはずである。

しかし、眼下には綺麗な草原が広がっていた。

「どうなってるんだ?」

と、声を漏らした時。彼の目に一つの黒点が映った。その点は凄まじい勢いで大きくなっていく。

「何だあれは……まさか、敵騎か!?!」

? 身構えるマールパティア。しかし、段々と点の形が鮮明になるにつれて彼の予想がはずれていることが分かってきた。

「あのワイバーン……羽ばたいていない?」

? ゴオオオオと不思議な唸り声をあげながらこちらに向かつてくるワイバーン。よく見てみると胴体から突き出た二つの大きな羽は動いていない。

『我、未確認騎を発見。これより要撃し確認を行う。現在地……。』

? 考察するよりも取り敢えず報告するべしと断じたマールパティアは即座に司令部に報告する。

報告が終わると再びその謎のワイバーンをの観察を始めた。

? こちらに向かつてくるその不思議なワイバーンはまるで木の葉のような色をしており、とても大きい。

その羽ばたいていない大きな羽には2つ高速回転する謎の部位が付いている。  
? その数秒後には未確認騎は彼の予想をはるかに超える大きさになっていた。

「ツーンりやあ想像よりもでかいぞ……!」

いよいよ未確認騎とすれ違うぞ、という時。彼の驚きは最高潮に達した。

なんと、未確認騎の頭の中にいる竜騎士と目があつたのである。

「ツツツツ!!?」

?彼は驚きのあまりに愛騎から滑り落ちそうになった。なんせ、まさか頭の中に竜騎士がいるとは想像できなかったのである。

「しまった!」

体勢を立て直している間に未確認騎は遙か遠くに進んでいた。

慌てて未確認騎を追いかけるが、その差は小さくなるどころかどんどんと大きくなり未確認騎はマイハーク方面へと消えた。

?それから数日後。謎の飛竜が来襲した東方の陸地を調査するために組織された騎士団が旧海岸線付近で魔獣を引き連れた謎の軍団と遭遇。

?『大ドイツ国』と名乗るその軍団に敵意がないという事がわかった公国はドイツ側の希望もあり会談の場を設けることとなった。

クワ・トイネ公国 首相官邸

ピリツとした空気の中、多くの男達が一つの部屋に会していた。

片方は見慣れない黒くてパリツとした民族衣装。もう片方は見慣れた服。

公国の外交官、コンダイは目の前のドイツの外交官を観察していた。

(外務局内じやあワイバーンを知らない、魔法を知らないという王道の蛮族国家だと聞いたが……。)

パリッとした民族衣装は少し窮屈そうだが清潔そうな見た目の男達。  
態度も良く行儀もいい。

(俺にはどうにも蛮族に見えないんだけどなあ……。)

? 武官らしき男が身につけている装飾品も美しい。

? 昔見たことがある本物の蛮族は農夫が着ているようなボロ切れを着ており、装飾品も質素なものだったが……。

「では、会談を始めましょうか。」

顔にはおくびにも出さずに頭の中でそんなことを考えているとクワ・トイネ公国首相、カナタの声が応接室に響いた。

体がキュツと引き締まる。

? それまでは静かだった部屋が少しずつ動き始める。ドイツの外交官もキビキビと動いており、とても優秀であることが伺える。

1人の外交官として情けない行いをしないように気をつけなければ!

? こうして執り行われたドイツとクワ・トイネ公国の会談と総統閣下からの手土産を

受けてドイツの力を知ったクワ・トイネ公国はドイツと国交を樹立後安全保障条約を締結。

?それから少し後にドイツが仲介をした日本とも国交と安全保障条約を締結するのであった。

## 閑話章：日本編

## 日本陸軍の憂鬱

?クワ・トイネ公国が日独と国交を結んだ日から1ヶ月程度経った。

?日本やドイツから流れ込んでくる人・物・文化。特に『工業製品』や『インフラ』と言われる物は着々と公国の生活水準を押し上げていた。

?公都クワ・トイネでは日独の支援の元低層ビル（日独基準）が起工されるなどかなり順調な滑り出しである。

しかし、それ以上にハイペースに発展している国がこの国の南にあった。

その名も、クイラ王国。

?クワ・トイネ公国の仲介の元日独と国交を結んだこの国は不毛の地が広がる貧しい国家だった。しかし、日独はそこに溢れる燃える水やら燃える石をみると目の色を変えその水やら石を輸入させるとクイラ王国に迫った。

?クイラ側は何故日独がそこまでこのよくわからん物に固執するのか理解できなかったがその辺のゴミを輸出して金かねとインフラをくれるならばと大量に日独に輸出す

る事を決定した。

? こうしてクイラ王国は円・ライヒスマルクの大量入手と国内インフラの整備に成功。大規模な軍拡を推し進める事となる。

? こうして異世界の二国は異界の大国の様々な革命的物品に驚きながらもその利益を受け取っていた。

しかし、衝撃を受けた国家は何も彼らだけでは無いのである。

大日本帝国 帝都東京

? 一面に広がる家屋と煙を吹き上げて力強く走る汽車。

かつての世界においては白人以外で唯一の列強として、アジア最強の国家として君臨した列強、大日本帝国。

? 異界に転移して一時は混乱したものの今では社畜は会社に籠り休日にはモガやモボが銀座を闊歩するいつもの風景を取り戻していた。

? そんな活気溢れる帝都東京に聳え立つ荘厳な建物。

『陸軍省』と呼ばれる何やら物騒な名前のこの建物の会議室にて何人かの男たちが会していた。

「……。」

「……。」

？皆集まってはいるもの一向に誰も口を開かない。

？気まずく、重い空気が流れる。それから一言も言葉を発しないままただただ時間だけが流れていった。

彼らがこんなにも意気消沈している理由を知る為に少し時を遡る。

二週間ほど前

千葉県千葉市 陸軍戦車学校

？帝都東京から少しだけ離れた場所に位置する陸軍戦車学校。

第一次世界大戦において精強たるドイツ帝国陸軍と幾重にも張り巡らされ死体の山を築いた塹壕を突破しドイツに恐れられた鋼鉄の馬。『戦車』。

？その戦車を操る戦車兵を養成するこの学校の練習場にて日本戦車には到底見ええない巨大戦車が一軸鎮座していた。

「……いつあ……本当にバケモンじゃのお……。」

1人の陸軍士官が整備を受けている目の前の戦車を見て畏怖と感嘆の籠った言葉を吐く。



そう、その戦車は『VI号戦車I型』、又は『Tiger I』と呼ばれるドイツの誇る最強の重戦車である。

Tiger重戦車。それはあまり戦車に興味がなかったり詳しくなかったりする人でも名前だけは知っていることが多いであろう超人気戦車である。

I型は100mmの堅牢な前面装甲と圧倒的な火力を持つ88mm砲を有し、その**ほ別物**拡大発展型のTiger IIと共に**紅茶とヤンキーとウオッカ**連合国軍将兵達を恐怖のどん底に陥れた第二次世界大戦最強の重戦車だ。

? そんなTiger Iはこの数日前に日本陸軍によって研究資料として輸入されここで試験を受けていた。

しかし、その結果は日本にとって正に惨敗であった。

「まさか、新型の47mm砲でも零距离で抜けるか抜けないか程度とはなあ・・・」

同じく整備される眼前の戦車バケモノの前に立っている陸軍技術本部の男は手に持った試験結果の記録された紙を見ながら溜息をついた。

? その記録用紙には多くの陸軍火砲・装甲車両の名前が書かれており、名前の横の欄には多くが『貫通不可』と書かれていた。

こうして日本陸軍はチハに代表される既存戦車や新開発のチヘが対独を前提とした

場合一気に役立たずになってしまったことを察した。

だが、陸軍の憂鬱はまだ終わらない。

### 陸軍航空技術研究所

「むむむう……。」

? 丸眼鏡をかけた士官が真剣な表情で悩む。

その奇妙な唸り声を聴きながら周りに座っている男たちもそれぞれ思い思いのポーズをとりつつ何やら必死に考え込んでいるようだ。

彼らの前に置かれた机の上にはいくつもの資料が置かれている。

? その資料の中にはなにやらよくわからないグラフや文字だらけの書類が多く、全体の9割ほどはそのような書類のようだ。しかし中には何かを写した白黒写真も混じっている。

その写真に映されているのは、一機の航空機。

だが、この写真の航空機は実に奇妙な形をしている。

? プロペラを持たず、両翼下に設けられた増槽の大型版のような物。だがその特大増槽は後方から火を吹いている。

そう。これは世界で初めて実戦に投入されたジェット戦闘機、Me 262を写した写

真である。

? 少し前。今後も仲良くしようということと合致した日独は両国の親善を目的として日本使節団がドイツを訪問する催しを開催した。その際にヒトラーによりたつぷり自慢されたのがこの高速戦闘機である。

この写真はその自慢の後に披露された実演飛行の時に撮られた。

? この写真・映像はすぐさま日本国内にも持ち込まれ日本の航空関係者は度肝を抜かれた。

何よりも驚いたのはこのジェット戦闘機の最高速度である。

? この戦闘機は速度はあくまで憶測でしか無いが優に800 kmを超える。中にはもしかすると900 kmに迫るかもしれないのでは、という意見も出ている。

無論、空戦は速度だけでは無いにしろ速度が速いと色々と有利であるのも事実。

? 訪独後ドイツで撮影されたテレビ映像や写真、記憶などを参考に色々と調べたり検証してみた所上昇性・機動性・加速性に難がありそうであるという結果が出た。

? だが仮に最高速で突っ込んでこられた場合既存の陸軍航空機では撃墜どころか追いつくことすら困難という結果もだされている。

・・・という旨を報告したところお偉いさんから『何を使ってもいいからとにかくなんとかしろ』と命令されてしまった。

？その為に冒頭のようにウンウンと唸りながら対抗策を練っていたのである。

・・・それでも決して海軍に頭を下げないように言うのは流石日本とも言えるが。

「・・・追いつけないのにどうにかしろったってねえ・・・。」

「そうだよなあ・・・。」

だが、この無茶振りが功を奏し後に彼らはレーダーを使った早期警戒網の構築等を思いつく。

これらは時間がかかるものの実用化され後世では日本レーダー界の父と呼ばれたりもするがそれはまた別のお話。

## 艦政本部

？陸軍が戦車技術・航空技術で大きな敗北感をドイツに抱いていた頃。

？明治以降日本の心血を注いで築き上げられ、今や世界第3位とも呼ばれるまでに  
なった巨大組織、大日本帝国海軍でも頭の痛い対独戦略について会議がおこなわれよう  
としていた。

海軍省 艦政本部

？帝都東京に位置する西洋風の美しい煉瓦造りの建物。

日本海軍の軍政を司る組織、海軍省。

その中でも日本海軍の造艦・造兵・造機に関する事務を取り扱う海軍省の外局、艦政  
本部。

この機関の各部の要人達が一つの会議室に集まっていた。

「では、会議を始めようでは無いか。」

？男たちの中で最も上座に座っている男・・・艦政本部長、田辺中将の号令の元転移  
後の建艦計画に関する会議が始められる。

「さて、この会議ではまず何を議論するかというとドイツ海軍がどのような脅威となるかということである。

？かねてより帝国海軍は太平洋の反対側に位置する後の超大国、アメリカを仮想敵としておりその建艦計画もアメリカを意識した物となっている。

その為、どのように建艦計画をドイツ向けに改定するかと言うことを会議しているのだ。

「……まあまず、ドイツ海軍の中で最も脅威となるのは潜水艦でしょうな。」

集まった男の中の一人である第七部長、涼元少将が呟くと周りの男達もうんうんと頷く。

「まあ、見つけれなかったら話にもならんからなあ……。」

第三部長、八意少将がうわ言のように話す。

彼らの頭の中ではとある出来事の記憶が反芻されていた。  
今からおおよそ5日ほど前。

？日本近海において日独海軍合同演習が行われた。

？この演習はその名の通り日本海軍とドイツ海軍が合同で行なった演習で日本からは南雲機動艦隊や潜水艦が、ドイツからは潜水艦や数隻の駆逐艦が派遣され様々な演習

を行った。

? そして、最も大きな問題となったのは対潜演習の際の出来事である。

なんと、日本側は碌にドイツ海軍のUボートを探知できず空母・戦艦を含む3隻が撃沈判定、5隻が中大破判定を受けたのである。

一方で日本海軍の伊号潜水艦はやすやすとドイツ艦に見つかり撃破判定を受けてしまった。

? この出来事は日本海軍に大きなショックを与え、特に九三式水中探信儀がほとんど役に立たなかったことが問題視されるようになった。

? そのため、今後は探信儀開発を急ぎつつ対潜を想定した改装・設計をすることが重要というのがこの会議内での一般的な意見であった。

だが、これ以外にも割と頭の痛い問題は存在するのである。

「それも考えねばならんが、戦艦と空母はどうする。」

? そう、戦艦を作るか、空母を作るかという問題である。

? 現在、井上成美や山本五十六を中心とした航空主兵論が駐ドイツ日本大使館より伝わった真珠湾攻撃の大戦果を受けて勢いづいており、海軍内でも戦艦廃止とまでは行かずとも空母を重視すべしという意見が少しずつ増えてきていた。

? 特にドイツ国内で前世界の日本から一部技術協力を受けて建造中らしい空母、グ

ラーフ・ツエツペリンが艦上機として改良型の Me 262 を運用するのではないかと、という噂も立っていることが航空主兵論者の勢いを後押ししていた。

？艦政本部内でも第一部長、阿部少将を中心とした大艦巨砲主義者と第三部長、八意小将を中心とした航空主兵論者との間で激しい議論が行われている事は艦政本部の間では当たり前の常識である。

？最近には航海部や潜水艦部といった元々は余り議論が盛んではなかった部の人員も飲み込み、議論は拡大の一途をたどっている。

？彼等によって行われる議論は相手が何かを言う、『陸軍としては海軍の提案に反対である！』と言わんばかりに相手の意見を否定するたちごっこが続き、はつきり言うて不毛な争いと化していた。

「やはり空母を重視すべきでしょうな。」

「いや、戦艦を重視すべきだ！」

？やはりというか何というかこの場でも少々雲行きが怪しくなっており、このままでは舌戦が始まり会議どころではなくなるかもしれない。

？この議題は諸々が決まってからにするべきであると判断した田辺中将は急いで話題の転換を図る。

「ま、まあまだ他にも問題はある。」



?と言つて雲行きがあやしい阿部少将と八意少将を落ち着かせる。

「電探、ですな。」

?先程から黙つて聞いていた第六部長、蒲生少将が議題を提起する。

?そう、次の頭がいたい問題とは電探についてだ。

?史実における日本海軍では上層部の無理解もあり電探技術は陸軍に比べて遅れており、西欧諸国とはお話にもならない。

?だが、この演習時に使用されたドイツ海軍駆逐艦の対空監視レーダーが日本海軍上層部の度肝を抜いた。

なんせ、そのレーダーは航空隊が200キロ以上離れていても探知が出来ると言ふのだ。

?ただでさえドイツ空軍の戦闘機に対して零戦が遅れをとつていくというのに200キロも先で待ち伏せをされたらどうなるか。

?これを想像した海軍上層部は急遽電探の価値を見直せざるを得なくなったのである。

?結局、会議は長々と続けられG14型航空母艦の4隻建造、改秋月型の建造、対潜

装備・電探の研究などが決定された。

## 二章：ロデニウス戦争 終わりの始まり

ロウリア王国 王都ジン・ハーク ハーク城御前会議

? ロデニウス大陸の西半分を占め、人口3800万人に達する大国、ロウリア王国。

? この国の首都である三重壁に囲まれた荘厳な都市、ジン・ハークにある美しい城の中でこの国の命運を決めた重要な会議が行われようとしていた。

「これより会議を始めます。」

? 宰相マオスが号令をかけ、王のお言葉を拝聴する。

? 多くの者が王のもったいなきお言葉に恐縮する中、王により会議が次の段階に進められた。

? マオスが会議の進行計画に則り今回の作戦運営責任者の將軍パタジンに対して話しかける。

「まず・・・ロデニウス大陸の統一は目前です。ただ、クワ・トイネ公国とクイラ王国には深い絆があります。同盟を結んでいると言っても差し支えないほどに。」

? しかも、それに加えてクワ・トイネ公国と安全保障条約を結んでいる日本やドイツ

も参戦してくるでしょう。

つまり・・・我が国がクワ・トイネ公国に戦争を仕掛けると、合計4カ国を敵に回すことになります。

・・・將軍は、4国を相手にしても、勝てる見込みはあると思いますか？」

？会議室が極度の緊張に包まれる。

？隣に座るものの呼吸、頬を伝う汗の音。それら全てが聞こえるようだ。

？今まで、ロウリア王国は数多くの侵略戦争を起こしその度に勝利し、併？してきた。

？だが、その中でも決して二国以上を一度に敵に回したことはない。二国以上を敵に回すと数の暴力で押し切られるかもしれないからである。

？だが、今回は二国どころかその2倍の4カ国を相手にすることとなる。

？1に対して4という数はあまりにも、多い。

？周りが緊張を持って將軍パタジンを見つめると、パタジンは自信に満ちた口調で応える。

「二国は農民の集まり、もう一国は不毛の貧国。

？後の2つは農民の集まりに安全を保障してもらおうワイバーンを知らぬ蛮族。農民と貧民は亜人比率が高く、結束は弱いでしょう。

？敵が4カ国だろうが質においても数においても我が国の優位は揺るぎない。宰

相、安心召されよ。」

「わかりました。」

? マオスが返事をしてから座る。

? その後、黒いローブに身を包んだ奇怪な男に邪魔をされながらも会議は無事に進んだ。  
だ。

「今宵は我が人生最高の日だ!!クワ・トイネ公国以下四方国への宣戦布告を許可する!」  
「ははーっ!!」

? この場において、誰一人として祖国の勝利を疑っていなかった。皆が皆、残った4国を制圧しロデニウスを統一したロウリアを夢想する。

? だが、彼らは致命的な間違いを犯していた。

? 彼らは、クワ・トイネ公国が日本とドイツに安全保障をしてもらっているとは、夢にも思わなかったのである。

クワ・トイネ公国

ロウリア王国との国境付近の街 ギム

「ふあああああーっ……。」

? 大きな大きな欠伸をしながらいつも通りの見張り台に登る一人の男。

? クワ・トイネ公国西部方面騎士団の制服に身を包んだこの男、ボウゴは自らの得物を持ちつつ見張所に立っていた。

「眠い……まだ朝の……何時だ?」

? 太陽の方を見ながらぶつくさ文句を垂れる。

? 冬とはいえ未だ太陽も上りきらない時刻に起きて見張りをしなければならぬというのなかなか辛いものである。

「くっソーギリンエの奴、俺の横でグースカいびきかきやがって……」

? 眠い目をこすりつつ、日本から輸入されてきたという双眼鏡を覗いて索敵を開始する。

そこには、いつもと変わらない平原が――

「ツッ」

? そんな根拠のない想いは粉々に打ち砕かれる。

? 蠢く人、人、人。その誰もがロウリア軍の軍装を身につけている。

? 先程までの眠気は吹き飛び、一気に目が冴えていくのを感じる。

「ろ、ろ、ろ、ロウリア軍だああああ!!!」

? 大慌てで見張り台に据え付けられている鐘を鳴らしつつ、魔信で騎士団司令部に通報する。

「こちら第二見張り塔！前方の平原にロウリア軍を多数確認！総兵力は――・・・おおよそ3万！」

？この情報は瞬く間に公都クワ・トイネにも伝えられるのであった。

？太陽がようやく空に顔を出し、外が明るくなってくる。

？鳥の囀りと風の音が聞こえ、1日の始まりを告げる。

？ここは、クワ・トイネ公国大日本帝国大使館。

？日本大使である森近は朝っぱらから何やら嫌な予感に苛まれていた。

（なんだろうか、この予感は……。この独特の悪寒。これはまるで、独逸のポーランド侵攻の日の様な……。なんととも言えない嫌な予感がする。）

？森近は窓から何と無く国境の方――ギム、と呼ばれている街がある方を見つめるのであった。

# 戦争に向けて

クワ・トイネ公国　ギム　西方方面騎士団

ギム基地司令部

「圧倒的不利では無いか、我が軍は。」

？後の世ではこの時のクワ・トイネ公国軍の状況を端的に、正確に表した言葉として歴史書に乗る言葉を眩きながら頭を抱える西方方面騎士団騎士団長、モイジ。

？先程から退去を呼びかけているロウリア王国軍からの返答はなく、総司令部に援軍を要請しても『高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に云々』という曖昧な答えが返ってくる。

「くそっ……のままじゃあギムは放棄することになるぞ……！」

？敵の大戦力が目の前にいながらも何もできない虚しさと苛立ちがどんどん溜まるモイジであった。

？その後、彼の言葉は現実となりギムはアテム率いる東方征伐軍先遣隊により蹂躪さ



れる事になる。

だが、その惨状を聞いた日本・ドイツ国民は憤慨しロウリア討つべしという気概が高まることにもなるのであった。

大ドイツ国 首都ベルリン 総統大本営

？かつての世界、地球においては70年後でも世界最大の戦争と言われた独ソ戦を含む第二次世界大戦の傷跡から徐々に復興しつつある千年帝国こと大ドイツ国の首都ベルリン。

？整備された街道では人々が歩き回り、アウトバーンでは車が颯爽と駆け抜ける。

？そんな大都会ベルリンにおいても一際大きな建物。

？地下から再び地上に移された総統大本営において今回の作戦がヒトラーに説明されていた。

「では、今回の作戦計画についてご説明いたします。」

参謀総長のハンス・クレープスが地図と駒を使いながらヒトラーに作戦を説明する。

「まず、今回我が軍は日本軍、クワ・トイネ公国軍の支援に徹します。」

「何故だ？」

「わが国は未だ連合国軍の攻撃から立ち直り切れておりません。

? ハンブルクのような激しい爆撃にさらされた街や工場では未だ復興が進んでおらず瓦礫の山となっております。

? 地球での戦争から立ち直りきれないのは軍部も同じで多数の部隊において兵員・物資が不足しております。

現在の状況では大規模作戦は自粛せざるを得ないでしょう。」

? クレープスの説明を若干不満そうに聞くヒトラーだが彼の言うことは間違っていない。

? 現在、ドイツは連合国の攻撃で荒廃した都市・工場の修復に全力を傾けており、戦時徴兵部隊の解散はもちろん常備軍の軍縮まで行っていた。

? 戦時急造部隊が使っていたものが流用できるため旧式だろうがなんだろうが糸目をつけなければ装備は数を揃えられる。

? しかし、何よりも問題なのが軍人の数だ。

? 例えどんなに強い兵器があったとしても操る人がいなければ鉄製の複雑な置物でしか無い。

? だが、ドイツ軍では度重なる大戦争の結果正規軍人が大幅に不足していた。

? しかし、だからと言って徴兵しようにも流石に漸く家に帰れたと思った瞬間にまた

戦争に行けと言われたら国民も反感を抱くはずだ。

？ヒトラーもその辺は理解しているのか渋々と納得していた。

「その為、クイラ王国に駐屯している第六装甲師団が現地の同盟軍の支援に当たる予定です。」

？クレープスが広げられた地図に配置されている第六装甲師団の駒を移動させる。

「現在、クワ・トイネ公国の都市ギムを落とすとしたロウリア王国軍は勢いに乗り要塞都市エジエイに迫りつつあります。」

？ロウリア王国軍を示す駒が地図に載っているエジエイなる都市に移動する。

「そこで我が軍は日本軍、クワ・トイネ公国軍の支援をします。」

？エジエイに置かれたクワ・トイネ公国軍・日本軍を示す駒と共にドイツ軍を示す駒がロウリア軍を迎え撃つ。

「そしてこの場で一気にロウリア王国軍の侵攻部隊を撃破しその勢いのままギムを奪還します。」

「うむ……。」

「また、ロウリアの大船団がクワ・トイネ公国のマイハークを目指して出航したとの情報が入りましたが……。」

「いや、まで。確かマイハークは我が国との国境地帯に位置する内陸都市ではなかった

か？」

？ヒトラーが普通ならば抱くと思しき疑念を唱える。

？その疑念にクレepsもよくわからないというような雰囲気を醸し出しながら解答する。

「えー、恐らくですがロウリア王国はまさか数ヶ月前まで港湾都市だった場所がいきなり内陸都市になったとは思ってもいけないのでは無いかと・・・。」

「成る程な。」

？確かに、ヒトラーもいきなりキールが内陸都市になりましたと言われてもまずはその報告をした部下の頭の心配をするだろう。

「話を戻しますが、こちらに関してには日本軍に一任します。」

？現状の我が国の海軍ではあまり活躍できないでしょうし、木造船をUボートで迎え撃つのははつきり言って燃料の無駄です。」

「何っ☒」

？海側に置かれたロウリア軍の駒を日本軍を示す駒が迎え討つ。

？クレepsの説明に心外だと言いたげな顔をする某リーダーさんもいたが誰もそのことには突っ込まない。

「・・・わかった。作戦の実行許可を出そう。」

こうしてドイツ軍はこの世界初の戦争に向けて動き出す。

クワ・トイネ公国 エジエイに続く街道

? これより始まるうとしている血なまぐさい争いなど全く知らぬと言うように綺麗に澄み渡る青空。

? 四月に突入したクワ・トイネ公国は寒さも和らぎ、綺麗な花や新緑の草木が芽吹いている。

? そんな綺麗な大自然の中を無骨で物騒な一団が進んでいた。

? 地面を揺らしながら進む鋼鉄の巨大な後ろ姿。

? 大きな車体に載せられた重厚な砲塔から飛び出す太く、力強い大砲。

? ドイツ国防陸軍に所属する4号戦車H型の一団はクワ・トイネ公国の街道をエジエイを目指して進んでいた。

「長閑だなあ・・・。」

? 第六装甲師団第六戦車連隊第一中隊中隊長、シュトロハイムはクワ・トイネ公国の風景を見つつそう呟いた。

? 穏やかな陽光がほんのり暖かく、何処からか小鳥の囀りが聞こえる。

？その景色はこれから戦争が始まろうとしているとは全く思わせない、正に平和そのものであった。

「車長、のんびりするのはいいですけどちゃんと指揮はしてくださいね？」

「はいはい、わかったよつと。」

？砲手のディータの諫言を軽く聞き流してから今回の作戦概要を反芻する。

「えーつと、確か今向かっているエジエイという街で日本軍、クワ・トイネ公国軍と共にロウリア軍と戦うんだつたよな。」

？頭の中に地図を思い浮かべる。

？確かさつき連隊本部から今はテポトの森近辺だと聞いたから……。

「まだまだか……。」

？未だ長いエジエイへの道のりに若干飽きた彼は体重をキューポラに任せて後ろに振り向く。

？自車軸の後ろからは自らの指揮下にいる4号がお行儀よく付いてきていた。

？結構実戦経験の多いシュトロハイムからすれば見慣れた光景だが戦車が戦車だけにかなり壮観な光景である。

？だが、そんな堂々たる力強さに満ち溢れた戦車も砲身に小鳥が止まっていれば平和に見えてくるから不思議である。

「やっぱり長閑だなあ……。」

？なにやら車内から声が聞こえる気がするが何も聞こえなかったことにしてぼーつと戦車隊の周りを飛び交う蝶々を見る。

？空は相変わらず澄み渡っていた。

## 出撃

クワ・トイネ公国　ギム

「ぎやあああああ!!!」

? 街に響き渡る悲鳴と断末魔。

? 家々からは煙が上がり、かつては綺麗だった街並みはロウリア兵により荒らされて消え去っていた。

? まさにこの世の地獄となったギムの街でロウリア王国東方征伐軍先遣隊を指揮する副将アテムは配下の兵士から報告を受けていた。

「ふむ、これがあの不思議な魔法を起こしていた魔法具か。」

? 部下が差し出した魔法具を手にとつて眺めるアテム。

本体は木製のようなだが、上の黒い所は鉄製のようだ。

「コレが何なのか捕虜に聞いたただしてみたとここれは『サンハチシキホヘイジユウ』と言うとのことです。」

? しかし、使い方については全く口を割らず弾丸という燃料のようなものを使い果たしたとの一点張りで……。



？もしかすると、ですがこれは魔法具ではなく機械なのかもしれません。」

「・・・そうか。ならば、もしかすると機械文明の列強、ムーが後ろについているのかもしれないな。」

？と、配下の兵士に話すが内心ではその可能性は限りなく低いと考える。

？確かにクワ・トイネ公国の湧き出てくるような食料は魅力的だろうがムーからではいくら何でも遠すぎる。

？恐らくこれはクワ・トイネ公国が開発した秘密兵器なのだろう。

？内心そこまで口の硬い兵士を持つクワ・トイネ公国軍を羨ましながら事後処理を進めるアダムであった。

クワ・トイネ公国 コンレン港

？整然と並べられた20隻の帆船。それらは等間隔に木の盾が並べられバリスタも置かれている。

「壮観な光景だな。」

？若干皮肉が混じった雰囲気とその光景の感想を呟くクワ・トイネ公国海軍提督、パッカーレは自らの指揮する艦隊を見て若干複雑な心境となっていた。

？それは、今では『マイハーク湖』と呼ばれるようになった場所に浮かぶ30隻にも登る帆船が理由であった。

？元々、彼の指揮する公国海軍第二艦隊はマイハークを拠点としており、所属する船も大半がマイハーク港及びマイハーク近海に展開していた。

？だがとある日、とんでも無いことが起こった。

そう、大ドイツ国転移である。

？突然転移してきたドイツの領土によつてマイハーク港を含むマイハーク湾は蓋をされる形になり、内部にいた軍船30隻は塩水湖と化したマイハーク湾に閉じ込められてしまったのである。

？今ここに集結しているのは奇跡的に外洋に展開していたか何故かドイツの転移とともに位置が動かされた軍船20隻のみなのである。

？わざとでは無いとはいえドイツに自らの艦隊の5分の3を無力化されたパンカーレはあまりいい気はしなかった。

「やれやれ、頼みの綱の日本海軍もたつたの20隻しか送つてこず、大ドイツ国様に至つては0隻。これでは今ここにいる彼らも何人が生きて帰れることやら・・・。」

「提督、そろそろ日本海軍との合流の時間です。」

？配下の海軍士官から日本海軍との合流時間を知らせられる。

「わかった。今行く。」

? パンカーレは先程までの憂鬱な気分を振り払って日本海軍を迎える準備をするのであった。

それから数時間後

? 日本海軍と合流したクワ・トイネ公国海軍提督、パンカーレは観戦武官という貧乏くじを自ら引いた殊勝な海軍士官、ブルーアイとともに瞠目していた。

「これが・・・日本海軍の軍艦・・・。」

? 目の前に浮かぶ一隻の超大型船。

? 塔のように聳え立つ巨大な艦橋、雲すら突き抜けそうな大きさのマスト。

? その名も日本海軍高速戦艦比叡と言う。

(あの前方と後方に4本ずつ付いているのは、魔導砲なのか?・・・成る程。魔導砲で敵戦力を削ってから白兵戦に持ち込むということか。あれだけ大きければ船員の数も桁違いに多いだろう。)

? ブルーアイは彼なりに戦艦比叡を理解しようとしていた。

「お、ブルーアイ、お前に迎えが来たみたいだぞ。」

友人の士官がブルーアイに話しかける。

？ブルーアイは友人が指差す方向を見てみると、高い位置に平たい甲板が取り付けられたこれまた大きな船からかなり小さめの船がこちらを直指してやってきていた。

翌日。

？補給を受けた日本海軍第一機動艦隊はブルーアイを乗せてロウリア王国海軍撃滅の為に攻撃するのであった。

## ロウリア艦隊空襲

「いい景色だ。美しい。」

? 帆いっぱい風に受けて力強く進む合計4400隻からなる超大艦隊。

? ロウリア王国東方征伐海軍海將シャークンは旗艦の甲板上で自らの率いる艦隊の勇壮たる佇まいを眺めていた。

? 6年の歳月をかけて建設されたこの艦隊ならクワ・トイネ公国など恐るるに足らず、むしろ列強パーパルディア皇国ですら征服できそうだ。

(いや・・・しかし、列強には砲艦なる船ごと破壊する兵器があるそうだな・・・)

? ちらりと顔を覗かせた野心を封じ込める。

? そして、彼はこれから征服する東方の海を見据えた。

「・・・?何だあれは?」

? すると、彼の目が彼方の空に浮かぶ一つの黒点を捉える。

? それは灰色で『ブーン』と不思議な音を立てつつ超高速でこちらに向かって来る。

「なんだ?新種のワイバーンか?」

? 周りの兵士や士官達も異常に気づいたのか盛んにその謎のワイバーンについて議

論する。

？その不思議な鳴き声を出すワイバーンは羽ばたいておらず、微動だにしない大きな二つの羽根には見たことのない赤い正円が描かれていた。

「索敵中の艦爆より入電！『ワレ、敵船団ヲ発見セリ。位置……』」

？突然艦橋内に飛び込んだ敵発見の報に俄かに騒がしくなる赤城艦橋内部。

（敵船団を発見せり……成る程。先程飛び立って行った飛行機械は索敵をしていたのか。）

？騎馬戦ができそうなほど広い甲板と、大量に搭載された驚異の飛行機械。

？それらを見て十二分に驚き疲れたブルーアイは一周回って寧ろ冷静に日本海軍を視察していた。

？先程のカンバクという飛行機械からもたらされた情報は瞬く間に艦内に広がって行く。

？この情報を元に出撃命令が下され、整備兵たちにより甲板に並べられた大量の飛行機械のハツドウキとやらが起動されたたましい音を立てる。

？甲板の前で赤い小旗を持った水兵が合図をすると先頭の飛行機械がゆつくりと移

動を開始し、大空へと羽ばたいて行った。

? 先頭が飛び立ってからは線を抜かれたかのように次々と後続もそれに続いて飛び立って行く。

? ブルーアイは周りに立っている日本海軍高官達と共に発艦した大量の飛行機械の糸乱れぬ編隊飛行をしつかりと目に焼き付けるのであった。

「何だったのだ・・・?」

? 甲板に立って疑問の声を誰にでもなく上げるシャーケン。

? その疑問は言わずもがな先程まで艦隊の上空を旋回していた謎のワイバーンである。

? あの後、数回艦隊の上空を旋回したかと思うとそのワイバーンは攻撃するでもなく再び東方へと去っていった。

? 中には旋回中に弓を射かけた兵士もいるようだが全く届かなかったようだ。

「・・・なにやら嫌な予感がするな。」

? なんとなく感じた寒気を怖気付いただけだと無理矢理振り払う。

? そして、今度こそ征服するべき東方の海をしつかりと見据え・・・。

「・・・今度はなんだと言うのだ？」

？今度は先程とは比べ物にならない数の黒点が見える。

？その数はおおよそ100をこえるのではなからうか。

？瞬間にそれら黒点は大きくなつて行き、段々とその輪郭が鮮明になつてくる。

？それらはあの謎のワイバーンと酷似しており、同様に羽ばたかない大きな翼に赤い

正円をつけていた。

「あれは、一体・・・。」

？不気味とさえ思える謎のワイバーンの大群を見据えてシャーケンが疑念の声を発した時。

？同時にロウリア艦隊の一隻が凄まじい閃光と爆炎に包まれた。

？まず最初に攻撃したのは霧雨少佐率いる赤城急降下爆撃第一中隊であった。

？かつての世界では米軍の戦艦を撃沈するために血の滲むような努力と訓練を繰り返していた彼らは正確に一機ずつ爆弾を投下していく。

？本来ならば鋼鉄の城のような戦艦や重巡を沈めるために作られた爆弾は容易く木造船を粉碎する。



？ロウリア軍の軍船は爆弾が命中する度にびっくり箱のように破裂し、燃える木片を辺りに散布する。

彼らに続いて他の艦爆・艦攻隊が攻撃を開始し、零戦隊が銃撃を喰らわせる。

？爆発の轟音・閃光と航空機のエンジン音により恐慌状態に陥ったロウリア艦隊の旗艦でシャークンは必死に声を張り上げる。

「何だ！何が起こっている!?」

？艦隊を立て直すために状況報告をさせようとするがその努力もむなしく混乱は広がる一方で全く収束する気配を見せない。

？そうこうしているうちに近いところを航行していた軍船が灰色のワイバーンが投下した黒い糞のようなものを受けて大爆発する。

「くそッ！通信手、至急司令部に上空支援を要請しろ！」

王都ジン・ハーク

？王都ジン・ハークの王都防衛騎士団司令部において將軍パタジンは東方征伐艦隊よりもたらされた悲鳴のような上空支援要請を受けて敵主力ワイバーン隊殲滅の為に250騎全騎を差しむけることを決定するのであった。

ロウリア王国東方征伐艦隊 とある軍船

「なんなんだよこれはあつ！」

? パーパルディア皇国より派遣されて来た観戦武官、ヴァルハルは船の甲板上で弱々しい叫び声をあげる。

? その声は船の上空を飛び回る謎のワイバーンに向けて放つたが、返答など帰ってくるはずもない。

? 今の所彼が乗る船は運良く敵の攻撃に当たっていない。

? しかし、周りの軍船は多くが敵の高威力爆裂魔法や高威力の何かを高速連射する魔法をモロに喰らい四散した。

「ヒイツー！」

? 飛んできた零戦の20ミリ機関銃の流れ弾をみて悲鳴をあげるヴァルフアル。

? 現在はそれら謎のワイバーンも魔力が切れたのか多くが撤退した為若干余裕を取り戻したもののまだ爆裂魔法が何発も何発も炸裂していた頃は危うく粗相をする所だった。

「くっ・・・くそっ！」

? 先程までの恐慌状態を恥じる程には落ち着きを取り戻した頃。

? 彼をさらに驚かせる、というか世界の常識を根底から覆す事態が発生した。

「今度はなんなんだよ……。」

? 遠くに見える幾本もの黒煙。

? それらは風にたなびき、蒼空に消えてゆく。

? その根元から現れたのは、彼らの想像を絶していた。

「うっ！嘘だろお☒!!？」

? そこに現れたのは、灰色の超巨大船舶で構成された謎の艦隊。

? 恐らく、あの最も小さそうな船でもぎつと見積もって1000mを超えるだろう。

? だが、彼の目を引いたのはそんな地味なものではなかった。

「なんだあの船の魔導砲……！デカすぎだろ!!？」

あの巨大艦隊の後ろの方。

? 天を貫くかのような巨大な艦橋とマストを持つあの超巨大船。

? その船の前部に載せられたあの4本の太い棒。

? 間違いなく魔導砲である。

? 蛮地に無いはずの魔導砲があるだけでも驚きなのにその大ききときたら、キロ単位で離れているここからでもわかるくらいには巨大だ。

? どれくらい巨大かというと、威力を推察することすら嫌になるほどに。

「しかも、ありやあもしかして鋼鉄製の軍艦か? そりやあ皇国でも研究中の最新技術だ

ぞ☒」

? だんだんと近づくにつれて彼は最悪の事実気づく。

? なんと、あの巨大船は鋼鉄製なのだ。

? 現在、この世界において木製以外の軍艦を実用化し大量に配備しているのは世界広しといえど2カ国しかない。

? 一つは機械文明の列強、ムー。

? してもう一つは、この世界最強の魔法帝国。

? 神聖ミリシアル帝国。

? 彼の祖国たるパーパルディア皇国も近年その仲間に入ろうとしており、現在鋼鉄製軍艦一番艦が建造中だ。

? だがその大きさはあれほど大きく無いし、搭載砲もはつきり言つて戦列艦と大して変わらない。

「嘘だろ……。」

? 蛮族が文明圏内国にして三大列強の一角、パーパルディア皇国よりも進んだ技術を有する。

? そのありえない事実を知り、愕然として船縁にもたれかかるヴァルハルであった。

## 轟く砲声と航空支援

### 日本海軍戦艦比叡

? 1912年に大日本帝国横須賀海軍工廠にて建造された戦艦比叡。

? 竣工から27年が経過し巡洋戦艦から戦艦、高速戦艦、練習戦艦と様々な名前に変更されつつも幾度かの改装を経た今。

? 日本海海戦の様な艦隊決戦での華々しい活躍は期待されずとも30ktに迫る高速性を生かして次世代の主力、空母機動艦隊に随伴する。

? そんな老嬢、比叡の艦橋にて艦長の田所大佐は前方のロウリア艦隊をじっくりと見据えていた。

「航空隊がかなり削ったみたいだが・・・それでもまだまだわんさかいるな。まるで海が茶色に染まったみたいだ。」

? 素直な感想をこぼす田所。

「出撃前は4400隻の大艦隊と聞き、少し怖気付きましたが蓋を開けてみれば砲すら持たない木造船とは・・・。」

? 田所の感想を聞いた副艦長の遠野も同じく自らの感想を漏らす。

? その感想を聞いてクワ・トイネ公国海軍を見る限り薄々感づいてはいたがな、と思  
いながら田所は砲術長の三浦に命令を下す。

「一番・二番砲塔砲撃用意。」

「了解! 一番・二番砲塔砲撃用意! よーそろー。」

? 命令を復唱する三浦の声を聞きながら少しだけ思いに耽る。

? 数ヶ月前はアメリカに痛烈な一撃を加えるために単冠湾に集結したかと思えばい  
つの間にやら異世界に飛ばされ、異界の大船団へ砲撃しようとしている。

? ……文字にしてみればアホらしくなるような奇天烈さだ。

? 現実には小説よりも奇なりとはいうが、幾ら何でも奇すぎるだろうと思いつながら何と  
は無しにちらりと当艦の右隣の方を見る。

? そこでは当艦と同じく砲撃用意をしている重巡利根が見えた。

? 我らが比叡の35・6センチ砲には及ばないがこの世界においては比類なき大火  
力を有する20・3センチ砲4門を勇ましく振り上げて前方のロウリア艦隊に照準を  
合わせている。

? その姿は美しく、勇ましい。

? そうこうしているうちに砲術長から砲撃用意完了の報告が上がってくる。

? 後は砲撃命令を下すだけだ。

? 艦橋内がしんと静まりかえり、ピンと空気が張り詰める。

? 今回は当艦比叡の砲撃を合図に霧島・利根・筑摩が砲撃をする手はずになっている。

? 自ずと身体に力が入るのを感じる。

? 艦橋内と自らの緊張が最高潮に達した瞬間、一気にその力を解き放ち、一言大きな声で命令した。

「撃エッ！」

? 閃光と爆音。

? 艦攻の投下する800キロ爆弾とは比較にもならない轟音と大閃光が艦橋を白く染める。

? 全長222メートル、排水量32516トンにも及ぶ比叡の巨体も砲撃の衝撃で少しばかり揺れる。

? 閃光と轟音が景色に溶けて消えると、眼下には真っ黒な砲煙が見えた。

? その砲煙は風に乗れり、次第に後方に流されていく。

? 艦橋要員全員が砲撃の余韻に浸りつつ砲弾の着弾を眺めていると、遠くから幾つかの轟音がこの世界に再び響いた。

「くそっ！次から次へと！」

? ロウリア王国東方征伐艦隊海將シャーコンは誰にともなく悪態を吐く。

? 欄干を思いつきり拳で殴りつけて前方を睨む。

? その血走った眼の先では灰色の巨大船が悠々と進んでいた。

? 謎の高威力爆裂魔法を次々と起こしていくワイバーン軍団に突如として現れた超巨大船だけで構成された艦隊。

? それだけでも頭が痛いというのにその船に載せられた巨大な棒が何やら稼働を開始していた。

「これ以上何をすするつもりだ．．．!!」

? と、疑問の声を発した時、遠く離れたこの場でも全てを震わせられるような大轟音が前方の超巨大船の中の一隻から発せられた。

? どうやらその船の前方で凄まじい大爆発が起こったようだ。

「ひゃつはあああ!! あいつら、事故しやがったぜ!!」

? 水兵たちは絶望の中にかすかな希望を見つけたとばかりに大喜びする。

? しかし、シャーコンはなんとも言えない嫌な予感に苛まれながら爆発した巨大船を見つめた。自らの予想が正しければ．．．。

「ッ!! やはり．．．!!」

? ぬるりと、黒く大きな爆炎の中から姿を現したのは大破して沈みゆく巨大船．．．で



はなく、悠々と大きな棒を4本天に向けて掲げながら航行する巨大船であった。

? 艦隊のあちこちから絶望と恐怖の声上がる中、シャークンは重要なことに気づいた。

(先ほどの爆裂が自爆ではないのだとしたら、何故あの様な事を?・・・まさか!!)

? その次の瞬間、シャークンの乗る軍船の斜め前方から直径35.6センチの巨弾がうなりをあげながら飛来する。

? そして、柔らかい木造の甲板を打ち破った榴弾は炸裂を起こす。

? 轟音とともに発せられた火炎と衝撃波はシャークン以下、多数の将兵と10隻以上の軍船を吹き飛ばす。

「な、なんだあ?!」

? 合計4か所で起こったその豪炎をみて困惑する生き残った将兵たち。

? その時、前方から今度は多数の轟音が聞こえ、あたりの空気を震わせるのであった。

? この時の比叡の攻撃によりシャークン以下主要な指揮要員を一気に失ったロウリア王国東方征伐艦隊は後に退却しようにも退却ができず、被害を拡大させることとなる。

## ロデニウス北側海上

? ロウリア王国竜騎士団長、アグラメウスは海軍救援のために王国史上最大の250騎ものワイバーンを引き連れてロデニウス沖の空を飛ぶ。

? 彼はようやく下された出撃の命令に喜び勇んでいた。

?・・・今回の敵は大日本帝国の主力ワイバーン隊ということだが、所詮農民に安全保障をしてもらう様な弱小国。恐るるに足りない。

? だが、それでもワイバーンはワイバーンなのだ。いくら弱兵が扱う少数編隊とはいえ海軍だけでの対抗は厳しいのだろう。

? そこまで考えたアグラメウスはもう一度自らが指揮をする編隊を見回す。

? 250騎。

? 言葉にすればとても短なものだが、これだけのワイバーンを一度の作戦で動員するのは史上初である。

? おそらくは後世の歴史書にも王国史上最大のワイバーンによる作戦行動としてその雄姿は永遠に刻まれるだろう。

? そして、蛮族にも関わらず、『大』やら『帝国』と調子に乗っている者共を教育してやる。

? アグラメウス以下全ての竜騎士がそう思っていた。

? その時である。

「・・・? 何か変な音がしないか?」

? アグラメウスの耳がなにかを補足した。

? その音は『ブーン』という聞きなれない重低音であり、どこか不安になる音だ。

「・・・前方には敵影なし、後方、左右も異常なし。」

? 慌てて周囲を確認するも、敵騎は見えない。

? 敵の攻撃を警戒してあたりを見回すが、何も見えない。

? それにもかかわらず、音はどんどんと大きくなつて行く。・・・おかしい。ここは

ワイバーンの上昇限界高度のはずだ。

「この感じは・・・まさか、上?」

? にわかには信じられないといった風にアグラメウスが上空を見上げると、編隊前方からくぐもつた悲鳴が聞こえてくるのはほぼ同時であった。

「目標捕捉!! 敵西洋竜!!」

? 航空母艦加賀制空戦闘機隊中隊長、安室少佐は愛機の零戦二一型を唸らせながら急

降下する。

? その目標は下方で余裕綽々といった様子で悠々と飛行する西洋風の龍の一団。

「まだまだ・・・今っ!!」

? 編隊の中の一人の男がこちらを見た様な気がした瞬間に20mm機関銃の引き金を引く。

? ダンダンダンという子気味のいい音とともに射出された20mm弾は竜騎士に迫り、その柔らかい肉体を文字通り粉碎する。

? 竜騎士の体を貫通した弾はワイバーンにも迫り、鱗を砕く。

? 一人と一匹が無残な肉片と化したのを切る暇もなく安室少佐は敵編隊の中をくぐり抜け、体勢を立て直す。

? 少し後方を見て見ると、中隊各機も続々と敵騎を撃墜しており、晴れ渡る蒼空に紅い花が咲いていた。

「な、なんだ?!」

? 半信半疑ながらも上空を確認したアグラメウスは信じられない事態に直面した。

? なんと、右前方を飛行していたはずの竜騎士が、国の女房がそろそろ赤ん坊を産むと、出撃前に笑っていた彼が愛騎と共に肉片と血しぶきとなりこの世から消え去ったの

だ。

? しかも、その数瞬後には何やら大きく奇怪な色をした大型ワイバーンが編隊の中を突っ切っていったのだ。

? その速度は異常なほどに早く、急降下しているとはいえ、600キロは出ていたのではなからうか。

「さ、散開!!散開しろ!!」

? とつさに散開する様に命令するが間に合わず、第二撃、第三撃を次々と食らい、被害が拡大する。

「クソっ!!敵はどこにいる!!」

? 敵の連続攻撃が終わり、10名と10匹が生命活動を停止させた頃。

? ロウリア編隊は必死の索敵を開始した。

? 10騎を失ったとは言え母数が多いロウリア編隊は未だ240騎が作戦行動中であり、索敵は極めて素早く行われる。

『敵ワイバーン隊発見!!前下方を凄まじい速度で上昇中!!』

? 魔信をつうじて 編隊に敵の位置情報が共有される。

? 大慌てで前下方を見ると、羽ばたかない大きな赤い正円をつけたおおきなワイバーンが凄まじい勢いで上昇するのが見えた。

「あれほどの速度で上昇できるのか．．?!」

? その脅威的な上昇力を目にして瞠目するアグラメウスだが、彼に安息は訪れない。

? 遠くから今度は20の黒点が彼らを目指して飛んできていた。

大日本帝国海軍 南雲機動艦隊 旗艦 赤城

『我、敵ワイバーン隊に遭遇。戦闘を開始セリ。位置．．』

? 赤城制空戦闘機隊長、郡山少佐から赤城に向けて送られてきた無電が通信士によつて読み上げられる。

? クワ・トイネ公国とクイラ王国によつてワイバーンについて教えられていた艦隊上層部は万が一に備えて対空戦闘の用意をさせる。

? この命令を受けて艦隊各艦の機銃座や高角砲に人員が配置され、敵が来襲するのを待つ。

? まあ加賀や二航戦から送られてくる情報も含めて考えると艦隊に到達するまでに全滅しそうだが。

? しかし、今各空母飛行甲板には帰還した艦爆・艦攻が多数駐機されており、今火炎放射など食らったら瞬く間に甲板が火の海となるだろう。

? それだけはなんとしても避けなければならない。

? まあ、要するに備えあれば憂いなしということだ。

? 司令長官の南雲はブルーアイと共に今も零戦隊が戦闘を続ける西方の空をじつと見つめるのであった。

『いけーっ!!』

『囲め囲め!!』

『ダメだ! 数が多すぎる!!』

『ああっ!! 後ろ! 後ろに!! た、助け』

? ロウリア王国竜騎士団は今、大混乱に陥っていた。

? あれから何度も攻撃を仕掛けてくる敵ワイバーン隊に対してロウリア側は散開して五騎一組で応戦していた。

? しかし、その被害は拡大の一途をたどっている。

? なにせ、敵はこちらよりも高威力な魔法を連発できる上に速度もこちらより上なのだ。

? 中には敵の弱点を見切り、できるだけ予測不可能な動きをすることで敵の攻撃を避

けている者もいたが、何回も何回も攻撃を受けてはたまらない。

? それに、いくら精銳が集まるといっても混乱の中未知なる敵を前にして対処法をあまりみだせれる者は少ないのである。

? その為、多数の騎士が愛騎と共にその身を散華させていた。

? しかも敵ワイバーンの数はどんどんと増えていっており、それに比例するかの様にこちらの損害も右肩上がりになっていた。

? 最初は250を数えた大編隊も今では80程度にまで消耗してしまっている。

『クソっ!!』

? 未だなんとか生き残っていたアグラメウスは敵ワイバーンの攻撃を何とかかわしつつ作戦を思案する。

(このままここに止まったところでジリ貧でこちらの負け。かといって逃げるわけにもいかない・・・。)

? 先ほどから予測不可能な動きをして敵の判断を鈍らせる様にと指揮下の竜騎士に命令しているが、リアルな死と未知の敵という二重の恐怖の中でどこまで伝わったか。

? 先ほどから敵の攻撃が自らの横をかすめる音がする。

? 正に生と死の狭間の中でアグラメウスの思考はいかに犠牲を減らすかではなくいかにして敵を少しでも多く道連れにするかというものに変わっていた。



? されども、いくら思案したところでいい案は全く浮かばない。

(クソツ!! どうすれば・・・!!)

? と思いながら前方を確認した。

? その時に見たこちらに機首を向ける敵ワイバーンが彼が最後にその記憶に焼き付けた光景となった。

? その後、ロウリア王国竜騎士団は日本海軍南雲機動艦隊所属の零戦隊によりアグラメウス以下250騎の全騎が肉片と血しぶきとなって消えた。

? これにより、ロウリア王国マイハーク侵攻は海将シャークン、竜騎士団長アグラメウス以下将兵多数、軍船約2800、ワイバーン250騎を失う大損害をだして歴史上稀に見る大敗北となり失敗したのであった。

## 各国の考えと魔王降臨

クワ・トイネ公国 政治部会

先日行われたロデニウス沖大海戦。

4400隻に及ぶロウリア軍の大艦隊と日鋏連合艦隊合計40隻が戦った大海戦の戦果報告がここ、クワ・トイネ公国政治部会において行われていた。

数だけ見ればその戦力差は110倍にも及んだ絶望的な海戦であるロデニウス沖大海戦。

これに国家の存亡がかかっているだけあり、皆一様に真剣に聞いていた。そう、真剣に聞いていたのである……。

「ありえん……これはありえんだろう……。」

公国外務卿、リンスイは頭を抱えて呻き声をあげる。

彼の目の前には今回の政治部会参加者全員に配られている戦闘報告書が置かれていた。

「しかし、これらは全て私が見てきた事です……。」

ブルーアイも嘘をついているわけではないのでリンスイに弱めに反論する。

その反論を聞いたリンスイも大きいため息をついてこめかみを抑えながら話しはじめる。

「・・・じゃあ何かね。君は日本海軍はたった20隻で220倍もの敵に挑み、人的損害ゼロ。物的損害もゼロ。」

250騎ものワイバーンも僅か5分の1程度の戦力で被害なしで全て叩き落とし魔導師何人が集まったら再現できるかもわからない爆裂魔法を連発してロウリア船団を2800隻沈めた、と言うのかね？」

「いえ。日本海軍の高官が『燃料・弾薬・爆弾が勿体ない』と嘆いていたので少なくとも日本のお財布には少しの被害が・・・」

「知るか。」

色々と疲れた様子のリンスイはかなり辛辣なツツコミを入れるがそんなことを言われてもどうしようもない。

日本軍が圧倒的な力を持ってロウリア艦隊を粉碎した事も被害がゼロなことも全て事実なのだから。

その後、荒れ始めた政治部会の中ブルーアイはたまたま見かけた可愛い子を思い出すなどして現実逃避をするのであった。

ロウリア王国 王都ジン・ハーク

將軍。パタジンは悩んでいた。

その理由は言わずもがな少し前に行われたロデニウス沖大海戦の相手国『大日本帝国』である。

その海戦における敗因を精査するために敵の情報を集めているのだが、何せ海軍の報告があまりにも荒唐無稽すぎる。

曰く『敵の超巨大船が大爆発したと思つたら少し後に船が大爆発した』とか『日本のワイバーンは爆裂魔法が起こせる』とかである。

(そんなワイバーンがいたら海に向こうの皇国が使っていないわけがないだろう・・・) だが、大日本帝国のワイバーンが驚異的な空戦能力を持っているのはアグラメウス率いるロウリア王国竜騎士団の魔信により判明している。

だが、その報告も『何か』が連射されるとワイバーンや竜騎士がまるで豆腐か何かのように粉碎されるというものだ。

(何かとは何だ・・・)

考え込むが全くわからない。

「くそっ！どうなっている・・・！」

腹立たしい。全くもって腹立たしい。

・・・・だがいい。海戦はともかく陸戦は質より量が物をいう。海のようにはいかんだらう。

何、今回のカラクリを知るためには陸戦でクワ・トイネ公国を落とせば良いのだ。その後でゆっくりと調べるとしよう。

そう考えるとパタジンは少し仮眠を取るために自室に戻るのであった。

### 第三文明圏 パーパルディア皇国

薄暗い部屋に灯る、オレンジ色の淡い光。

淡い光は部屋で話し込む2人の男達の影を作り出す。

今、この男達は何の皇国の運命を決めた重要な話し合いをしていた。

「大日本帝国・・・？なんだ、その舐めた名前をした国は。」

「ロデニウス大陸の北東方向に位置する島国です。」

「いや、それは報告書を見ればわかるが・・・何にしても、このような国、今まで存在したか？ロデニウスから1000キロ程度の場所に位置する国など千年間我が国が気づかないわけがないだろう。」

配下とその大日本帝国・・・というのは調子に乗っているので略して日本と言うが、そ

の様な国があつたのかという話をする。

少しだけ日本という国について話したあとはその軍事力についての話となつた。

「いくら海戦の方法が野蛮なロウリアとはいえ、僅か20隻にそこまで一方的な敗北をするものか……?」

「ですが、『軽く見積もつて30センチを超える巨砲』だとか『最低でも100mを越す巨艦が小さく見える艦隊』など存在するわけないでしょう。ミリシアルやムーじやあるまいです。きつと観戦武官も蛮地での長い単身赴任で疲れていたのです。今度交代させてやりましょう。

……ですが閣下。我らの100門級戦列艦『フィシヤヌス』や『例のアレ』が仮にロウリア艦隊と戦うとするならばこの様な状況になるやもしれません。」

「……ふむ。となればその日本とやらは装甲艦……は行き過ぎにしても大砲を作れる技術はあると見るべきか。蛮族の癖にとことん生意気なやつだな。」

結局、今回の話し合いでは情報に確度が持てるまでは皇帝ルディアスに報告しないということで決定するのであつた。

クワ・トイネ公国 国境の近く

村人達が息を切らせながら一路東へ向かう。

その目的はただ一つ。ロウリア軍から逃れるためだ。

ギムから東へ約20キロ、名もなき小さなエルフの村がそこにはあった。

外界との接触が少ないこの村はギム大虐殺の情報が届くのが大きく遅れた。

気付いた時にはすでに遅く、付近にはクワ・トイネ軍及び同盟国たる日本軍、ドイツ軍の姿もない。

その為、彼等200名にも登る村人達は自らの生を掛けてロウリア勢力圏を自主疎開しているのである。

彼等が進むクワ・トイネ公国の平野は某ドイツ軍の戦車長が表したようにとても長閑で、平和そのものである。

だが、その長閑な光景は彼等を死へと誘う恐ろしい所。むしろ鬱蒼とした森の方が見つきりにくい為何倍もマシだ。

彼等は急いでここから25キロも先にあるクワ・トイネ公国軍の基地を目指して進む。

しかし、現実是非情であった。

「ロウリアの騎馬隊だ！」

列の後方から悲鳴が上がる。

土煙を上げながら村人達めがけてやってくる一団。

亜人殲滅を是とする恐怖の軍、ロウリア王国軍の騎馬隊である。

必死に逃げようと走り出す村人達だが、騎馬隊の足には敵わない。

諦めてへたり込む村人。舌なめずりをする騎馬隊。

1人の少年が何処かにあるかもしれない神へと絶望に染まった叫び声を上げた時。

不思議なラツパの様な音が辺りに響くのであった。

クワ・トイネ公国 国境の近く

クワ・トイネ公国とロウリア王国の国境付近を偵察飛行する、1つの影。

それはメルヘンチックなワイバーン・・・ではなく、無骨で殺意に溢れた地球製の飛行機械、J u r 87である。

複座型の急降下爆撃機であるこの機体はかつての世界で『地獄』と評されたソ連軍との戦いにおいて数多のソ連戦車を屠っていた。

「天気良好、異常なし！・・・イワンの戦車潰してえ。」

そんなJ u r 87の操縦者席に座る1人の男。

牛乳が好きな彼の名はハンス・ウルリッヒ・ルーデルという。

今、彼はクイラ王国の空軍基地から国境付近の偵察に出ている。



「何言ってるんだルーデル。もうソ連は存在しないぞ？」

なにやら物騒なことをぼやくルーデルをたしなめるこの男の名はガーデルマン。ルーデルの後席を務める相棒である。

「まあそうなのだが・・・む？」

ガーデルマンに返答しつつ、索敵をしていたルーデルは何やら土煙を上げている一団を発見した。

その一団は同盟国軍か敵軍かはよくわからなかったが、どうやらクワ・トイネ公国市民が襲われている様である。

「・・・行くぞ、ガーデルマン。」

と、一言だけ告げると相棒の返答も待たずに機体を旋回させるルーデルであった。

何が起こったのか、最初はイマイチよくわからなかった。

後にこの時現場にいたとある少年はこう語った。

それ程その状況は彼等にとっては常識はずれもい所だったのである。

「ギャアアアアア！」

「ウグアアア！」

身体に大きな穴を開け、馬上から崩れ落ちる屈強な男達。

無論その体は生命活動を維持していない。

「うっー！」

避難民の内の1人である少年、パルンは咄嗟に妹の目を塞ぐ。

敵のお腹のあたりからは出てはいけないうものが出ていたからだ。まだ小さい妹には刺激が強すぎる。

「なっ、何だ☒」

敵の指揮官らしき男が恐慌状態の馬を落ち着かせながら上空を舞う不思議なワイバーンを睨む。

パルンも彼と同じくあの不思議なワイバーンについて考察していた。

(公国軍じゃないことは確かだけど、じゃあ何処の……?)

その時、予備役召集で徴兵されていった親父が言っていたことを思い出した。

『確か、今回は公国の新しい同盟国である日本とか『ドイツ』という国が参戦してくれるそう。なあに、その2カ国は驚くほど強いらしい。そんなに心配そうな顔をしなくても大丈夫さ。』

と言っていた時、父は同時にドイツ軍のワイバーンを示すマークも見せてくれた。

そのマークは、今上空を乱舞するワイバーンに付けられているものと同じだった。

「ドイツ軍が……ドイツ軍が助けてくれたんだ！」

その後、ドイツ軍により助けられた彼等は無事クワ・トイネ公国軍基地にたどり着くのであった。

## 侵攻に向けて

クワ・トイネ公国 城塞都市エジエイ

クワ・トイネ公国の絶対防衛圏に基づいて建設された城塞都市、エジエイ。

城内に湧き出る泉や膨大な備蓄食料で兵糧攻めは不可能で、高く堅牢な城壁は力押しも不可能にする。

まさに難攻不落といったこの街にはさらに駄目押しと言わんばかりに公国軍主力であるクワ・トイネ公国軍西部方面師団3万人が駐屯していた。

「ノウ將軍。大日本帝国陸軍及びドイツ国防軍の方々が来られました。」

「来たか・・・通せ！」

政府からの命令とあり一応協力してはいるものの、ノウは日独の事が好きではない。

何せ、ドイツはわが国の領空を侵犯してから我が国に国交開設を要求し、今も大日本とかいう舐めた名前の国と共に我が国を土足で歩き回っているのだ。

しかも、隣国であり重要な同盟国であるクイラ王国では何と日独軍の基地が4個もあるという。

それは形を変えた侵略ではないか、と気分を害しているのである。

ロデニウス沖大海戦の戦果報告の際も海軍の面々と子供のホラ話かと大爆笑したものだ。

今回も日独両軍合わせて精々2万程度の軍勢を送つて来ているようだが支援などいらんと徹底的に日独に対して否定的である。

何よりも政府が日独に援軍を頼み、軍事通行権まで与えたことが気に入らない。

我が軍の力を信用していないように思える。

・・・何にせよ、我々がロウリア王国軍を退けるので彼らの出番はないと言うのがノウの考えである。

そこまで考えるとコンコンと扉がノックされる音がした。

「どつどつ。」

ノウが入室を促し、立ち上がつて日本軍とドイツ軍を迎える。

ドアから入つて来た人間は6名。

「こんにちは。私は大日本帝国陸軍第14師団師団長、三枝と申します。」

「私はドイツ国防陸軍第六装甲師団師団長、イーベルと言います。」

その時、ノウは衝撃的な信じられない光景を見た。

日本軍は、何と枯れ草のような色の服を着ているのである。

ドイツ軍も日本軍よりはマシだがその制服は黒くて地味だ。

これが日独の將軍だと言うのか。

先ずは社交辞令の挨拶を交わしてから、ノウにとつての本題を切り出す。

「ご覧くださいお二人共。ここ、エジエイは我が国が何年もの歳月と威信をかけて建設した難攻不落の一大要塞です。如何にロウリア軍と言えども、ここを落とすことは不可能でしょう。」

「我々はロウリアの侵略を受けていますが、国の存亡をかけて一矢報いようと我らの誇りをかけて戦っております。我々がロウリア軍は必ず退けます。」

日本とドイツの皆様は後方の野営地から支援をお願いいたします。」

ノウは遠回しもせずに直接『余所者は引つ込んでろ』と日独の將軍に告げる。

日本の將軍は顔色一つ変えていないが、ドイツ軍の將軍が怒っていることは顔を見れば明らかであった。

周りの側近たちは外交問題にならないかとヒヤヒヤする。

「……わかりました。では、我々からもひとつお願いがあります。」

少し考え込んだ後、日本軍の將軍、三枝がノウに話しかける。

「敵の位置・人数などを司令部に伝える必要があるので我々の部隊から観測要員をエジエイに置かせていただいてもよろしいでしょうか？」

又、クワ・トイネ公国軍の動きを把握している方との連絡を密にしたいので通信士の

同行の許可をお願いします。」

「観測要員?・・・まあ、貴国も戦局を本国に伝えなければならぬでしょう。わかりました。」

最低限の挨拶と情報交換をして解散する。

最後までドイツ軍の将軍はしかめっ面であった。

「何なんだあの将軍は!!」

ドイツ軍第六装甲師団の参謀が怒る。

「難攻不落の一大要塞だあ?セヴァストポリみたいに要塞砲でも配備してから言えつてんだ!!」

「よせ。みつともない。」

ここは日独軍合同司令部である。

今後は日独共同作戦になる為連絡を密にする為に設置された司令部において先程の会談についての話し合いが行われていた。

「・・・まあ、我々は『支援しろ』と言われたのです。ご注文通り『支援』してあげましょ

う。」

日本軍の三枝中将がそう提案する。

「そうですね。何、『支援』をすれば良いのだからな。」

イーベルもそう言うのとドイツ軍の参謀も矛を収める。

「さて、ではそろそろ作戦の最終打ち合わせを始めましょうか。」

「うむ、そうですね。」

そして日独軍は今回の侵攻作戦こと緑作戦について最後の打ち合わせを開始するのであった。

緑作戦。これは日独軍によるロウリア王国侵攻作戦である。

日本軍二個師団、ドイツ国防軍一個師団、航空機800機、艦船50隻が使用されるこの作戦は先ず最初にここ、エジエイに迫るロウリア王国軍を撃破することから始まる。

その為、日独軍は入念な事前準備を開始していた。

エジエイより少し後方 日独軍野営地



エジエイの街の少し後方に位置する日独軍の野营地。

ここで、支援の準備が行われていた。

「にしてもクワ・トイネの將軍様は優しいお方だねえ犠牲は自分達が全部請け負うつて。」

皮肉交じりに呟く彼は工具を片手に鋼鉄の虎を整備する。

エジエイにおけるノウの言動はたまたま司令部近くを通った兵士を通じて日独軍に大きく拡散されていた。

「そうだねえ。」

そんな熟練整備員の皮肉を聞いて頷きながらシュトロハイムはエジエイの街を眺めていた。

「この常識じゃあ一大要塞なんだろうけどねえ。」

大砲が一門もない要塞と言うのも新鮮だなあと思いながら支給された酒を煽るシュトロハイム。

「そうなんだろうよ。まあ俺らからすりゃああれよりもスターリンググロードの方がよっぽど要塞……いや、あそこは魔境か。」

「ははは。違いだね。」

熟練整備員と雑談しながらシュトロハイムは綺麗な星空と展開する自走砲の一团を

眺めるのであった。

## 緑作戦その1

クワ・トイネ公国 城塞都市エジエイ

「これはマズイな・・・。」

クワ・トイネ陸軍將軍ノウは焦っていた。

それは別に兵糧が尽きそうだとか、城壁が突破されたとかそう言うことではないのだが、確かに戦闘に影響を与えるもの。

そう、兵の士気がどんどんと低下しているのだ。

その理由は、今朝もやってきたロウリア軍の300程度の騎馬隊である。

ロウリア軍は大挙して押し寄せる事はせずに少数の騎兵隊を繰り出しては挑発行為を繰り返すのだ。

そのせいで兵はろくな休息も取れず、どんどんと士気と体力を消耗しており、このまま行けば敵本隊到着まで兵がもたないだろう。

「くそっ！卑怯な真似をしておって・・・。」

膠着状態に陥り、ろくな打開策も思い浮かばない。

ノウがイライラしていると突然ドアがノックされる音が部屋に響いた。

「失礼します。日独軍から連絡が入りました！」

「読め！」

「はっ！『これより我が軍は支援を開始する。支援にクワ・トイネ兵を巻き込まぬ様に城内に待機するように願う』との事です！」

快く思っていない日本とドイツからの連絡。しかし、彼からすればまさに天から垂らされた蜘蛛の糸だった。

「ふんっ！やはり手柄が欲しいのか。……まあ良い。彼奴等の戦い様を見るのもまた一興だろう。許可すると伝えろ！」

胸中の感情は全く出さずにノウは日本の支援攻撃を許可する旨を伝令兵に伝えるのであった。

クワ・トイネ公国 エジエイ後方 日独軍野営地

「クワ・トイネ軍の伝令兵によると『許可する』だそうです。」

大日本帝国陸軍三枝中将はドイツ国防軍イーベル中将と共に伝令兵の報告を聞く。

「後は実行するだけですな。」

「うむ。そうですな。」

2人の中将はそう少しだけ言葉を交わすとエジエイの奥に在るであろうロウリア王

国軍の方向を見据える。

「・・・合同作戦本部からは？」

「すでに作戦実行許可は下りていきます。閣下達の命令が下り次第緑作戦は開始されます。」

「そうか。」

そう短く返すとイーベルは三枝の方を見る。

三枝は無言で頷いた。

「・・・よし、では作戦開始！自走砲大隊は砲撃を開始せよ！」

「了解！」

通信士が急いで通信機に駆け寄り、自走砲大隊に命令を送る。

それから少し経つと、後ろの小高い丘から砲撃の重低音が木霊した。

こうしてロウリア王国を滅亡に追い込んだ侵攻作戦、『緑作戦』の火蓋は切つて落とされたのであった。

ロウリア王国軍 野営地

その日は雲が少ないいい天気であつた。

朝は少し肌寒く空気は乾燥しているが澄み渡り、遠くの空まで見渡せる。

ジューンファルフアは少し高い丘から、二万の兵がたむろする野営地を見て、深呼吸する。

空気がうまい。

士気旺盛な二万の兵に加えギムで奪った潤沢な兵糧。唯一の脅威のワイバーンもなぜか使つてこない。

後は本隊が到着するまで待つだけの簡単なお仕事だ。

と、彼は思っていた。

しかし、次の瞬間にはその想いは覆される。

『ズドーン』

文字で表すならばこの様な感じか。

まるで巨大な爆裂魔法が発生したかの様な轟音が静かな朝のクワ・トイネ公国に響いた。

「?何だ?」

ジューンファルフアは辺りを見渡して音源を探そうとするが、それらしき物は見当たらない。

「?」

不思議に思っていると、突然野營地の真ん中付近で爆発が起こったのであった。

「エンジンあつためろ！」

「全員乗り込んだか!?」

ドイツ国防軍第六装甲師団第六戦車連隊は今、進撃に向けて急ピッチで用意を進めていた。

事前の計画では自走砲大隊が10回斉射をした後は装甲擲弾兵・日本軍と共に前進を開始する手はずになっていた。

既に二回斉射され、現在は3回目の準備中だ。

シユトロハイム率いる中隊も現在急ピッチで進撃への最終確認をしている。

「今回の稼働率は60%……まあまあいい方……かな？」

車長用ハッチから頭を出して中隊を見渡す。

数両が足回りのトラブルで出撃できそうになかったが、大半がこれから始まるギムマでの進撃に向けてエンジンをあつためていた。

「あ、日本軍の戦車大隊じゃないか。」

自分の中隊に属するIV号戦車H型の奥に小さめの緑色の戦車が見える。

5号戦車を知るドイツ軍内では『あれが中戦車?』ともつばらの噂だった日本軍の九七式中戦車がお行儀よく整列していた。

「なんか・・・Ⅱ号とかⅢ号を思い出しますね・・・。」

「そうだねえ。」

そんなこんな砲手のデーターと雑談をしていると三度目の自走砲大隊の砲撃音が辺りに木霊するのであった。

「な、なんだアレは!!」

シウトロハイム達が雑談をしていた頃、ロウリア王国野営地は大混乱だった。

なんせ、何処からか爆裂魔法の様な音がしたと思えば何故かいきなり野営地で大爆裂が起こるのだ。

エジエイからの攻撃と一時は考えたが爆裂の規模からして魔導師が何人いれば事足りるのかわからない。

「くそっ！くそっ！なんなんだアレは!」

その謎な爆裂魔法は一度爆裂するたびに屈強な兵士を何人も吹き飛ばす。

特に野営のために密集していたこともあり被害はどんどん拡大していた。



「ぬ、ぬう……!!」

命令をしようにもここから見える限りでも兵士は完全に恐慌状態になっており、命令が何処まで通るか……。

その時、エジエイのさらに奥に土煙が見えた。

「突撃いいいい!!!」

勇ましく鳴り響く進軍ラツパは兵達の士気を鼓舞する。

大日本帝国陸軍第14師団総勢15000人はドイツ国防軍第六装甲師団所属の装甲擲弾兵と共にIV号戦車H型やパンター、そしてチハに護衛されつつロウリア王国軍の野営地を目指す。

その大きな歓声は大地を震わせ、鋼鉄の騎馬隊はその巨大な車体とエンジンの重低音でロウリア兵を威圧する。

「装填手！次弾装填！弾種榴弾！」

シウトロハイムは装填手に榴弾の装填を指示した。その命令を聞いた装填手は急いで狭い車内で7.5センチの砲弾を詰める。

辺りを見渡すと先頭付近の歩兵や装甲車がロウリア軍に突っ込み、混戦になろうとし

ていた。

「あちゃーこれじゃあもう砲撃は無理かもしれんね。」

砲手のデイータに告げつつもう一度先頭の方を確認するのであった。

「ウグアツ！」

「ぎゃあつ！」

ロウリア王国東方征伐軍先遣隊は日独陸軍により攻撃を受けていた。

三八式歩兵銃やMP40で武装した日独軍の兵士は鎧や兜、剣に弓矢で武装したロウリア兵をどんどんと殺戮する。

後方からの突入してきた戦車隊もまだ歩兵が突入していない場所に砲撃を加える。

その恐ろしい光景をノウはエジエイの城壁から見ていた。

「な、何だあれは・・・？」

鋼鉄の馬に魔導師が何人集まれば良いのかすらわからないと本職を混乱させるほどの爆裂魔法。

更には鍛え抜かれた強敵であったはずのロウリア王国兵がまるで赤子の手をひねるかの様に日独軍の兵士に屠られていく。

その光景はまるで悪夢の様だ。

「あの馬は・・・爆裂魔法を、発射できるのか・・・？」

爆裂魔法を発射する。そんな超兵器を搭載した鋼鉄の馬を何匹も有する日独軍。

ノウの中に日独軍に対する畏怖の感情が芽生えてきていた。

「アレは、一体何なのだ・・・？」

そして、ロウリア王国東方征伐軍先遣隊はノウ達エジエイの軍人、市民に見守られつつ日独軍に大敗するのであった。

同じ頃 クイラ王国 日本陸軍航空隊基地

荒野が広がり、食料をクワ・トイネ公国に依存していた弱小国家。クイラ王国。

しかし、今は日独の支援の下近代的なインフラが整えられ今や弱貧国クイラは過去の物となっていた。

そんなクイラ王国の西の大都市、ルーモス近郊に設置された日本陸軍飛行場。

立派な兵舎に大きな格納庫。更には内地で科学者が死にそうになりながら開発した試作型電探も配備されているこの基地の飛行場には多数の飛行機が駐機されていた。

それらはエンジエイから送られてきた作戦開始の報を受けて片翼一基ずつ搭載されたエンジンに火が灯り、轟音を発する。

その名も九七式重爆撃機という。

段々と速度を上げて滑走路を進み、澄み渡った青空へ次々と飛び上がっていく重爆は護衛の一式戦闘機を携えてロウリア王国へ向かうのであった。

ロウリア王国 ビーズル

ロウリア王国近辺に位置する都市、ビーズル。

この都市はロウリア王国の兵器を生産する重要拠点である。

それだけにインフラ整備も優先して行われていたため人口も多く活気に溢れていた。

「?何だアレ?」

そんなビーズルの主要街道を歩いていた一人の男が何かの異常に気づき、空を指差す。

彼につられて多くの人々が空を見上げた。

眩しい太陽と澄み渡る青い空。その中に浮かぶ、大きな大きなワイバーンの影。

「王国軍か?」

と、誰かが呟いた時。

その巨大なワイバーンは黒い何かを大量に投下し始めるのであった。

その日の午後にはビーズルの街は燃え上がり、街として、軍需品生産拠点としての能力を失なった。

焼けた街には煉瓦造りの建物だけが虚しく聳えているのであった。

## 緑作戦その2

ロウリア王国 クイラ王国との国境付近の街

「暇だなあ……。」

? ロウリア王国軍南部防衛軍に所属する男、マジネがぼやく。暖かい春の陽光と、麗らかな景色。

? ロウリア王国南部クイラ王国との国境付近は北部での激戦が嘘のように長閑な農村風景が広がっていた。

「しっかし楽な任務だよなあ……ずっと槍持って立ってるだけだぜ?」

? 同じ見張り台に立っている相方のクルスが相方のマジネのぼやきに反応し、言葉を返す。

? その後はお互い何も話さず業務に没頭する。

? マジネはぼーっと遠くの山を見ていた。

? 春に入ってから雪が溶け始め、白が後退を始めた山は美しく、雄大だ。

? あの山から豊富な雪解け水がこっちの平野にながれこみ、前面に広がるアデルンネの森とともに豊かな土壌を作り農業を促進する。

? そのおかげでこの辺りはロウリア王国有数の穀倉地帯となっている。

「・・・ん?」

「どうした?」

クルスが何か異変に気付いたようだ。

? マジネもクルスが見つめる方に目を向けてゆっくりと観察する。そこは、鬱蒼と広がるアデルンネの森が広がっている。

「なんだよクルス。何も無いじゃないか。」

? と言ったその時、突如として森の中から灰色に塗られた『何か』が猛スピードで飛び出してきた。

? それらは頭のような所に数字と『クイラ王国の国籍マーク』が描かれていた。

☒

? あまりに突然の出来事に固まってしまったマジネ。しかし、クルスの対応は早かった。

「敵襲——!!!」

? 物見櫓に備え付けられた鐘を叩いて鳴らし、辺りに敵の攻撃が行われていることを知らせる。

? 先程までのんびりと麦の作付け準備をしていた農民達は突如発せられた警戒を促

す鐘の音に驚き、慌てふためく。

？ そうこうしているうちに、その灰色の何かは大量に姿を現しておりさらには大量のクイラ王国兵がワサワサと森から湧き出てきていた。

「ば、バカなっ……！」

？ 先程までの余裕はどこにいったのかと言いたくなるほどに慌てふためきながら矢を防ぐために木の盾を物見櫓の柵に立てかけるマジネ。

？ ちらつと見えたクイラ軍の灰色の何かが何かを高速に連射しているのが見えた気がした。

「リシア中将、作戦は順調に進んでおります！」

「そうか。御苦労。」

？ クイラ王国軍第1戦車師団司令部に座る1人の壮年の男。

『リシア中将』と呼ばれたこの男はクイラ王国軍第1戦車師団長である。

？ 彼は数ヶ月前から始まった大軍制改革の際に昇進した若手幹部であり、日独よりもたらされた新戦術を最も理解していると判断された男だ。



? リシアは師団本部の設置されたクイラ王国側のアデルンネの森付近にある小高い丘から進撃中の部隊を確認する。

? ドイツと日本より買い付けた1号戦車と九七式中戦車は慌てて集まってきたロウリア王国軍の兵士を吹き飛ばし、瞬く間に敵防衛線を崩壊させる。

? 彼らを通った後の道は随伴歩兵が綺麗に『掃除』をしていき、どんどんと村を制圧していく。

「この後はロウリア王国南部の大都市、リパを目指して進撃することになります。」

? 副官が今後の侵攻計画をリシアに伝える。

「そうだな。．．後は我が国も自力で航空支援ができるようになれば良いのだが、こればかりは仕方がないか。」

? と少し不満を漏らすリシアだがそれが今は叶わぬ願いだということも知っている。

? 再び双眼鏡で戦況を確認すると、すでに村は占領し終わっていた。

ロウリア王国はこの予期していなかったクイラ王国軍の進撃により手薄だった南部に大打撃を受けて大混乱に陥ることとなる。

クワ・トイネ公国　ロウリア王国占領下のギム

？かつては綺麗な街並みと豊かな食料で繁栄していたクワ・トイネ公国国境付近の街、ギム。

？だが、今はロウリア王国軍の手により荒らされ尽くし捌られ捨てられた遺体や木片・瓦礫が散乱する廃墟となっていた。

？そんなギムに駐屯するロウリア王国東方征伐軍本隊は急ピッチで防衛の準備を進めていた。

？木造・レンガ造りを問わず建物を破壊して素材を確保し、街の入り口となる通路を塞ぐ。

？東方征伐軍本隊残存戦力1万は来るべき日独軍との交戦に向けて蠢動を開始していた。

？彼らの士気は旺盛でとても頼もしい。それにこういう様に防衛陣地に立てこもった敵を落とすには3倍の兵力が必要という様にここを落とすためには最低3万が必要だろう。

？クワ・トイネ公国に安全保障をしてもらう様な国がその様な大軍を揃えられるわけがない。

？ロウリア王国軍は戦う前から勝利を確信していた。

?しかし、彼らの元には着実に死が近づいてきているのであった。

大日本帝国第14歩兵師団 砲戦車中隊 中隊長車

?かつての世界では東洋の列強として亜細亜に君臨した帝国、大日本帝国は宇都宮を拠点とする陸軍第14師団。

?そこに所属する砲戦車中隊はチハを改造した試製二式砲戦車を試験運用するためにこの第14師団に臨時編入されていた。

?中隊長、西大尉はハッチからは顔を出し、遠くを走るドイツ軍の戦車を見て目を輝かせていた。

「うひゃー!武田!あれ見なよ!五号!五号戦車だぞ!」

「そうですね。あなたが邪魔で見えませんが!」

?砲手の武田はまた始まったと言わんばかりに溜息をつきながら適当にあしらう。

?実は西大尉は戦車マニアとして部隊内でも有名なのだ。

「おつ!あれは近いうちに我が国でもライセンス生産されると噂の四号H型ではないか!」

「どつからそんな情報仕入れてくるんですか?」

?これから戦闘だというのに全く緊張感のない西を見て呆れる武田。

? 現在部隊はエジエを離れロウリア軍の立て籠もるギムの街を目指して進軍して  
いた。

? 合計20000にも及ぶ歩兵と大量の戦車が進む光景は壯観である。

「・・・よし、じゃそろそろ真面目にしますか。」

「いつも真面目にしてくださいよ・・・。」

? 武田の諫言を聞きながら西は進行方向・・・ギムの街の方角を向くのであった。

クワ・トイネ公国　ギム近くの空

? 空を埋め尽くす・・・と言えば若干盛り過ぎかもしれないが、そう表したくなるよ  
うな大量の航空機がギムを目指して飛行する。

? その機種と国籍は合計二つ。

? Ju-87ことスツーカーと九九式襲撃機。詰まる所日本軍とドイツ軍である。

? クイラ王国の基地から飛び立った合計90にも及ぶ大編隊は地上にいるいかなる  
ものも圧倒する。

? そんな編隊の一角のスツーカー隊に、1人の男がいた。

「いいか? ガーデルマン。逃げる奴は敵だ。」

「じゃあ逃げない奴は？」

「よく訓練された敵だ。」

「結局敵なのかよ。」

？そう、ソ連人民最大の敵ハンス・ウルリツヒ・ルーデルである。

？彼は自らのスツーカ編隊を率いてギムの街に爆弾のプレゼントに向かっていた。

「む。どうやらお喋りもここまでのようだな。」

？と、ルーデルは眼下に広がるギムの街を見据えるのであった。

？始まりが日本かドイツか。それはわからない。

？しかし、航空機から投下された爆弾はロウリア王国軍兵士を容易く吹き飛ばし、レングヤや木片で作られたバリゲートを再び残骸に戻す。

？爆弾を落としかった機体は搭載された機関銃での銃撃も加える。

？ロウリア王国軍は逃げ惑うことこそできるもののろくな反抗もできずにバタバタと倒れてゆく。

？数騎のワイバーンが迎撃のために空に上がるが逆に日本軍の一式戦闘機やFW190に迎撃されその肉片を街に散らす。

？日独の陸上部隊がギム付近に到着した頃にはギムの街は燃え上がり、ロウリア王国

軍は大打撃を受けていた。

「クソっ！」

？ロウリア王国軍先遣隊副将アデムは司令部跡地で少し焦げた机に拳を思いつき叩きつけた。

？かつては作戦会議のために集まっていた参謀や通信兵は大半がいなくなっていた。

「……」

？アデム同様激しい空襲を運良く生き残ったパンドールは険しい顔をして椅子に座っている。

？現在生き残った参謀や士官総出で被害を調査しているがその被害状況は見ただけで卒倒するような状態だろう。

？なんとか築き上げたバリケードも大半が破壊されており、日独軍の侵入を妨げるものはない。白兵戦を挑んだところでたいした戦果はあげられないだろう。

？更には日独軍はなんと2万近い歩兵と大量の魔獣を引き連れているようで兵達の士気は最悪。まだ何とか軍隊としての体裁を保っていることが奇跡に思えるほどだ。

「……降伏。」

?パンドールが小さく呟いた。

?その言葉が耳に入ったアデムはピクリと体を揺らせる。

「・・・気のせいかもしれませんがパンドール將軍、今しがた『降伏』なる言葉が聞こえた気がしたのですが。」

「ああ。聞こえただろうな。声に出したのだから。」

?パンドールはアデムに諭すように話しかける。

「はつきり言つて、もうこれ以上戦つたところで無駄だ。アデムよ。お前は聡いのだが、日独と我が国の力の差はとうの昔に理解しているだろう。」

クワ・トイネ公国攻略戦は『失敗』だ。」

「ふざけるなあ!!」

?アデムがパンドールの胸元を掴み、凄まじい形相で睨みつける。

?騒ぎを聞きつけてやってきた兵士達は不安そうにその様を眺めていた。

「何が失敗だ!東方征伐軍はまだ10万を越す兵力を持つている!!?まだまだ戦局はまき返せる!」

「・・・それは、あくまで国土防衛用の兵力も削つた場合の話だろう。ならばアデム。お前が逃げて戦局を巻き返せ。・・・私が残存部隊を引き連れて日独に投降している間にな。」

「……ふん。臆病風に吹かれたか。」

? 捨てゼリフを吐きながらアデムは司令部から荒っぽく退室する。

? 司令部に残されたパンドールは様子を伺っていた兵士に短く命令を告げる。

「降伏だ、降伏。我々の負けだ。」

こうして日独連合軍はギムにて三代将軍の1人であるパンドール以下多数の捕虜を獲得し、緑作戦の初戦は日独軍の大勝利となった。



## 緑作戦その3

ロウリア王国 王都ジン・ハーク

? ロデニウスの西方を支配する王国、ロウリア王国。

? 列強からの支援を取り付け、万全を期して侵攻を開始したこの国はクワ・トイネ等4カ国を滅ぼしロデニウスを統一する・・・筈、であった。

? ロウリア王国王都ジン・ハークにある城、ハーク城では軍事会議が開かれようとしていた。

? 司会進行係が始めの挨拶をして会議の開催を宣言する。

? その次は司会に促され將軍パタジンが現状説明のために立ち上がった。

「・・・皆の衆。会議に集まっていただけ感謝致す。

・・・クワ・トイネ公国侵攻作戦の現状を説明する・・・。」

? いつもの自信に溢れた彼は消え去り、疲れ切って憔悴した様子のパタジン。

「今回の戦争において、我が国はクワ・トイネ公国のギムを占領した。そして、東方征伐海軍合計4400隻が経済都市マイハークを目指して出撃した。そこまでは良かった・・・。」

「・・・そこにおいて姿を現した、日本艦隊20隻により我が軍の艦隊は半数以上が沈められワイバーン250騎も同時に失った。

? 更にその後、東方征伐軍はエジエイ攻略に向けた先遣隊として東武諸侯団を差し向けた。

?・・・だが、展開して数日で日独軍による攻撃を受けたと悲鳴のような報告が入ってから通信が途絶。

? ギムに残っていた本陣も、日独軍の猛攻により損耗しパンドール將軍以下残存将兵の多くが降伏した・・・」

? ここまで聞いただけですでに会議室はお通夜のように静まり返っている。・・・しかし、まだ凶報は残っているのだ。

「更には先遣隊の通信途絶と同じ日にピースルが謎の攻撃を受けて灰となった。・・・今でも、復旧の目処はついておらずこれ以降は軍需品も不足するだろう。

?・・・そして、南部だが・・・」

? パタジンは説明をすることを躊躇い、一旦呼吸を挟む。

? そして、意を決して報告を続けた。

「クイラ王国軍は総勢3万ほどの軍勢と謎の鉄竜を動員して電撃的に南部を占領。第二防衛ラインも突破されりパ陥落も時間の問題だろう。

?・・・自らの手勢とともに帰還したアテム將軍は東方征伐軍予備隊招集の後に再編成を主張しているが、我が国は侵攻するどころか逆に侵攻を受けている。

?・・・もう、クワ・トイネ公国に侵攻する力は残っていない。」

『力は残っていない』

?この言葉を聞いて多くの参加者が悔しさのあまり唇を噛む。

?特に弱貧国であるはずのクイラ王国にここまでしてやられているということが気に入らなかつた。

?それから、会議はお通夜の雰囲気を通り越した重苦しさを持つも今後の防衛計画についてに話が移行した。

?二正面作戦を強いられる事になったロウリア王国は戦力をどうしても2つに分けねばならず、なかなか方針が定まらない。

?1つの案が出たと思えば反対意見が出てその案が立ち消える。

?あーでもないこーでもないで延々繰り返した結果、東部はビーズルに次ぐ大きな街、ルーマを中心として、南部はリパを中心として強固な防衛線を築く事に決定した。

?しかし、この作戦は失った戦力を埋める為王国西部・北部の戦力を東側に多く移動させてしまうこととなってしまう。

?この事の不味さに気づいたのもう少し時が経ってからだつた。

約一ヶ月後の日の早朝

ロウリア王国ナズミ浜付近の草むら

? ロウリア王国王都ジン・ハークより西に凡そ5キロほどの場所に位置する広い広い浜、ナズミ浜。

? この浜は遠浅の海であり、干満の差が激しいことでも知られる。

? ロウリア王国の農村に住むとある少女はそんな浜の近くの草むらで草かんむりを作っていた。

(すぐに終わると言われていた戦争は拡大の一途をたどっている・・・ビーズルの方では何やら恐ろしい出来事があったというし・・・)

? 彼女の住む村でも男衆が徴兵され軍人となり前線へ向かっていった。

? 今日も彼女の幼馴染を含む5人の青年が軍人となる。

? その為、彼女は幼馴染の安全と武運長久を願う草かんむりを作るのであった。

「はあ・・・早く戦争なんて終わってしまえばいいのに・・・。」

と、呟いて彼女は海の方を見る。

? そこにはいつもと変わらない雄大かつ美しい大海原が・・・。

「……あれ、何かしら……。」

?しかしこの日の海は遠くの方に、黒い何かが浮かんでいるのが見えた。

『王都防衛本部！王都防衛本部！こちら偵察騎！敵は凡そ50隻の船団を構成し進撃中！繰り返す！敵はおよ……っ！あ、アイツら、船からワイバーンに攻げ』

?その後、爆音がした後に偵察に出たワイバーンとの通信は途絶えた。

「これはマズイぞ……。」

?ちょうどパタジンがいけない時に送られてきた恐ろしい報告。

?その後、防衛のために緊急展開した部隊からも悲鳴のように報告が上がってくる。

『ダメだっ！敵の数が多すぎる！』

『王都防衛本部！このままでは持たない！援軍を！』

「ばっ！パタジン将軍を呼べ！」

?通信隊の熟練兵が叫ぶと一人の若手兵が飛ぶようにパタジンを呼ぶために通信室を飛び出して行った。

大日本帝国陸軍第1師団

? 帝都東京に駐屯する帝国陸軍第1師団。

? かつての東京鎮台を祖先と持つ帝国陸軍最古参のこの師団は上陸戦に勝利後に大急ぎで支度を整えていた。

「急げ急げ！」

? 揚陸艦から多数の自動車や大砲を荷揚げする。

? 彼らがこんなにも焦る理由。それはこの師団の請け負う任務が緑作戦の要となるからである。

? それほどまでに重要なこの師団の任務。それは早急な王都の包囲、攻略である。

? 偵察機からの情報によると既にロウリア王国軍はルーマなどの都市近郊に軍を集め要塞化しており、第14師団と第6装甲師団では突破に時間がかかる。

? その為、手薄な後方に上陸し王都を急襲し陥落させる。それがこの作戦の要だ。よって、何よりも移動速度が大事になる。

? その為、帝国陸軍で現状最も機械化が進んでいる第1師団がこの任務に選ばれたのである。

? 又、この作戦では護衛として南雲機動艦隊が近海に展開しており王都ジン・ハークを空襲し敵のワイバーンを叩き落とす事になっている。

?その後、各種物品の揚陸を終えた帝国陸軍第1師団は大急ぎで王都ジン・ハークを  
目指すのであった。

王都 ジン・ハーク

?日本軍が王都よりわずから5キロの地点におよそ1万人も上陸した。

?その事実は王都防衛本部を震撼させていた。

「すぐにビーズルに展開していた部隊を戻らせる!」

?吠えるパタジン。しかし、通信士からの返答は芳しくない。

「そ、それが……『日本軍上陸とほぼ同時に敵の攻撃が始まり撤退しようにもできない』

との事でした……。」

「な、何……?」

?フラフラとよろめきながら体を壁に預ける。

「くそっ!」

?思いっきり机を殴るパタジン。その顔は焦りにまみれていた。

「不味いぞ……このままでは王都が危ない……!」

?ここ数日間ルーマ近郊で日独の偵察が活発化していたため敵の目標はルーマと確  
信していたパタジンは酷い喪失感に襲われていた。

? 部隊を引きもどそうにも南にはクイラ王国。東には日独。しかも攻撃まで行われているのだから、どこからも部隊は割けそうにない。

? 四面楚歌。万事休す。これらの言葉がとても似合う状況だ。

「なんという事だ・・・。」

? 呆然として呻くパタジンであった。



## 終戦

ロウリア王国北方海上 南雲機動艦隊

? 風上に向けて全力で進む巨大な空母の一団。

? 周囲では彼女達を護衛するために何隻もの艦艇が随伴している。

? それらは皆マストに旭日旗を掲げており、日本海軍に所属していることを示していた。

? ロデニウス沖大海戦を含む数多の作戦に参加した歴戦の猛者たちが揃う、世界最強の艦隊。南雲機動艦隊。

? この艦隊は今、陸軍支援の為に発艦を開始しようとしていた。

「各種計器よし! 各部異常なし!」

? 航空母艦加賀制空戦闘機隊の中隊長である安室少佐は出撃に備え愛機の最終確認をしていた。

? 計器や翼に異常がないかを確認め終えると、風防を閉じて発艦の時を待つ。

? 栄二一型の腹に響く重低音をBGMに出撃前の高揚した気分を落ち着かせる。

? そうこうしていると、水兵の合図を受けて艦隊旗艦である巨大空母赤城から一機の

零戦が飛び立って行った。

?それを皮切りにここ加賀を含めた艦隊の各空母からも鋼鉄の龍は大空へと羽ばたき始め、少し経つと艦隊上空には見事な大編隊が出来上がっていた。

?安室少佐を含む航空隊は美しい編隊を組みつつこの戦争に終止符を打つためにロウリア王国の王都を目指すのであった。

ロウリア王国 王都 ジン・ハーク

?ロウリア王国の首都にしてロデニウス最大の都市、ジン・ハーク。

?ロウリア王国において最も重要なこの都市の防衛の要である第2、第3竜騎士団は王都上空を警戒する為に旋回をしていた。

?新人騎士であるターケナインも先輩たちに混ざって王都上空の警戒をしていた。

?眼下の街から向けられる憧れの視線。それを全身に受けて自らの仕事を誇りに思いながら先輩に続いて哨戒する。

「んっ。」

?その時、ふと北の方角を見た時に何やら遠くに黒い点々が見えた気がした。

?すると、今度はその点がどんどんと大きくなり数を増やしていく。

? その不思議な光景にしばし絶句していたが、その瞬間日本海軍と戦闘をした海軍兵士の言っていたことを思い出した。

『日本のワイバーンはな、なんかちつさい黒い点があるなーと思って見てたらすつげえ勢いで大きくなつていくんだ。』

? そんな不思議な黒点が何個も何個も。そんでそいつらがみんなみな．．．』

? あの時は話半分にししか聞いていなかったが、今は違つた。

「まさか．．．あれは日本軍．．．」

? その時、日本軍らしいワイバーンの翼のあたりが小さく爆発したと思うと先程まで目の前を飛行していた先輩が飛竜ごとミンチになつて消えた。

「ツッ!」

? 突然の攻撃に動揺するが海軍の証言をもとにある程度訓練を積んでいた彼らは日本軍の攻撃に対処する。

? 多くの竜騎士が事前の訓練通りに出来るだけ予測不可能な動きをした。

? ．．．それなのに、先程すれ違つた際に更に3騎が消し飛んだ。

その光景を見た瞬間、彼の愛騎は勝手に行動を開始した。

「わわっ! おい! どうした!」

? 新人騎士ターケナインは突然急降下を開始した愛騎を止められずどんどん地上

に近づいていた。

「おいっ！相棒！何を勝手に．．．！」

？無様に地面に墜落してから、相棒を問い詰めようとする。

？その時にふと上空を見上げて、叱る気が失せるほどの衝撃を受けて唾然とした。

？彼の視線の先には、日本軍と交戦してはミンチとなり消えていく仲間たちの姿があった。

？100騎いた編隊は既に半数近くになっており、今も現在進行形でどんどんと数を減らしている。

？日本軍の巨大ワイバーンは不気味な唸り声をあげながら驚異的な速度で飛び回り味方たちをミンチにしていた。

？おおよそ10分が経った頃には竜騎士団は全滅し、空からその姿を消した。

？これにより王都上空の制空権は日本の手に渡ることとなる。

？零戦隊より敵迎撃機殲滅の報を受け取った艦爆・艦攻隊は王都上空に侵入し攻撃を開始した。

「ここが異界の王国の王都．．．。」

「結構綺麗なところっすね。」

? 眼下に広がる大きな城塞都市を見ながら会話を交わす2人の男。

? 操縦席に座り九九式艦上爆撃機を操るのは高木少佐で、後席に座り自衛用機銃を構えているのが渡辺兵曹である。

「それにしても、なかなか熱烈な歓迎だな。」

? と言いながら常に自分たちの後ろに飛んできて火の玉の線を見る。

? それは地上の城壁のようなところから飛ばされており、全く脅威には感じないものの邪魔ではあった。

「・・・よし、目標はあそこにするか。」

? と呟いて一気に高度を下げ始める高木機。

? 彼の機に異変があったことに気づいたのか敵の対空砲火が徐々に集まってくるが遅すぎて当たらない。

? そして、とある高度に達した時に胴体に抱えた爆弾を投下した。

? 吸い込まれるように対空砲火が集中している地点に落下した爆弾は轟音とともに熱線や炎を生み出し、そこにいた魔術師達を吹き飛ばす。

「・・・命中したかな?」

? 多くの魔術師が死亡したことなどつゆ知らず彼は次の攻撃目標を求め索敵を開始

するのであった。

？その後、敵の対空砲火が沈黙したことを確認した編隊は次の攻撃目標を竜騎士の飛行場と軍の駐屯地へと変えた。

？空を縦横無尽に駆け回る日本軍機は王都の防衛機能を壊滅させ、王都の市民に多大な恐怖を植え付けてから帰還するのであった。

ロウリア王国 軍部の緊急会議

「……。」

「……。」

「……。」

？多くの軍関係者が集まり、王都防衛の方策を練る緊急会議。

？今朝方顔を見かけた、又は話をした者が居なくなっているこの会議では誰一人と言葉を出さなかった。

？全員が気まずそうにお互いに視線を逸らし、黙っている。

？今回の攻撃において王都防衛騎士団は運良く墜落していた一騎を除き全滅。

? 防衛ラインとなる城壁もズタボロに破壊され、あちこちに穴が空いている。

? 陸軍基地も激しい攻撃にさらされてしまい、復旧の目処は立っていない。

? 敵は、入念な準備の元本気で王都を落としにきている・・・。

? 誰もがそう察した。

「・・・現在、歩兵部隊を非常召集中です。」

? 1人の幹部が報告を告げる。

? その声は虚しく静かな部屋に消えた。

「・・・そうか。ご苦労。」

? パタジンも労いの言葉をかけるが、はつきりいつてもうどうしようもないのではな  
いか、とも思う。

? 陸軍部隊も無傷かというと兵舎が攻撃されたことで甚大な被害を被っており、はっ  
きり言って当てにならない。

? 加えて日本軍は降伏・投降を呼びかけるビラを上空からばら撒いており、士気の低  
下まで招いていた。

? 全力で迎撃しても、日本軍を撃退するのには力不足ではないのだろうか・・・。

? そんな気分が各人に芽生え出していた頃、バタバタと走る音がしたと思えば扉を凄  
い勢いで開けながら伝令兵が転がり込んできた。

「・・・どうした。」

？パタジンが半ば予想はついているという表情のままその伝令兵に要件を問うと伝令兵はパタジンに自らが伝えるように命じられた情報を告げた。

「に、日本軍およそ一万人が王都を包囲するように展開しようとしています！」

大日本帝国陸軍第一師団 師団司令部

「何とか間に合ったか。」

？帝国陸軍第一師団長、泉中将は味方航空隊の攻撃を受けて燃え上がるジン・ハークの軍事施設と穴だらけでボロボロな城壁を見て呟く。

「これで降伏してくれたら楽なんですけどね・・・。」

？参謀がそう泉に話しかける。

「そうだなあ・・・。」

？仮に彼らが降伏せずにあの城塞都市に立て籠もったら泥沼の市街戦に突入するだろう。

？そうなればこちらにも多大な犠牲が出るかもしれない。

？その為、彼らはロウリア王国が降伏してくれることを望んでいた。



「……まあ、降伏してくれる可能性は低そうだな。」

？と、彼はボロボロな城壁の上で防衛体制を整えるロウリア兵を見ながら呟くのであった。

ジン・ハーク 作戦会議

？ 非常時に使用されるこの作戦室。

？ ここではパタジン以下各方面の幹部が集結し、対抗策を練っていた。

「現状、第1城壁は20カ所以上大穴が開いており防衛力の発揮は不可能。」

？ 第2、第3城壁も同様に損害を受けており王都防衛隊も宿舎を攻撃され多数の死傷者が出ています。」

？ 若手の軍幹部がパタジンに現状を伝える。

「現状、出撃可能な兵力は？」

「現在重装歩兵隊、歩兵の八割の招集が完了しています。」

？ 騎兵も当直の400騎と招集が完了したものを合わせて500騎でしたら何とか出せますか……。」

「……ただでさえ戦力が不足している中で無作為に出撃させるのは良くないな。今は待

機させておけ。」

？パタジンはアテム将軍が提出した日本軍の戦い方を思い出していた。

（確か、日本軍は恐ろしい規模の爆裂魔法を投射して歩兵を吹き飛ばしてから個人個人が携帯可能な謎の武器を使用するのだったな。

？・・・東方征伐軍の騎兵隊も謎の攻撃によりなぎ倒されたと聞く。今出撃させたところ、焼け石に水だろう。）

「他方面から戦力の抽出はできないか？」

「現在南部ではクイラ軍による一大攻勢が開始されており、部隊の引き抜きは不可能です。」

？同様に東部でも日独軍の激しい爆裂魔法を受けて撤退は困難とのことで・・・。「成る程な・・・。」

？つまり、南部も東部も敵の攻撃を受けて撤退不可能。

？更には西部、北部も東部や南部へ大量に援軍として送ったため纏まった援軍を呼ぶ事は不可能だろう。

？かといつて王都防衛隊も大きな損害を受けており、自力での撃退は不可能・・・。

？そこまで考えてパタジンはとあることに気づいた。

（まさか・・・もう、詰み、か？）

? 祖国の敗戦。

? その恐ろしい響きの言葉を考えてパタジンの背中から汗がどつと吹き出す。

(いやいや。そんな筈……いや。ワイバーンは全滅し、王都防衛隊も自力では敵軍の撃退は不可。それでいて援軍を呼ぶこともできない。……それならば、自分は何を使つて王都を防衛すれば良いのだ?)

? その後、しばし塾考した後彼は若手幹部に短くこう告げた。

「……少し、陛下にご相談してくる。」

ロデニウスーの大都市である、ロウリア王国王都ジン・ハーク。

? 三重の防壁に囲まれていた豪華な城の最深部に位置する王の間。

? そこでパタジンは自らの仕える王であるハーク・ロウリア34世に謁見していた。

「……以上の事から、我が国には最早クイラ王国、ひいては日独を止める事ができる戦力は残されておりません。」

? パタジンは先程考えた事を包み隠さず、王に告げる。

「……で、パタジンよ。お主は余にどうしろと言うのだ。」

? ロウリア王国の王であるハーク・ロウリア34世は内心怯えながらもそれはおくび

にも顔に出さず、パタジンに問い返す。

(まさか、あの日パタジンにロデニウス沖大海戦の結果報告を聞いたときに夢想した王都の惨劇が事実となるとはな……。)

? まだ自らが夢想した王都の未来よりもマシなことは民の住まう市街地への攻撃が極めて少なかった事か。

? ……パタジンは先程自分が言った言葉を受けて何やら遠慮しているようだが、何を言いたいのかは先程の報告を聞けばわかる。

? ……いよいよ、腹をくくる時が来たか。

「……パタジンよ。お主が何を言いたいか、余にはわかる。

? ……降伏、だ。日本がばら撒いたピラが本当ならば民の未来は安寧だろう。

? 余一人の命で民が助かるならば安いものよ。」

? と、パタジンを前に威厳があるように喋る。しかし、内心は恐怖でおかしくなりそうだ。

? 今も体の震えを抑えるのに精一杯である。

? 王の言葉を聞いたパタジンは頭を下げて静かに泣いていた。

? その後、ロウリア王国は王都前面に展開する日本軍に降伏する事を伝えた。

？王都より降伏の指令を受けたロウリア王国軍は各地で戦闘行動を停止し、各地で日独、クイラ軍に投降することとなる。

## 戦後の三カ国

旧ロウリア王国北部

ロウリア帝国帝都ジン・ハーク

? 戦争の前まではロデニウス最強と名高かったものの敗戦により解体された哀れな国、ロウリア王国。

? そんなかつての王国の名を引き継ぐこの帝国の帝都たるジン・ハーク中央付近に位置する皇帝の間にてロウリア王改めロウリア皇帝ハーク・ロウリア34世は椅子に座り、日本から輸入した書物を読みふけていた。

(・・・まさか、余がまだこの世にとどまることができるとはな。)

? 彼が再び皇帝として返り咲いた理由は、数日前に開かれた講和会議にあった。

? ロウリア王国降伏後、クワ・トイネ公国公都クワトイネで行われた講和会議においてロウリア王国は日独杭鋏4カ国で分割されることとなり、日本はジン・ハークやルーマを含む北部4分の1を手に入れた。

? そこで日本はここにロウリア帝国と言う国を建国し、丁度捕虜として日本国内に拘

置されていた彼を皇帝として据えたのである。

(・・・くそっ！命があるとはいえ、なんたる侮辱・・・！)

？彼は窓から見えるかつては自らのものだった王城・・・もとい、日本ロウリア総督府を見つめる。

？現状、あくまで『ロウリア国民により統治されるロウリア国民のための国』という肩書きだが実際に政権を握っているのは日本から派遣されてきたロウリア総督と呼ばれる者だ。

？さらには二度と日本に対抗することができないように軍備にも制限がかけられている。

「なんとということか・・・。」

？かつてはロデニウスを続べんと兵を挙げ、実際にその力を伴っていた文明圏外の大国、ロウリア王国は日独らにより完全に分割されて主権国家としての地位を失った。

？・・・だが、深い悲しみに囚われている彼とは裏腹に笑いが止まらない者も居るのである。

クイラ王国 王都ダグドーバ

? かつては不毛な大地と変な黒くドロドロした水に溢れており弱貧国とされていた国、クイラ王国。

? そんな国の首都たるダグドローバはかつては弱貧国の名に恥じない簡素な街だったが、日独との交流を通じて立派な大都市へと変貌していた。

? 街を貫く幹線道路。区画整備された街並み。

? 恐らくロデニウスにおいてこの街に匹敵するのはクワ・トイネ公国の公都クワトイネだけであろう。

? 見事弱貧国という汚名を返上したクイラ王国の国王、バラルカ・クイラは笑いが止まらなかつた。

「対日、対独貿易は大幅な黒字。しかも日独のインフラとやらにより国内の生活水準は上がり放題。しかも悲願の豊かな大地も今回の戦争で見事手に入れることができた事により食料輸入は大幅に減った。」

? かつてない好景気……。それが、私の代で実現できたのか。」

? と、言いながら彼は王国の新しい版図を眺める。

? 彼の治めるクイラ王国はロデニウス南部の資源地帯と、ロウリア南部の穀倉地帯を含む大国へと変貌していた。

? ロウリアの食糧倉庫を併合したことで食料自給率も飛躍的に上がり、それでいて工



業化に必要な資源は自国で山のように取れる。

? これで笑いが止まるわけがなかった。

「ふふふふふ。日本にドイツ様様だな。」

? 軍事も抜かりなく強化されており、現在は1号戦車の国産化を目指している。

だが、ゆくゆくは駆逐艦なる小型装甲艦や飛行機械も輸入する予定だ。

「我が国の未来は明るい……!」

? 彼は、自らの代にこれだけ国が発展することを喜ばしく思い王国の未来に想いを馳せる。

? 彼の妄想の中では強国としてロデニウスに君臨するクイラ王国があつた。

クワ・トイネ公国 公都クワトイネ

クワ・トイネ公国の首相であるカナタは今、山のような業務に忙殺されていた。

彼の横に控える秘書の顔も疲労からか若干白っぽくなっている。

しかし、後から後から舞い込んでくる仕事のせいで全く休息が取れない。

かつてはロデニウスに残った3国内でロウリア以下クイラ以上とされていた国、ク

ワ・トイネ公国。

その国土の土地柄、食糧には全く困らないため政情が安定していたこの国で、なにやら不穏な出来事が頻発していた。

「首相、ヤビヒ焼き討ち事件の詳細報告書が完成しました。」

「読め。」

「はっ！えー、5日前に締結された講和条約の内容を不服として民衆が暴徒化しヤビヒのリンスイ外務卿の邸宅や交番などが焼き討ちにされました。」

リンスイ外務卿は無事でしたが邸宅に勤務していた奉公人及び交番に勤務していた警官合わせて23人が死亡しました。」

「む、むう……。」

5日前に締結された講和条約。これは言うまでもなくロデニウス戦争の講和条約のことだが、その内容が公国では大問題となった。

その内容は

『南部の2分の1はクイラ王国領とし、北側4分の1が日本領、さらに中央の4分の1がドイツ領となり、余ったギム周辺のちよこつとした平野はクワ・トイネ公国領。』

?ぎつくらばんに説明すればこんな感じだろうか。

?大量に都市を落とし、敵軍を粉砕したクイラ王国に対して、日独軍に嫌味を言うとか肉壁となるくらいしか活躍できなかったクワ・トイネ公国に少しでも土地をくれたの

が温情と見るべきだが、民衆はそんなことは知らない。

「又、戦鬪に備え日独から小銃や弾薬を買い込んだ為に貿易の赤字が膨らみ、しかもそこで重要輸出相手国であったクイラ王国が食料自給率を大幅アップさせた為輸出が激減。さらにはロウリアから賠償金ももぎ取れなかつた為に経済が大幅に悪化しています。」

「その為、国民生活も困窮気味であることが今回の暴動の発生に拍車をかけたと考えられています。」

「こめかみを抑えつつ少し休憩を入れるカナタ。」

「?・・・まだまだ安寧の日々は手に入れられそうになかつた。」

## 各国の分析

パールディア帝国 国家戦略局

? 薄暗い部屋に灯されるオレンジ色のロウソクの炎。

? その炎はゆらゆらと揺れながらこの部屋に立つ2つの人の影を映し出す。

「随分と簡単に言ってくれるな……!」

? 男は冷や汗をかきながら報告した部下を威圧するように喋る。

「ロウリアに一体いくら支援したと思ってるのだ☒もちろん隠蔽工作はするが、皇帝のお耳に触れたら国家戦略局そのものが危機にさらされるぞ!」

? 上司は今回の失敗を嘆き、部下は地面につくほどに深く頭を下げる。

「しかし、ロウリア王国ほどの規模の国が我々の支援もあつたのに文明圏外国家ごときに負けるのか?」

? しばしの静寂の後で話題は彼らの暗い未来からロウリア王国を下した国についてに移行した。

「それが、諜報員には捜査を指示したものの有効な情報が得られる前に戦闘に巻き込まれ死亡したようです……」

「戦闘を見ていた民間人からも一部くらいは聞き取れるだろう?」

「それが、民間人から聴取するとあまりにも現実離れた意見がでるばかりで。なんでも日本は爆裂魔法を起こせる鉄竜を大量に有しているとか、鉄の獣を有し、その獣は大きな爆発魔法を連射する・・・などです。」

「それは流石に情報統制が入っているな。小賢しい・・・。」

?その後、彼らはロウリア王国に関する資料を全て焼却し、国家戦略局とロウリア王国との関係を徹底的に隠蔽した。

#### 第八帝国ことグラ・バルカス帝国 情報局

「閣下。ロデニウス大陸での戦闘について現地から報告が届きました。」

?電子式受信機に通信音が鳴り響く。

?この世界では異色の国家、グラ・バルカス帝国の情報局にてロデニウス戦争の情報が伝えられようとしていた。

「概要は?」

「はっ!ロウリア王国のクワ・トイネ公国並びにクイラ王国への侵攻は、大日本帝国及び大ドイツ国の軍事介入により失敗に終わった模様。」

？ロウリア王国は分割され完全に消滅する見込みです。」

「何？」

？閣下と呼ばれた男はその報告を聞いて片眉を釣り上げる。

「我が国の分析によれば、ロウリア王国の圧勝に終わりロデニウス大陸全土がロウリアになると思っていたが……。大日本帝国に大ドイツ国。聞いたことのない国だな？」

「はっ！この二国が介入した、と言うよりは全面参戦したことで戦局は一変。」

？ロウリア王国の4400隻に及ぶ大艦隊は日本海軍の手により壊滅的被害を被っております。

？地上でもロウリア王国は日本、ドイツに傷を負わせることもできずに敗退しております。」

報告は続く。

「ですが、日独の戦力は目撃証言がなく詳細は不明です。」

？しかし、ビーズルで連絡が途絶したスタッフが最後に『日本軍はばく』と送ってきています。

？途中で文章が途切れているためあくまで推測ですが、日本軍は爆撃機を保有しているのかもしれませんが。」

「そうか。……まずは現地で死亡したスタッフの冥福を祈ろう。」

? そういうと閣下と呼ばれた男は黙禱を捧げる。

? しばしの黙禱が終わると彼は日独についての分析を開始した。

「それにしても、爆撃機を保有していると断じた場合は少なくとも航空分野に関してはこの世界最高レベル。少なくともムーやミリシアルに匹敵する技術は有していると見るべきか。

? ……詳細はわからんが陸海軍戦力もそれに比例したものを持つとした方が妥当、か。  
? ……大日本帝国とドイツ。まだ戦力の詳細はわからんが警戒しておくに越したことはないな。」

? こうしてグラ・バルカス帝国は日本とドイツを要注意国家とカテゴリーした。

? これはミリシアル帝国に次いでムーと同等のレベルであり、グラ・バルカス帝国において日本とドイツは明確に『脅威』と捉えられたのである。

? それから少し後、日本の方でもはるか西方の一大事について情報が入ってきていた。

大日本帝国 陸軍情報局

? 大日本帝国においてドイツの情報を探る為、ひいては余りにも情報が足りないこの

世界を調べる為転移後陸軍省所轄として設立された陸軍情報局。

?この場では遠い第2文明圏で発生した一大事について話されていた。

「扇町閣下。レイフォルに展開していた諜報員から緊急連絡が届いております!」

「読め!」

?扇町閣下こと扇町芳樹少将は何やら嫌な予感を感じつつ報告を聞いた。

「昨日、第二文明圏の列強レイフォルが西方の新興国である第八帝国と交戦。第八帝国はレイフォル側の戦列艦43隻を沈めた後で首都レイフォリアを完膚なきまでに消しとばしたとの事です!」


「な、何だと!?」

?扇町は心底驚いたという風に言葉を発する。

「この世界の新興国といえば原始的な大砲すら有さない筈だ。それが、末席とは言え列強の有する戦列艦が薙ぎ倒せるのか?」

?扇町の質問に対して部下は一枚の写真を取り出した。

「閣下。これを見てください。」

「・・・、これは!?」

?そこに写っていたのは、海軍の誇る世界最大最強の戦艦、大和・・・ではなく、それに酷似した巨大戦艦だった。



「これは件の第八帝国の有する戦艦で主砲は大和と同じく46センチ級と予測されています。」

「?・・・ですが、この艦は大和と比較して対空兵装が充実しており、艦橋を見るにレーダーが搭載されていると思われます。又、我が国では実用化されていない近接信管らしき物を使用しているという報告も・・・。」

「?その報告を聞いて絶句する扇町。」

「?少しの静寂の後、扇町は考察を始めた。」

「大和並みの戦艦を作れるとなれば、我が国と同じほどの技術力を有していると見るべきだろう。・・・それに、あまり認めたくない事だがどうやら電子面においては我が国よりも進んでいるようだ。」

「?・・・となれば、我が国で試行錯誤中の対空電探や射撃管制装置も実用化している可能性はあると見るべきか。」

「なにせよあまりにも技術がこの世界と隔絶している。間違いなく『転移国家』だな。」

「?そう断じる扇町。」

「むう・・・これはちと不味いな。これは我が国の大きな脅威となるだろう。これからは要注意だな。」

?この情報はドイツにも届いており、両国はグラ・バルカス帝国を脅威と断定し最重  
要注意国家に認定した。

?こうして、違う世界から転移してきた3つの帝国は互いを認知したのである。

?そして、日本では第八帝国などよくわからん国に遅れてなるものかと技術者陣は今  
まで以上に働き詰めになるのはまた別の話。

## 閑話章：色々編

### 電探開発と舌戦

大日本帝国 とある場所

? これはまだロデニウスで戦争が行われていた頃のこと。

? 夏を迎えた帝国のとある場所に作られたコンクリート製の無骨な建物。

? 最低限の窓が取り付けられたその建物は入り口付近に『電探開発本部』と書かれた板が掛けられていた。

「あー、あー。こちら開発部。開発部。全員観測体制に移行した。いつでも大丈夫だ。」

? 夏用の陸軍将校服に身を包んだ1人の男。

? 帝国陸軍中佐の佐野 利通は割れそうな頭と今すぐにも閉じそうな瞼を抑えながら無線機を使い何処かに連絡をする。

? 彼の前には、1つの機械の画面を凝視する幾人もの成人男性達。

海軍や民間企業、はたまた大学の教授や陸軍だったりと男達の所属は千差万別だが心は1つと言わんばかりに1つの機械・・・新型電探の試作モデルの画面を凝視していた。

『あー、あー。こちら隼。了解、試験飛行を開始する。』

? 凄まじい発動機の重低音と共に無線機の奥から試験飛行を開始する旨が佐野に伝えられる。

? それ以降無線機はウンともスンとも言わず佐野の手の中に居た。  
しばしの静寂。

? 誰も喋らないのではなく、喋りたくても眠くて喋らない極限状態の者達が見守る中刻一刻と時間は過ぎていく。

・・・画面に、変化はない。

「・・・今回も、ダメだったか。」

? 諦めたかのように佐野が重々しく口を開いた時、まさにその瞬間である。

? 電探の画面にふと異常が発生した。

? それまでは死んだように静かだった画面が突如として生命が宿ったかのように動き出す。

? それが意味する事、それは、彼らが死にそうになりながら追い求めて居た事。

「あ、あ・・・あ!」

「キエアアアア映ったアアアア!!」

「WRYYYYYYYY!!!」

? いい歳をした男達が思い思いに泣き叫び、狂喜乱舞するその様はまさに地獄絵図。

? 何も知らない一般人がこの場だけを見たならば狂人の宴に遭遇したとも思うだろう。

? しかし、4ヶ月ほど前から皆仲良くパーリーナイツ（残業）でここ一、二週間は睡眠時間一日30分だった彼らには怖いものは最早存在せず、陸軍も海軍も民間もクソもない。

? 只々今ここで電探が開発できたと言う喜びを分かち合っていた。

? だが、何故犬猿の仲、水と油、陽キャと陰キャ、一航戦の青い人とズイズイと言ったほど仲の悪い陸海軍で共同開発が行われたのか。

? それは、大きく開いたドイツとの軍事技術の差が大きく関係していた。

? 電探開発が始まるさらに1週間程前。

? 設立されたばかりの陸軍情報局から聞き捨てならない情報が送られてきた。

『ドイツ軍はMe 262の後継機を開発中。』

? ここまでは良い。後継機の開発など中学生でも想像できるからだ。

問題はその次である。

『その後継機の最高速度は1000キロにも及ぶと思われる』

?この情報を手に入れた日本陸海軍は超慌てに慌てた。

?なんせ、Me262ですら最高速度に乗られたらほとんど手がつけられないと言うのに1000キロで飛び回る航空機など出てこられたら本当にどうしようもないからである。

?一応、陸海軍それぞれ単独で迎撃用の局地戦闘機や電探開発を進めてはいたものの、全く進んでいないと言っても差し支えない程にしか進展していなかった。

?いよいよ背に腹は変えられぬとなった陸海軍。

?お互いに協力しようと言う雰囲気が出始めていたもののプライドが邪魔をして、チキンレースの様相を呈していた中でとある妙案が実行された。

?それは、『民間企業からの協力要請』と言う物である。

?これにより『たまたま民間企業から同時に陸海軍が協力要請された』と言う形になるため互いにプライドを守りつつ共同開発ができると言うわけだ。

?こうして開発された電探は海軍においては二式一号電波探信儀として制式採用され秋月型などの数多の軍艦に搭載され、陸上においても日本本土防空網建設に用いられることとなる。

? 一方、電探開発成功の喜びを幾人もの男達が涙ながらに喜ぶ中、他の所では大舌戦が繰り広げられていた。

大日本帝国 海軍省外局 艦政本部

? 日本海軍の建艦、造機などを担当する海軍省の外局、艦政本部。

? 各部の部長が集まる会議において、普段とは違い一段と激しく舌戦が繰り広げられていた。

「だーかーらー!」

「第八帝国などと名乗る国が大和に匹敵する戦艦を有する! それならば我が国はそれを上回る戦艦を有さねばならんぞう!」

? 砲煩部長、阿部少将が机を叩きながら熱弁する。

? 彼の主張は大和を上回る戦艦、それこそ『超大和型戦艦』を建造すべきであるという事でこれぞまさしく大艦巨砲主義である! と言うべきものであった。

「いやー、先程からG14型もとい葛城型航空母艦を建造すべきだと言っているだろう!」

? しかし、それに対して第三部長、八意少将率いる航空主兵論者も負けじと反論をする。

「そもそもとして既に葛城型航空母艦の建造は始まっておるし、今更変更などできん！」

「それに、そんなものを作る予算はどこから捻り出す！」

「むむむ……！」

「ぬう……！」

「？互いに一步も譲らぬ仁義なき戦い。」

「？だが八意少将のいうことは理にかなっている。」

「既にG14型こと葛城型は4隻中3隻の建造が始まっており、これらをキャンセルして超大和型戦艦の建造などなんと無駄な事だろうか。」

「分かっていると思うが予算は葛城型4隻と石狩型防空巡洋艦や改秋月型、島風型でいっぱいいっぱいだ。そんな巨大戦艦を作る金など余ってない！」

「ぐぬぬ……。」

「？それ以降も阿部少将は幾度となく反撃を試みるも予算などの諸問題があり常に八意少将に敗北を喫してしまう。」

「？そして最終的には田辺中将の鶴の一声により、超大和型戦艦は夢幻と消えた……。」



より強く、より速く。

大日本帝国 新KF研究課

? 夏が過ぎ、季節も秋へと向かうロデニウス戦争終戦直後初秋のとある日。

? 稲は黄金色に実り、そろそろ収穫かという頃。

? 帝都東京近郊、群馬県新田郡笠懸町の桐生愛国飛行場に設置されたコンクリート豆腐。

? ? そこでは大日本帝国の英知を集めてとある物を製作しようとしていた。

「燃料よーし、安全点検よーし．．．点火!」

? 開発主任である笠原大佐の号令を受けて目の前に置かれた試作型ロケットエンジンが点火される。

? 後方から射出される火炎。レシプロエンジンとはまた違った逞しい音。

? 周りでは同じくこのエンジンを開発しようとしている同志達が不安そうにエンジンの具合を見つめている。

? 多くの者たちが見つめている中、期待のジェットエンジンは．．．

『バゴンッ!』

「ギヤアアアア!!」

? 限りなくアウトに近いアウトな音を立てて停止する。

? 大慌てで奇声を発しながら修理に駆け寄る技術者達。

「また失敗か・・・。」

? 後ろで見ていた技術者のうちの誰かがそう呟いた・・・。

? KF 研究課。これは大日本帝国において転移以前からジェットエンジン搭載航空機の研究をしていた機関だ。

? 当時は陸軍の出資によって萱場製作所が5年間で開発をする事となっており、KF 研究課も萱場製作所内に設置されていた。

? しかし、転移によって状況は一変する。

? 滅茶苦茶近くになった一応同盟国大ドイツ国では既にジェット戦闘機に加え爆撃機まで実用化されており、眉唾な情報も含めれば最新鋭機は最高速度1100キロ、巡航速度980キロにまで及ぶという情報まで入っている。

? そんな中、ただ指をくわえて見ているほど日本軍上層部は阿呆ではなかった。

? ここも電探開発と同じくロウリア戦前から萱場製作所からの要請という形で陸海

軍の技術者や三菱・中島などの大手企業、帝国大学教授など様々な人々が潤沢な予算と共に集められたのである。

? そして日本もドイツに追いつくためとしてジェットエンジン搭載戦闘機開発を急いで開始したのだ。

?・・・だが、そんな小説のようにには現実はいまうまく運ばない。

? かれこれ数ヶ月。3度ほどエンジンの点火実験を行なっているものの遅々としてなかなか開発が進まない。

「はく・・・ドイツ人はどうやってこんな物を作ったんだ・・・?」

? 技術者達はみんな肩を落として溜息をついたのであった。

ドイツ国 とある飛行場

? 大日本帝国が苦心しながらジェットエンジンを開発していた頃。

もう1つの地球産大帝国、ドイツ国のとある飛行場ではとある航空機のお披露目会が開かれていた。

? その場では総統閣下ことアドルフ・ヒトラーやドイツ国防空軍空軍元帥ヘルマン・

ゲーリング、ドイツ宣伝相ヨーゼフ・ゲッベルスなど多数のナチス高官が集結していた。「では、始めたまえ。」

?とても久しぶりとなるロデニウスでの戦勝報告に加え敗戦から逃れることができた彼はここ最近機嫌が良く、精神状態も回復傾向にある。

?その為、彼は上機嫌でお披露目会の視察に来ていた。

?様々な観衆が見守る中でお披露目される新型航空機ことT a 1 8 3はゆっくりと飛行場の滑走路内に侵入し、飛行準備を整える。

?フォッケウルフ社の関係者が固唾を飲みながら見守る中、新開発の大出力エンジンであるハインケル H e S O 1 1 に炎が入れられ、大音量を立てながらゆっくりゆっくりと移動を開始する。

?T a 1 8 3は徐々に加速しながらその機体をふわりと浮かせ、大空に羽ばたいた。

?やがて新世代のジェット戦闘機は蒼空に浮かび、視察に来たナチス高官達の上空を巡回するのであった。

?この後、このT a 1 8 3はヒトラーにより最重要量産機として指定されドイツ軍主力ジェット戦闘機となる。

ドイツ国 またとある飛行場  
？日本とドイツが新型ジェット戦闘機開発を急いでいる中、ドイツ軍はまた新たな飛行機の機種を開発していた。

「頼むから飛んでくれよ．．．！」

？開発者達が見守る中、第二次世界大戦中に実用化された数少ないヘリコプター。

？『F a 2 2 3』を改良した新しい型のヘリコプターは勢いよくエンジンを回し機体上方に設置されたプロペラを力強く回す。

？強い風が地上に吹き付け、周りで手に汗を握る男達の髪を揺らす。

？緊張の一瞬。様々な追加装備を取り付けて重くなったF a 2 2 3の改良型は周りの心配をよそにふわっと飛び上がり、他の航空機とは違い垂直に大空へと羽ばたく。

「よしっ！取り敢えず第一関門は突破したな．．．！」

？ガッツポーズをする技術者。しかし、まだまだ試験は残っている。

？空に舞い上がったF a 2 2 3は機体を前に傾け、野原に設置された目標に狙いを定

める。

?そして、機体の両側面に付けられたR4Mがガンポットから飛び出し、目標を目指して飛んで行った。

?Fa223の改良型もとい対地攻撃型はFa223-aと名付けられ、世界初の攻撃ヘリコプターとして量産が開始されるのであった。

## 悲しみのレーダー提督と日本海軍

? ロデニウスと陸続きの大国、ドイツ国。

? かつての世界においては連合国軍相手に大太刀周りを見せ、一時は英仏ソの三カ国を下そうとした大帝国の海軍を預かる場所。国防軍海軍総司令部。

? その中の一角、部屋の隅っこにて1人の男が負のオーラをばらまいていた。

「そうそうさそうさそうだった。いつも総統閣下は海軍を冷遇する。」

あの時だつてUボート以外は建造すんなつて言われたからUボート以外作つてなかつたら役立たずつて遠回しに言われるし……。」

? 彼がこうなつてしまった原因は、少し前に遡る……。

? ドイツが転移後、日本と接触し友好的にしていこうと言うことになつたのは先にも述べたがこの時、とある条約が結ばれた。

? その名も『日独貿易協定』と言う。

? これは要約すれば『お互いに兵器輸出の限度を決めよう』と言うものであり、日本

は1935年以降に設計された補助艦艇含む全艦艇の輸出禁止、主力艦は弩級戦艦や鳳翔型以外の空母の輸出禁止となっている。

(ドイツ側も1942年以降に設計・開発された兵器・技術の輸出禁止、チハを撃破できる戦車の輸出禁止など色々<sup>と</sup>制約はあるが)

? これによりひとまず日本製の優秀な大型艦が他国へ売りさばかれることを阻止したドイツはレーダー提督の猛烈な要請の元第二次Z計画を<sup>第八帝國</sup>発動。

? これは空母2隻を中核とした機動艦隊の設立とパチモン<sup>第八帝國</sup>の巨大戦艦を叩き潰すH45級戦艦の建造が目標とされた。

? 予算も生まれ、建造開始も目前となり、ゲーリングとの権力闘争に打ち勝ち最新式のTa183を有する海軍航空隊も創設。

? 何もかもがうまくいっているように見えたドイツ海軍増強計画。  
しかし、この計画は思わぬところから邪魔が入る。

「強襲揚陸支援船……?」

? ヒトラーに提出された1つの設計書。それは『強襲揚陸支援船』と言う聞きなれない名前。

「はい。まずは概要をご説明します……。」

? この船の概要を説明しているのは、海軍士官……ではなく陸軍士官であった。



? 対ロウリア戦争時、ナズミ浜に日本陸軍が上陸したことは記憶に新しいがその時、日本陸軍へは3人の観戦武官が派遣されていた。

? 1人はクワ・トイネ公国軍から、1人はクイラ王国軍から。

? 残った1人はドイツ国防陸軍からである。

? 彼は今まで一度も上陸戦をした事がないドイツ軍の今後の為今回観戦武官としてやって来ているのだ。

? 合計10000にも及ぶ陸軍兵士と装甲車や戦車を載せた数多の輸送船は日本海軍に護衛されながら浜を目指して海の上を駆ける。

? その中で観戦武官は日本陸軍の船団の中に一隻の船を見つけた。

「あれは……。」

? 甲板に艦載機が乗せられ、一見空母に見える一隻の不思議な輸送艦。

? その名も丙型特殊船ことあきつ丸と言う。

? 上陸支援の為に飛び立つ九九式襲撃機を見ながら、観戦武官の彼はポソリと呟いた。

「あれ、いいな。」

? 観戦武官帰国後、陸軍上層部はこの特殊船に大きな興味を示し自ら設計まで行いヒトラーに提出。

? そしてさらにヒトラーまでこの提案に興味を示してしまい、一部では海軍の空母が一隻に減らされると言う噂まで流れた。

? この情報は海軍を震撼させた。

? なにせ、この強襲揚陸支援船は実に排水量約13,000トン、全長190メートル、上陸支援機15機搭載となっており、上陸支援船とか抜かしているが要するに軽空母である。

? その為にこのままでは海軍が空母を保有する前に陸軍が空母を保有しかねないと言う事態に陥ったのだ。

? さらに貴重な大型造船所も陸軍のために潰されてしまう。ただでさえ陸軍に普通の輸送船建造のために造船所を取られているのに、だ。

流石にそれは不味いということで海軍はかつての敵ゲーリングと手を結び必死に建造を阻止しようとしている。

「ドイツ海軍に未来はあるのか・・・。」

? 自国の（潜水艦以外の）海軍の将来を嘆くレーダーであった。

一方、大日本帝国では

大日本帝国海軍省艦政本部

「伊号第400、第500潜水艦計画……？」

「はい。」

？大日本帝国の造機とかなんとか色々を司る海軍省の外局、艦政本部。

？ここに軍令部第2部から新型潜水艦についてとある提案があつた。

？そのうちの一つは名を伊号第400潜水艦と言う。

？この潜水艦は全長130メートルにも達するという常軌を逸した大きさであり、大きな格納庫に4機のあ号飛行爆弾を搭載するという。

？しかし、それでいて日独海軍合同演習の結果を教訓に隠密性まで上げると言うのだから驚きである。

「……で、その伊号第500潜水艦とやらは、どんなものだ？」

「はい、この艦は……。」

？この艦は同じくドイツより輸入されたい号飛行爆弾を3機搭載するのだが、なんと

この潜水艦は艦前方にい号飛行爆弾を発射機構ごと組み込むというのだ。

？これにより浮上したら水密扉を解放すれば直ぐにでも発射できる！と目の前は自信満々に言うが・・・。

「無理だろ。」

？それが艦政本部側の認識である。

？そもそもそんな巨大潜水艦をドイツに見つからない程に隠密性を高めると言うことができるわけがない。

？だが、綿密な防空網と強力なジェット戦闘機に守られたドイツの都市を比較的安全に攻撃できるこの潜水艦はかなり魅力的でもある。

？結局この二種類の潜水艦は長々と議論された結果、2種類ともに4隻ずつ建造することが決まったのであった。

同日 鹿屋航空基地

？大日本帝国海軍航空隊の基地である鹿屋航空基地。

？九州の南部鹿兒島に位置するこの基地でとある航空機が滑走路で飛行準備をしていた。

? 本来エンジンが付いているはずの機首には四門の機関砲が搭載され、機体から飛び出した2つの後退翼には大日本帝国に所属する旨を伝える赤い日の丸がつけられている。

? 周りに取り付いていた整備兵が燃料補給や最終調整を終えてパツと離れ、あたりを静寂が支配する。

? 日本海軍司令長官山本五十六を筆頭に海軍の高官たちが集まり、見守る中飛龍型航空母艦の設計図を代償に購入したMe 262の設計図を元に生産したMe 262もとい橘花は両翼に懸架されたエンジンに炎を灯し、滑走を開始する。

? 橘花は日本海軍の期待を一身に背負い、大空へと飛び立った。

? 橘花は日本海軍では二式局地戦闘機として、陸軍では二式噴進重戦闘機として制式採用されるのであった。

# 戦車

大日本帝国 陸軍戦車学校

「撃エー！」

? 車長の勇ましい命令を聞き、引き金に指をかけていた砲手は引き金を引く。

? その瞬間に75 m mの徹甲弾は点火され、轟音と火炎、衝撃波を生み出してから真つ直ぐに目標を目指して飛行する。

? そして、見事に訓練場に設置された鉄板をぶち抜いた。

「次弾装填！」

? 装填手は狭い車内を無理して動きつつ重い砲弾を取り出して主砲に詰める。

? 車体と砲塔に付けられた増加装甲シュルツェンに長く力強い75 m m砲。

? しかし、その砲塔脇のシュルツェンには黒十字ではなく赤い日の丸が描かれていた。

「やっぱリチハと比べると圧倒的だなあ・・・。」

? 技本の職員が頭を掻きながら何やら書類にデータを書き込む。

? やはりというかなんというかチハと比べ圧倒的な性能を見せているかの戦車の名

は、P z. K p f w. I Vこと四号戦車と言う。

? 5ヶ月ほど前、大日本帝国とドイツ国は互いに兵器輸出を行った。

? この輸出では様々な物や技術が日独間を行き来したが、日本は飛龍型航空母艦の設計図や長門型の装甲配置などを代償にMe 262の設計図や四号戦車、75 mm K w K 40 L/48の図面などを取得した。

? そして陸軍は現在鋭意開発中の新型戦車及び新型の75、85 mm長砲身砲の開発が終わるまではこの四号戦車・75 mm K w K 40 L/48を主力戦車・速射砲として運用する事を決定。

? 現在は輸入した車両を使い訓練をしている所である。

「我々も負けられないな・・・。」

? 最近是对独戦が真面目に議論されているためドイツ軍を撃破する戦車製作を目標に陸軍の予算も増やされつつあり、昔よりは開発環境も良くなった。

「・・・よし、頑張るか。」

? 遠くで射撃をする四号戦車を見守りつつ伸びをする男であった。

? 日本陸軍が頑張つて戦車開発をしようとしていた頃。ドイツでは新戦車開発が迷走していた。

ドイツ国 ヘンシエル社

「何これ・・・?」

? ドイツで戦車の設計を行なっている会社、ヘンシエル社の設計技師であるハインリヒは今回自分が設計することになった戦車の要求スペックを見て愕然としていた。

? 主砲は17cm KwK44を一门搭載しその装甲厚は最大で300mmの傾斜装甲。  
甲。

? 同軸に75mm砲を持ち、その全長は20メートル、重量は380tでありながら最高速度40km/hと言う要求がなされている。

「・・・アホか?」

? この『ぼくのかんがえたさいきょうのせんしゃ』が真面目に計画されているのには少し訳があった。



? 転移後、ドイツ軍では転移前より計画していたE計画を推し進めTiger IIやパンターと言った戦車の交換を計画していた。

? その頃は別にE-100が戦車のような何かになっているようなことはなく、知っている普通のE-100であった。

? ……しかし、転移後1ヶ月半頃。

? 新年を迎えたぐらいの時に実質対日諜報課になっていた国防軍防諜部外国課からとある連絡が入った。

『日本が満州で100t級の重戦車を開発しようとしている。』

? それと共に目撃情報から推察するに多砲塔戦車であること、そして搭載砲は105cm級の物とみられていると言うことも送られてきた。

? しかし、これを受けてもドイツ国防陸軍ではこれは失敗すると言う意見が殆どであった。

? なんせドイツですら重量70tの戦車に手を焼いているのにドイツよりも戦車において色々遅れている日本が100t級の戦車を開発できるわけがないと思ったのである。

? ……しかし、その中で1人の男は違った。

? そう、総統閣下である。

? 総統閣下はこの日本戦車を『脅威』と訴えた。それをイエスマンのルドルフ・ヘスが音頭を取りいよいよ手がつけられなくなったのである。

? E計画の邪魔になるという事でマウスの開発計画が頓挫した今、ヒトラーの熱い野望は全てこのE-100に注ぎ込まれた。

? こうしてこのE-100だった物としか形容できない謎の戦車? が産まれたのである。

? また、この設計改変は他の戦車にも及びE-75も装甲・搭載砲が修正され重量は90t級に。

? E-50も若干装甲が上方修正されたと思いきや下方修正されたりと設計改変の嵐が吹き荒れた。

? その為これら車両の開発・生産は遅れに遅れまくりTigerⅢやパンターⅡと言った既存車両の大幅改修によりその間を繋ごうとしている。

? しかしロデニウス戦争に従軍したイーベル中将からは『V号戦車ですら稼働率は極めて低く、どんなに大きく重くてもIV号戦車が限界である。場所によってはⅢ号、下手をすればⅡ号や38tの方が活躍するかもしれない』と言う報告を受けており、更には国防軍防諜部もまともに機甲師団が運用できるインフラがあるのは神聖ミリシアル帝

国とムーのみと言う結果を出している。

? その為中にはT i g e r IIIなどを重量が増しただけの改悪と呼ぶ者も多い。

? こうしてこの世界最強の技術力を持つ皇帝無き帝国はビヒモスの帝国の名に恥じず混沌とするのであった。

### 三章：没落する列強

#### モノノフの国

フエン王国 首都アマノキ

「剣王。大日本帝国という国が、国交を開くために交渉したいと来訪されております件、どういたしましたでしょうか。」

？日本人からすれば和風と思える城の中。

？王宮中奥の座敷で執務中である剣王シハンは側近であるモトムに話しかけられていた。

「大日本帝国？・・・ああ。ガハラ神国の大使から情報があった、ガハラの東側にある新興国か？」

？・・・あの辺りの島が結託して国を作ったのか？」

？剣王は国と呼べるのかすらわからない小規模な島の集まりを思い浮かべる。

「いえ、それが・・・大日本帝国曰くその人口は9000万を超えるとの事です。」

「9000万以上？！？ワハハハハ！そこまで堂々としておれば大したものだ！」

？全く信じていないながらも快活に笑うシハン。

?しかし、その次の情報で彼の日本に対する意識は変わる。

「それが・・・ロデニウス大陸のクワ・トイネ公国及びクイラ王国はすでに大日本帝国と国交を開設しており両国が使節団を派遣した所、五つの大きな島と一つの大陸、そして大量の島から構成される国土にパーパルディアさえも超える大文明を築き上げていると・・・。ガハラ神国経由でも同様の情報が入ります。」

「ほう・・・パーパルディア以上は言い過ぎにしても、ガハラ神国がそこまで褒めるとはな。」

? 剣王と側近たちは大日本帝国の使者と直接会うことにした。

「何というか・・・。」

「気が引き締まりますね。」

? 大日本帝国外務省に所属する森近は部下の鶴瓶を連れてフェン王国という国を訪れていた。

? 辺りは厳格な雰囲気満ちている。

? 生活水準はロデニウス2カ国よりも低く、国民は貧しい。

? しかし、国民は精神的に発達しておりまるで『武士の治める国』の様だ。

「かつての日本も、この様な風景だったのだろうか……。」

？ 彼はかつて加賀藩士であった祖父から聞いた江戸時代の話を思い出していた。

？ そうこうしていると彼らは王城の一室に通された。

「劍王様が入られます。」

？ 側近が声を上げ襖を開く。

？ 森近達は立ち上がって礼をした。

「そなた達が大日本帝国の使者か。」

？ 声は低いもののよく通り、器の大きさを感じさせる。

？ 自然と身が引き締まるのを感じながら森近達は話を始める。

「はい……貴国と国交を締結したく、参りました。ご挨拶としてこちらの品々をご用意しております。」

？ 劍王達の前に並べられた日本の物。

？ 日本刀、着物、拳銃……。

？ その中でシハンは日本刀に興味を示し、鞘から引き抜く。

「ほう……これは良劍だな。貴国にも優秀な刀鍛冶が居られるようだ。」

？ 満足というような顔をするシハンを見て密かにホッと胸を撫でおろす森近達。

？ 一方でフェン王国側も日本刀含め多数陳列された物品を見てこの『大日本帝国』と

「この国がここ数日で出来た只のの群島国家ではないという事を薄々理解した。

？ 気を良くしたシハンは大陸共通語で書かれた文書を確認し口頭で確認する。

？ その後、更に語気を緩めた彼は森近達に話しかける。

「貴国には、海軍があり多数の鋼鉄でできた巨大船を有すると聞いた。」

「はゝ。」

？ 剣王は何を言うのだろうか。日本の外務省職員達は彼の氣迫に当てられたか緊張しながら次の言葉を待つ。

？ すると、彼は外務省職員達を驚愕させる一言を放った。

「その中の一部で良いから我が国に親善訪問として派遣してくれないか？ まあ要するに、力が見たいのだ。」

？ その提案に愕然とする森近。

？ 本来なら国交を結んでいない国に軍艦を送るなど威嚇行為どころか戦争に発展してもなんらおかしくない事だ。

？ だが、この男は、この王はそれを持ってこいと、しかも首都沖にと言うのだ。

？ その後、森近達は原文のまま本国に報告。

？ 後日やってきたドイツも合わせて近日開催される軍祭に参加する事となった。

パーパルディア皇国 皇都エストシラント

### 第三外務局

? 外務局。それは日本で言うところの外務省に相当する部署である。

? その中でも皇宮から遠く離れた蛮国のみを相手とする第三外務局においてドイツ国の外交使節団は長い間足止めを食らっていた。

「すみません・・・局長様が無理でしたら、課長様でも良いので権限のある方にお目通りをお願いしたいのですが・・・。」

? ドイツの担当官がおずおずと申し出ると第三外務局の担当者は少し迷惑そうな顔をしながら返答した。

「しばらくお待ちください。順番に手続きを行なっておりますので。? ー ー ー かし、貴方達の要求内容を見ましたが、かなり無茶というか・・・失礼な内容が記載されております。これはかなり不遜としか言いようがありません。」

「はい?。」

「あなた方は、もしもパーパルディアの民があなた方の国・・・ええつと、ドイツ国でしたか?の中で罪を犯した場合に治外法権を認めない、と書いてあるので・・・。」



「?それがどうかしましたか?」

? 第三外務局の担当者は目の前で本当に何が無礼なのかわからないという風に宣言を聞いて呆れどころか哀れみすら感じていた。

「貴方方の国は出来たばかりですか? 国際常識を知らないのにも程がある。

? いいですか、我が国は列強です。我が国が対等な立場での国交を認めているのは4カ国だけ。つまり同じ列強だけです。

? 列強どころか文明圏内国ですらない貴方方があたかも列強の様な要求をしている。

? …… 課長は後2週間ほどで予定が開きます。 …… ですが、私からするとこの要求はかなり無謀としか言いようがありません。」

「なっ ……!」

? 自らが被植民地支配国か後進国と同じ扱いを受けている事に内心憤慨する外交官。

? しかし、流石にここで事を荒げるわけにもいかない。

? それに反論をした所で相手の様子を見るに無駄だろう。

「 …… わかりました。」

? ドイツの担当官は引き攣った営業スマイルを浮かべながら退散していった。

? この時を前後して大日本帝国もパーパルディア皇国に同様の扱いを受け、両国はパーパルディア皇国を『未発達国』と見なすようになる。

中央歴1639年 9月25日 フェン王国 首都アマノキ

? フェン王国が5年に一度主催する『軍祭』が行われるこの日。

? 文明圏外の多数の国家の武官が参加し武技を競い、自慢の装備を見せる。

? 各国の軍事力の高さを見せつけ他国を牽制する意味合いもあるのだが、今年の軍祭はとある3つの国が大きな注目を集めていた。

? そのうち2つは今年初めて参加する国であり、文明圏外の大国ことロウリア王国を打ち破った新興国。大日本帝国及びドイツ国。

? そして、この2つとはまた少し違った意味で注目されている国。

? そう、それはクイラ王国である。

「撃てエー！」

? 指揮官の号令を受けて日本より輸入した三十一年式野砲が轟音と共に榴弾を撃ち出す。

? 数秒後には目標地点に多数の榴弾が着弾し、土を吹き上げる。

? 爆煙が一頻り発生し終えると、今度は鋼鉄の馬が歩兵と共に進軍を開始した。

? かつての弱貧国クイラしか知らなかった周りの国々は度肝を抜かれる。

「な、何だアレは……。」

「クワ・トイネ公国曰くクイラ王国は日本やドイツとの貿易で大儲けし、あのような兵器を購入したとか……。」

「日独からすればあの兵器も旧式らしいぞ……。」

「? 各国の武官はクイラ王国をあそこまで魔改造する日独の軍事力及び兵器技術に恐怖を抱くのであった。」

ドイツ海軍 潜水艦 UボートXXI型

「馬鹿な……。」

「? UボートXXI型の指揮所にて艦長と副艦長は目の前のレーダーを見つつ絶句していた。」

「? なんと、上空を飛行するガハラ神国の風龍というドラゴンからレーダー波的な物が発信されているのだ。」

「? 文明圏外でレーダーに相当する能力を持つ航空戦力が存在する。」

「? つまり、これを大量運用する国が文明圏に存在する可能性もある。」

「? 一方日本海軍でも同様の電波を探知していた。」

？この報を受けて以降日独両国においてさらにリーダー開発が加速する事となる。

## 軍祭

フエン王国 首都アマノキ 軍祭

? 数多の文明圏外国が集結するフエン王国主催の軍祭。

? 5年に一度開催されるこの祭りでは各国の武官達は自らの力を示し、他国を牽制する。

? 海上部門の会場となった湾に多数の帆船や小型船が停泊する中、幾隻か異色の船が停泊していた。

「あれが日本の戦船か……。まるで城だな。」

? シハンの感想に、武将マグレブが頷く。

「いやはや……。ガハラ神国から事前に情報は聞いていましたが、いざ見て見るとなんとも不思議なものです。」

? 特に……。」

? と会話を一区切りしつつ日本船の近くに停泊する半分ほど海に浸かった船を見る。

「あの潜水艦という船。意図的に海に沈み、海中を進む船など聞いたこともありません。」

? 彼等の視線の先では合計5隻の日本軍船と3隻のドイツ軍船が停泊していた。

「劍王。そろそろドイツ船に攻撃を始めてもらいます。」

? 劍王シハンが直々に頼み込んだ『力を見せて欲しい』という依頼に対しての回答がされる時がいよいよ迫ってきた。

? 先鋒はドイツ海軍の誇るUボートの中でも最高クラスの性能を有するUボートX X I型だ。

? 軍船から2 km程の所から目の前にある4隻の船の方に艦首を向けつつゆっくりと潜水するUボート。

「……むう。あれでどうやって攻撃するのだ?」

? 双眼鏡のピントを合わせようにも合わせるものがないシハンが疑問を口にした。

「……? 何だ、あの白い線は。」

「波……でしようか?」

? Uボートが潜水した後、少し経ってから突如水中に出現した白い線。それはどんどんと廃船に向けて進んでいく。

? シハンたちが疑問を口にした次の瞬間。

? 突如として一隻の廃船が爆発し、中央から折れて沈む。

? 誰かが驚きの声を発したと同時にさらに3本の白線が出現し残った3隻も爆発。

辺りに木片を四散させた。

「……?」

「か、海中からの攻撃……」

? フェン王国の中枢、特に軍部は戦慄する。

? もしも、あの船に海の中で待ち伏せでもされたら……考えただけでも身震いがする。

? 再び廃船を見ると既に4隻とも完全に海に沈み海上にはわずかに木片が浮かんでいるだけであった。

「い、一体何だったのだ……?」

? 少しドイツ軍の攻撃について考えて見るが、全く思いつかない。一体、ドイツはどのような攻撃をしたのだろうか。

? 驚きのあまり水を打ったように静かになった会場が漸く息を吹き返したかのよう騒がしくなった時、一隻の大きな大きな船が動きだした。

? それは、帝国海軍の象徴であり、世界のビッグセブンと呼ばれた超超弩級戦艦、長門。

? 観客の注目を集めつつ悠々と会場内を進む長門。かの艦の8 km程先には合計4隻のフェン王国の廃船が浮かんでいた。

? 剣王シハンは望遠鏡を先ずは長門に合わせた。

「あの距離から攻撃するつもりというが……我が国最強の軍船、『剣神』ですらあの距離では届かんです。」

? 剣王は部下と話をしつつ日本軍船の攻撃を待った。

日本海軍 戦艦長門 艦橋

「あ。」

? これから多くの国々の注目を集める中で砲撃をするということによって艦橋要員の多くが興奮していた長門艦橋にて長野原艦長は呆けた声をだした。

「そうだそうだ、砲術長。内地の電探研究所からレーダー照準射撃の射撃データを持ってこいつって言われてたから射撃はレーダー射撃で頼む。」

? 当艦には今回の演習に合わせて仮称二号電波探信儀二型が配備されており、性能試験をするように開発の方から彼に言いつけられているのだ。

「了解。」

? 砲術長は忘れんなよと思いつつもそれは言葉に出さず了解の返事を返す。

? そして長門の重厚な41cm砲は目標に向けて旋回を開始した。



?それは、まるで火山の噴火のようであった。

?とある国の武官はそう手記に記していた。

?長門の41cmの巨大な主砲は大轟音と共に巨弾を撃ち出す。

?電波探信儀により定められた照準に従い前部連装二基四門の主砲は圧倒的な爆発を生み出し、4発の砲弾は廃船に向けて飛んで行った。

?砲弾が廃船に接触したその次の瞬間には廃船は粉碎されそれまで船が存在したところは巨大な水柱と水飛沫に覆われた。

?・・・それから少しの時間が経ち。

?水飛沫が晴れた頃にはそこに4隻あった筈の廃船は僅か1隻を残してその存在を消し、瞬く間に3隻の木造船は海に漂う木片と化したのであった。

「.....」

「.....」

「これは.....」

? 剣王シハンを含めフェン王国の中樞はあまりにも自分達の攻撃とはかけ離れた威力にもほどがある破壊を目の当たりにして只々呆然としていた。

? たった一隻で一体何門の大砲を斉射すれば良いのかわからないほどの爆発を生み出す。

? フェン王国の船ではあの水柱の余波だけで船が転覆しそうだ。

「直ぐにでも大日本帝国及びドイツ国と国交樹立に取り掛かろう。不可侵条約は勿論、できれば安全保障条約も取り付けたいな・・・!」

? シハンは日本とドイツの力を認め、満面の笑みで方針を口にした。

クイラ王国海軍 戦艦『クイラ』

「やはり日本とドイツに全てもっていかれたな。」

? 苦笑いしながら副艦長に話しかける男。

? 一見して普通の人間の男に見えるが、彼の帽子の下には狼の耳が付いていた。

? 狼の獣人であり、クイラ王国海軍大佐のデイラマは王国最強の戦艦、クイラの艦長である。

? 現在、クイラ王国海軍は戦列艦や装甲艦の技術を日独の資料を基に独自研究中であるが今より数ヶ月前、それこそロウリアと開戦した頃の頃。日本からとある一つの艦を購入した。

? その名も、日本海軍特務艦『敷島』である。

? この頃、大日本帝国ではクイラが襲われるたびに参戦して出撃しては金がかかるといふ事である程度ロデニウス2カ国が自衛できる戦力を持たせるべきという意見が出ていた。

? 一方、クイラ王国側も日本に装甲艦の輸出を求めていた。

? これにより大日本帝国は装甲艦輸出に乗り出すのだが、経済的にも国力的にもクワ・トイネ公国を上回るクイラ王国が妥当と判断。

? そして輸出艦として白羽の矢が立ったのがこの敷島であった。

? 佐世保に係留されていた特務艦敷島は駆逐艦や航空母艦の建造でどこも満杯の中奇跡的に空いていた三菱長崎造船所のドックに曳航された。

? そこで取り外されていた艀装が取り付けられ、諸々の整備が行われた後『戦艦敷島』として8月の28日にクイラ王国に引き渡されたのである。

? 現在は戦艦クイラと名前を変えてクイラ王国海軍に就役しドイツの軍港を借りて訓練中だ。

「ですね。．．．まあ、あの2カ国は常識外れもいいところです。感覚が麻痺してききました。だが当艦だってパーパルディアの戦列艦よりも強いんですよ？」

「まあそうだな。」

? 副艦長と会話をしつつ、主砲の射撃用意をさせる。

? そして、文明圏外国最強の艦はその巨砲からただの鉄球ではなく大規模な火炎を生み出す榴弾を撃ち出すのであった。

? 戦艦クイラの砲撃は長門の後であったため各国の武官はある程度それを冷静に見ていた。

? ．．．しかし、

『日本やドイツと国交を結べば列強など目ではない兵器が手に入る』

? と、文明圏外各国に希望を持たせるには充分なのであった。

## 秋月襲撃

フェン王国 軍祭会場 日本海軍駆逐艦『秋月』

「……ん？」

? 軍祭会場の湾内で待機している大きな駆逐艦。

? 力強い連装四基八門の長10センチ高角砲と、艦橋に取り付けられた二式一号電波探信儀。

? 大日本帝国の最新鋭防空駆逐艦、秋月の対空電探室にてとある異常が確認された。

「何だこれ……?」

? ロウリアなどのワイバーンより若干早い速度でこちらに向かって来る光点。

? おおよそ20程だろうか。

『当艦西側から正体不明機20程度接近を確認』

? 電探士から報告を受けた艦長は不思議に思いつつフェン王国派遣艦隊艦隊司令長官の座乗する旗艦長門に報告した。

? パーパルディア皇国監査軍東洋艦隊所属のワイバーンロード20騎は、フェン王国への懲罰的攻撃を加える為にフェン王国首都アマノキ上空に来ていた。

? 今、ここで行われている軍祭には多くの文明圏外国の武官が集結している。

? 奴らの眼前で皇国に愚かにも逆らった蛮族がどうなるのかを知らしめる為にあえてこの日を攻撃の日に指定していた。

? これで文明圏外国は列強の、恐るべき皇国の圧倒的過ぎる力を再認識すると共に逆らった国と関係を持つだけでも皇国の強大な軍事力の矛先を向けられるということに気づかせ孤立状態を作り出すのだ。

? . . . しかし、そんな最強の皇国ワイバーンロード隊でも敵わぬ存在がある。

? それが、ガハラガハラの風龍だ。

? 皇国のワイバーンロードは風龍と対峙するとまさに蛇に睨まれた蛙の様になってしまい戦闘どころではない。

? 部隊長はそれを少し苦々しく思いながらも配下の竜騎士達に命令を下す。

『 . . . ガハラガハラの民には構うな。フェン王城と . . . そうだな、あの大きな船を狙え。』

? 突如として現れた20騎のワイバーン。

? それは二手に分かれたと思いきやなんの警告もなくフェン王国の王城を襲撃し、大炎上させた。

? これにより軍祭会場は大混乱に陥り、避難する者、状況を確認しようとする者などでごった返していた。

『旗艦長門!こちら秋月!事前情報にない未確認騎がフェン王国を襲撃!』

? 日本海軍も軍祭会場と同じく混乱の極みにあつた。

『電波探信儀で謎の機影を20ほど確認。』

? という旨の報告を軍祭の邪魔にならないように他の入江に退避した長門に送り、フェン王国側に長門が問い合わせていた時の襲撃。

? 突然の驚きの報告に長門側もたじろぎ、一瞬判断が遅れた。

『敵は10騎!当艦めがけて真つ直ぐ急降下してくる!』

? その一瞬の間に対空見張員の絶叫の様な悲鳴の様な声が伝声管を伝い艦橋内に響く。艦長の大隅大佐はすぐさま回避行動をとるように命令を下した。

? 52000馬力のタービンが駆動を開始し、船体が徐々に移動を開始する。

? しかし、それまで停止していたこともあり敵の攻撃を回避するだけの速度が出せない。

『ツ！敵騎発砲ーっ！！』

? 伝声管から飛び出して来た対空見張所からの報告を聞いた次の瞬間、艦後部から膨大な熱が発せられた。

『敵弾後部甲板に着弾！火災発生！』

『消火班急げっ！』

? チラリと後部甲板を見れば四番主砲塔よりもさらに後ろ、丁度爆雷投射機の辺りに被弾したようだ。

? しかし、敵は爆弾を抱えた米軍機・・・ではなく、火炎弾を発射するトカゲだった事もあり損害は軽微である。

『敵の攻撃を受けた為、当艦はこれより正当防衛を開始する！総員対空戦闘用意！』

? 艦長の大隅大佐は消火活動と並行して対空攻撃を開始する為に総員対空戦闘用意の命を下した。



パーパルディア皇国監査軍 東洋艦隊所属のとある竜騎士

「つしやあ！一番槍い！」

? 先ほど大型船にむけて導力火炎弾を撃ち込み、見事命中させた一番騎の竜騎士の喜びの聲が魔信を通じて耳に入る。

? 先ほどの火炎弾は敵船後部に命中し、見事大炎上している。

? 火災の周りでは何やら蠢く白い物体が見える。

? どうやら敵船内部からワラワラと消化のために水兵が群がって来ている様だ。

(よーつし！俺も！)

? 一番騎に続いて二番騎である自分も敵に一撃を与えようと勇み、敵船に狙いをつける。

(俺は・・・よし、あの見張所を狙おう。)

? 目標を定めた彼は愛騎に合図を送る。

? すると、愛騎は口の中に火炎弾を生み出し始めた。

? そして、確実に当てるために敵水兵の表情がわかるほどにまで近づいて来た。敵の水兵は恐怖に満ちた顔でこちらを見上げている。

(ふんっ！恨むならば今日偶々ここに居たことを。そして、皇国に楯突いたフェン王国を恨むんだな！)



に受けてしまった。

? 大隈はここからは見えないが、消火班が無事であることを祈った。

? 結局、今回の襲撃で駆逐艦秋月は導力火炎弾6発被弾、水兵12名が死亡、34名が重軽傷を負う被害を受けた。

? しかし、皇国側も他の秋月型駆逐艦及び戦艦クイラから発せられた対空砲火により計20騎が撃墜されたのであった。

『駆逐艦秋月が謎の飛竜に攻撃を受け、計12名が戦死、19名が全身火傷の重症、15名が大小様々な傷を負った。』

? この衝撃的過ぎる報告を秋月から受けた長門は大至急政府へ報告した。

? 普通の演習のはずが12名が死亡し34名が重軽傷。

? この信じられない報告を受けた日本政府に激震が走る。

？外務省は大至急現地の外交官に情報収集をする様に命じた。

## パーパルディア監査軍 v s . 日本海軍

同日 昼 フェン王国

? フェン王国の応接の間で待機する大日本帝国外務省の一団。

? この応接の間は派手さや豪華さはないものの奥ゆかしさや趣のある部屋で質素だが居心地がいい。

? ……しかし、そこに座っている外交使節団の顔は厳しい……というか、無表情だ。

? 一団に茶が出されてしばらくすると、フェン王国武将マグレブが現れた。

「日本の皆様、今回はフェン王国に不意打ちして来た不屈き者共を、真に見事な武技で退治していただいたことにまずは謝意を申し上げます。」

? 深々と頭を下げたマグレブ。しかし、日本側の反応は良くない。

「いえ、我々は貴国を守ったつもりなど毛頭ありません。我々が攻撃を受けたので正当防衛をしただけです。」

? 大日本帝国外交使節団の長である森近は冷淡に告げる。

「早速、国交開設の事前協議を……実務者協議の準備をしたいのですが……」

？我が国を戦争に巻き込むために敢えて戦争状態である事を黙っていたのではないか、という疑惑が生まれ日本の心証が悪いフエン王国。

？どうやら本当に兎に角早く日本を戦争に巻き込みたいようだ。

？森近は無表情のまままで返答した。

「そもそも貴国は戦争状態にあるのではないですか？・・・午前中とは状況が変わりました。」

？本国からの指示です。先ずは貴国が置かれている状況と、我々に攻撃を仕掛けて来た不届き者達の詳細を説明願いたい。」

？静かながらも、極めて威圧感のある森近の要求。

？武将マグレブは冷や汗をかきながら察した。

？日本人はとても怒っている、と。

「・・・以上で報告を終わります。」

? 日本海軍フェン王国派遣艦隊旗艦、長門艦橋に響いていた1人の男の声が止まる。  
? 大日本帝国外務省使節団長、森近はフェン王国との会談で手に入れた情報を内地の外務省に報告し終えた。

? その内容は

・フェン王国は第三文明圏列強、パーパルディア皇国と紛争の危機に瀕しており、今回の攻撃はその紛争関連と思われる。

・我が国を攻撃した飛竜はパーパルディア皇国所属である。

・恐らくは我が国を主敵としておらず他国への見せしめの一環で攻撃したと思われる。

・パーパルディア皇国のみならず列強と言うものはプライドが高く傲慢である

? . . . . . と言うものであった。

「さて、どうなるかねえ。」

? フェン王国派遣艦隊司令長官、菅原少将は森近に話しかける。

「さあ . . . . . どうなるでしょうか . . . . . まあ、あとは内地の方々の役目でしょう。」

? 短い会話を終えた彼らは艦橋から見えるフェン王国の街を眺めつつ内地からの返答を待つのであった。

?その後、現地の職員と長門を通じて情報を仕入れた内閣は緊急会議を開催。

?首相や外務大臣はまずはパーパルディア皇国への問い合わせを主張したものの陸海軍両大臣が猛反発。

?日本は現地へ派遣されている陸軍部隊保護を名目にフェン王国へ侵攻中とみられるパーパルディア皇国監査軍を迎撃する事になったのであった。

同日夕方

「フェン王国から通信。フェン王宮直轄水軍がパーパルディア皇国監査軍と交戦、全滅したとのことです。」

「そうか。」

?大日本帝国海軍フェン王国派遣艦隊臨時旗艦、秋月は配下の三隻の駆逐艦を引き連れてフェン王国沖を進んでいた。

?現状、フェン王国から伝えられた情報によればパーパルディア皇国監査軍はフェン王国より西に100キロ程の場所にいるとのことだ。



? これは秋月に試験搭載されている対水上レーダーでも確認できています。

? 現在当艦隊はフェン王国より西側80キロ程度の場所にいる為そろそろ会敵する頃だろう。

? 艦長の大隅大佐は宣戦布告もなく攻撃を仕掛けて来て自らの部下を傷つけ、殺したクソ野郎共がいる遠くの水平線を睨みつけた。

パーパルディア皇国 監査軍東洋艦隊

「船影らしき物を確認！こちらに向かつて来ます！」

? 頭上の見張員から発せられた大きな声が甲板に響いた。

? パーパルディア皇国監査軍東洋艦隊司令長官、ポルトアールはすぐさま望遠鏡を構える。

「大きいな・・・少なくともフェンの物とは思えない。ー不味いぞ、総員、戦闘用意！」

? と、彼が命令を出した瞬間に大型船に搭載された巨大砲が旋回を開始した。

「ツ！ま、まさかこの距離から届くのか」

? 彼が驚きの言葉を発した直後、辺りに大きな発砲音が響いた。

「次弾装填急げ！」

？ 艦隊臨時旗艦、秋月の前部合計二基の主砲は最前列にいたパールディア皇国の戦列艦に向けて砲撃を加えた。

？ 唸りを上げて飛翔し、パールディアの戦列艦の左右に着弾した4発の10センチ砲弾は巨大な水飛沫をあげる。

？ 後続の照月や夕雲も攻撃を開始し、辺りは砲撃音に包まれた。

「修正射！撃エー！」

？ 再装填が完了した秋月も修正射をパールディア艦隊に向けて発射した。

「戦列艦。パオス被弾！」

？ 雷鳴のような敵弾の炸裂音の少し後に悲鳴のような報告がポルトアールの耳に入ってきた。

？ 慌ててパオスの方を見れば、敵の砲撃が船体中央部に命中したのかパツクリと中央から半分に割れて沈みゆく戦列艦、パオスがそこにいた。

「ッ！」

? その余りにも予想外すぎる光景を見てポルトアールや船員達は息を飲む。

? しかし、敵の攻撃は止まらない。

? 再び砲撃音と砲弾の飛翔音がしたと思えばパオスの最後を再現したかのような光景があちこちで起こっていた。

「戦列艦ガリアス被弾! マミズ被弾!」

? どんどんと増えて行く戦闘不能になり沈みゆく戦列艦達。

? 監査軍将兵の中にはその圧倒的な力の差に怯え、戦えなくなる者まで出始めた。

? いくら旧式の寄せ集めとはいえ、列強パーパルディアの監査軍が文明圏外国如きにも手も足も出ない。

? しかも、相手はたったの4隻である。

「ば、バカな……。」

? ポルトアールはその地獄のような光景を見つつ、頭の中でこれが悪夢ならどれほど良かっただろうか。と思う。

? 気がつけば既に22を数えた艦隊は10にまで数を減らしていた。

「て、敵艦当艦に向けて発砲!」

? 見張員の絶叫が甲板に響く。その瞬間ポルトアールは大慌てで命令を出した。

「か、回避っ！回避だっ！」

？ 舵を取り、風神の涙を使用して何とか敵弾を回避しようとする旗艦。

？ しかし、現実是非情である。

？ 敵艦より飛来した驚異的な威力を持つ砲弾は旗艦前方部に着弾。ポルトアールは海に放り出され意識を失った。

？ その後、パーパルディア皇国監査軍東洋艦隊は日本海軍駆逐艦の手により全滅した。

？ 後にフエン沖海戦と呼ばれたこの戦闘の結果はパーパルディア皇国の支配に大きな影響を及ぼすこととなる。

## 不穏な気配

フエン王国 首都アマノキ

？列強パーパルディアの恐るべき監査軍を、ワイバーンロードを日本軍が迎撃し全滅させた。

？目の前で起こったこの衝撃的過ぎる出来事はフエン王国の首都にいたすべての国の武官を放心状態にさせるには充分であった。

「な、何だあの魔導船は……。」

「あの列強のワイバーンロードを叩き落とした……だと？」

「ええつと、あの船が所属する国は……。」

『『大日本帝国』だ。なんでも、その日本と『ドイツ国』と言う国と国交を結ばクイラの様になれるらしい。』

「ほ、本当か？」

？その情報を聞いた者達の頭の中では巨大な魔導船を有し、鉄の馬で地を駆け回る5年前とは変わり果てた姿になったクイラ王国軍の記憶が反芻されていた。

？もしかしたら、パーパルディアを遥かに凌ぐ力を日本とドイツは有しているのかも

しれない。

? しかも、軍祭に来ていたのなら同じ文明圏外国でありフェンと仲が良いと思われる。

? フェンと仲良くなり、あの2国とも仲良くなればパールディアの属国化を防げるかもしれない。

? そこまで考えた文明圏外諸国の武官たちは直ちに本国に報告を開始したのであった。

? 『フェン沖海戦』の後、大日本帝国やドイツ国にやってくる船が増えた。

? 国交締結を求めてぞろぞろとやってくる文明圏外の国々は偶に問題を起こしながらも無事に日独と国交を締結。

? 日独製の兵器のお値段の高さに瞠目するのであった。

パーパルディア王国 第3外務局

? 局長カイオスは脳の血管が切れるのではないかと、と思えるほど怒っていた。

? その原因は、信じられない内容の皇国監査軍の戦果報告である。

? まず始めに空襲をする為ワイバーンロード隊がフェン王国王都に向かった。

? 敵巨大船とフェン王城に攻撃を加え、命中。これはいい。

? だがその後、『敵が我が方に反撃』という魔信を最後にワイバーンロード隊から連絡が途絶したのだ。

? その後、何度呼び掛けても反応がないためワイバーンロード隊は全滅したと判断された。

? これはガハラの風龍が参戦したと当初は考えられたが、それならば風龍が攻撃してきた、と報告するだろうということと、その可能性は排除されそして最終的に『原因不明』という結論に至った。

? この時、既にカイオスは怒り心頭といった様子であったがまだ監査軍の悲劇は続く。

? その後、東洋艦隊からフェン王国艦隊を殲滅したと言う報告が入った。

? ……最も大きな問題はその次だ。

『皇国監査軍東洋艦隊、全滅』

? 第3外務局に激震が走った。

? なんと帰還者0、帰還した船0。何が起こったのかも不明、敵が何でどの様な戦い方をするのかと言うことも含め全てが不明である。

? 現地で指揮をしていた提督の報告から魔導砲を搭載していると言うことだけが唯一判明している。しかし、その直前に『敵船はこちらより大きいにも関わらずマストがなく、戦列艦よりも速度が速い』と言う気が触れたとしか思えない報告をしているため情報の確度は怪しいものだが。

?・・・だが、皇国の名に泥を塗った敵がいるのは事実である。

? 次は監査軍では無く正規の、最新鋭の、本物のパーパルディア皇国軍が動くに違いない。

? いくら旧式とはいえ列強たる我が国の戦力を下すとなると文明圏内国の支援を受けているか、同じ列強である可能性も高いだろう。

? 第3外務局は『敵』を知るために行動を開始した。

パーパルディア皇国 第3外務局 窓口

「申し訳(ご)ざいませんが、本日課長と会うことはできません。」



? 大日本帝国外務省の職員達は、約束した日にちに第3外務局課長と会う為に窓口に来ていたが、また足止めを食らっていた。

「何故ですか? 2週間後と約束していたではないですか!」

? 外務局窓口のライタは興奮してまくし立てる客人を珍しく思いながら機械的に対応する。

「少々込み入った事態が発生いたしました。文明圏外の新興国と会談をしている場合ではないのです。」

? 予定は未定です。また、そうですね・・・1ヶ月以上後にご連絡ください。」

「な、何だ」と

「わかりました。」

? 食ってかかろうとした部下を制止しながら外務省の担当、守口はさっさと第3外務局を出た。

『・・・という事でパーパルディア皇国は我が国を攻撃したことを把握していない、又は攻撃をしたにも関わらず謝る気は無いと思われます。』

? パーパルディア皇国皇都エストシラントから少し離れた場所にある小さな港。そこには大日本帝国外務省が運用している客船があつた。

? その中の一角、電信機が設置されている部屋で守口は本国外務省と電信をしていった。

『開戦時期は少なくとも来年1月以降。それまではそこに留まり交渉を続けよ。』

? この言葉を読み終え、『了解』と返すと守口は電信機の電源を切り、椅子の上で体を伸ばす。

「さて、と。今は確か9月の・・・29、30日ぐらいか。・・・まだ最低でも3ヶ月はこんな国に留まり続けなきゃならねえのかよ・・・。」

? 守口は1つ大きなため息をついてから客船の自室へ戻っていった。

? パーパルディア皇国の知らないところで状況は着々と悪い方向へ向かっていた。

フエン王国 王都アマノキ 天ノ樹城

「よし、漸く、日本を戦争に巻き込む事が出来そうだな……!」

? フェン王国王城、天ノ樹城にて剣王シハンはガッツポーズをしながら喜んでいた。

? その理由は本日、大日本帝国・ドイツ国とフエン王国間で結んだ条約にある。

? この条約では日舞、独舞間での国交締結に加え不可侵条約と『国内に2つドイツ軍用飛行場を建設すること』、『国内に日独海軍が使用できる軍港の建設を許可すること』が含まれていた。

? ……それ即ち、まだ明言はしていないが『パーパルディア皇国との戦争の中継拠点としてフエン王国を使う』という事であろう。

? 少し前の日本海軍襲撃事件以降予想以上に日舞関係は冷え込んでいた為日本を戦争に巻き込むのは不可能と判断していたフエン王国側からすれば正に天から垂らされた蜘蛛の糸であった。

「これで何とか勝ち目が見えてきたな……。」

? シハンは安堵のため息をついてから座布団に座り込んだ。

フエン王国との条約締結の少し前

ドイツ国 総統大本営

「では、これより会議を始めます。」

? ヒトラーの補佐役であるアルフレート・ヨードル上級大将の号令を受けてヒトラーや数多の重鎮たちを集めた会議が開始された。

「先ず始めに、国防軍防諜部からの『日本の動向』を説明させていただきます。」

『日本国内では民間人の間でパールディア憎しの声が高まっており政府も軍部に尻を叩かれる形でその声に応えようとしている。

? 既に一部の艦隊、陸軍部隊に動きがあり、最早日波関係は修復不能な状態にまでなっていると思われる。

? また、開戦時期は諸々の準備を含めて少なくとも来年1月以降と予測される』

との事です。」

? ヨードル上級大将の音読を聞いたヒトラーは少しだけ悩み、一言だけ発した。

「不味いな．．．。」

? 彼の言葉に多くの者が頷く。

? しかし、その『不味さ』は列強との戦闘について．．．ではなく、パールディア戦後についての不味さである。

（このままでは日本は『列強を打ち破れる力を持つ驚異の新興国』として見られるだろう。・・・だが、我が国はその座に着けるのか？）

？今の所、ドイツ軍はロウリア戦でも日本軍の補佐に当たっていた為影が薄い。

？そんな状況でこのパーパルディア戦に参戦しない、となれば世界はドイツを『日本と協力すればロウリアに勝てる』程度の国と判断するかもしれない。

？・・・下手をすれば日本の保護国、最悪傀儡国と見られるかもしれない。

？それは不味い。非常に不味い。

「・・・このままでは、日本ばかりが国際的な影響力を持ち、我が国は取り残されてしまおうだろう。」

？それを防ぐためにも我が国は近いうちに始まると思われる日波戦争に参加しようと思うが、異議はあるか？」

？ヒトラーが会議に参加した全員に問いかけると、皆一様に肯定の意を示した。

ドイツ国防軍空軍総司令部

「むう・・・これはどうするべき、か。」

?ドイツ国防空軍総司令官、ヘルマン・ゲーリングの副官、ボーデンシャッツはとも困っていた。

?彼がとても困っている理由、それは『航空機の輸送方法』である。

?陸続きであった対仏戦や対ソ戦。海峡を挟んでいるとはいえ極めて距離が近く占領地から出撃し攻撃して帰ってこれたバトル・オブ・ブリテン。

?これまでドイツ軍が経験した戦争では全て『海を越えて』航空機を輸送する必要があるしなかった。

?しかし、今度参戦が決定した。パーパルディア皇国本土まで向かわなければならぬのだ。離れたパーパルディア皇国本土まで向かわなければならぬのだ。

?・・・最新鋭のジェット戦闘機、Ta183やレシプロ機であるDo335ならば一応行つて帰つてくることはできるが、それは飽くまで『往復が出来るだけ』であり戦闘行動は計算に入れていない。

?だがドイツ海軍では現状航空母艦みたいな豪華なものは少なくとも来年の夏以降まで手に入らないし、輸送船も陸軍二個師団を輸送するので精一杯だ。

?・・・要するに、航空機を遠く離れたパーパルディアまで輸送することができないのである。

「参つたな・・・。」

？この後、ボーデンシヤッツはフェン王国に前線基地を建設をすることを思いつきヒトラーに提案。

？この飛行場の管理権を争い空海軍でまた一頓着があつたがそれはまた別の話。

## 異界の工業国

ムー国 アイナंक空港

? 晴天。

? 雲はまばらに浮かんでいるだけであり、視界は極めて良好だ。

? 第二文明圏最強にして機械超文明国、ムー。

? この国は永世中立を掲げているものの、第二文明圏を統括する列強にして神聖ミリシアル帝国に迫る可能性を唯一持つ誰もが認める真の列強だ。

? そんなムー国の技術士官、マイラスは突然の軍を通した外務省からの呼び出しを受けて困惑していた。

? 呼び出し先は空軍基地が併設されている民間空港、アイナंक空港である。

(わざわざ空軍基地に呼び出すとは・・・一体、何の用だろうか・・・?)

? 控え室の窓辺に立ち今回呼ばれた理由をぼんやりと考えていると、控え室の扉が開いた。

? 開いた扉からは情報通信部部长、つまりマイラスの上司と外交用礼服を着た2人の男が入ってきた。



「待たせたな、マイラス君。．．．彼が、技術士官のマイラス君です。」

？上司が外交官に自らを紹介する。

？マイラスはあまり得意ではない笑顔を作つて外交官の握手に応えた。

？一同がそこそこ上等そうなソファアに座ると、上役らしき外交官が話を切り出した。

「何と説明しようか．．．。君を呼び出した用だが、端的にいうならば正体不明の国の技術水準を探つて欲しいのだよ。」

「グラ・バルカス帝国ですか？」

？マイラスが考えつく直近で脅威となりそうな国の名前を挙げてみる。

？だが、外交官は首を横に振つた。

「いや、違う。だがこちらも新興国でな。本日、ムーの東側海上に白っぽい船が一隻と灰色の船が四隻現れた。海軍が臨検したところ『ダイニホンテイコク』と名乗つたそうだが心当たりは？」

？マイラスは脳内から『ダイニホンテイコク』という国の名前を探す。

「．．．詳しいことは分かりませんが、ロウリア王国を敗北に追い込んだ国という話だけは伺つております。」

「なら話が早い。船にその日本の大使がその船に乗つていて、我が国と国交を開きたい

と言つてきた。

「?・・・ここまではよくある事なのだが、問題は彼らの乗つてきた船だ。・・・彼等の船は、帆船ではないのだ。」

「?その話を聞いてマイラスは驚きの表情を浮かべる。」

「なつ×そ、それならばまさか・・・!」

「魔力感知器にも反応はない。・・・おそらくは機械による動力船と思われる。」

「?しかも、彼の国では一般的だそうだ。」

「そうですか・・・。」

「だが、それ以上に大問題なことがある。」

「?」

「?急に顔を曇らせ、自分も信じられんと言ふような顔をする外交官。外交官は疑問符を浮かべたままのマイラスに衝撃的な事実を告げた。」

「使節団の護衛に随伴していた戦闘艦は旋回砲塔を持っているようなのだ。」

「なつ?!?ほ、本当ですか?!?」

「?驚愕するマイラス。」

「?なんせ、旋回砲塔といえど我が国ですら最新鋭戦艦のラ・カサミ級にしか搭載していない最新鋭の技術である。」

?それを主力では無い戦闘艦にまで搭載していると言うことは、ダイニホンテイコクは少なくとも造船分野では我が国と同等か我が国を越すレベルにある可能性が高くなる。

「大使の説明では大日本帝国は第三文明圏フィリアデス大陸よりもさらに東に位置するそうだ。

?・・・ここだけ聞くと只の文明圏外国だが、港から送られてくる戦闘艦の情報を見るに我が国に匹敵する力を持つように思える。

?・・・我が国との会談は1週間後に行われるので、それまでに彼らを観光に案内し我が国の技術を見せつけつつ同時に敵の技術水準を探ってくれ。」

「・・・わかりました。やってみます。」

?マイラスの返答を聞いた後、4人は一斉に起立し解散したのであった。

?マイラスは一度深呼吸して緊張を取り払ってから空軍詰所の応接室の扉をゆつく

りと開ける。

?すると、4人の人間種の男がソファから立ち上がってマイラスを出迎えた。

「はじめまして。会議までの1週間ムーを紹介させていただきました、マイラスと申します。」

「大日本帝国外務省の絹沢です。今回、ムーを紹介していただけると言うことで大変嬉しく思います。」

?こちらは補佐の芒野と丹波・鈴鹿です。」

?彼らは互いに挨拶と握手を交わす。

?マイラスは文明圏外国とは思えない落ち着いた態度と丁寧な言葉使いを受けて少し安堵する。

?どうやら日本の使者は既に出発準備を終えているようだ。

「長旅でお疲れでしょうから本格的な案内は明日からとします。本日はこのアイナंक空港をご案内した後、首都のホテルへお連れします。」

?マイラスは空軍格納庫に4人を連れて行く。

?そこには全体が白く、青のストライプが施された機体が安置されていた。

「この鉄竜は、我が国では『飛行機』と呼んでいる飛行機です。最大速度はワイバーンロードよりも速い380km、前部に機銃――ええと、火薬の爆発力で金属の弾を飛ばす

兵器ですね。これを搭載し、1人で操縦可能なように設計されています。空戦能力もワ  
イバーンより上です。」

(「……どうだ!」)

? 自信満々の説明を終えて日本側の反応を待つマイラス。

? 日本人達の顔を見てみると、彼等は興味深そうに飛行機械を眺めていた。

「……成る程、複葉機なのですな。」

? その中で少し目が鋭い……確か、丹波と名乗った男が反応の言葉を返した。

(複葉機……?)

? 彼の発した『複葉機』と言う言葉に若干違和感を覚えるマイラス。

(何故、飛行機械ではなくわざわざ『複葉機』と言った?)

? マイラスは一抹の不安を覚える。

「おお、ちゃんとした星型レシプロエンジンが有りますね。」

? 今度は鈴鹿という男が声を発した。その内容にマイラスは驚愕する。

(こゝ、この男……『エンジン』を知っている……?!?)

「に、日本はどの様な飛行機械をお持ちで……?」

? 若干遠慮気味に日本の大使に質問するマイラス。すると目の前の丹波という男は  
少し何かを考えてから答えを返した。

「・・・我が国では『複葉機』は零式観測機などがありますね。」

「そ、そうですか。」

(態々『複葉機』と言ったということは、複葉機以外を保有しているのか・・・?)

?・・・となれば、日本は『単葉機』を保有している・・・?いや、まさか・・・。  
?単葉機。それは、機械文明立国にして世界第2の力を誇るムーでさえ未だ試作すらできていない兵器だ。

?現在、世界広しと言えど単葉機を量産・配備しているのは第一文明圏を統括する誰もが認める世界最強国、神聖ミリシアル帝国のみである。

「は、ははは・・・。因みにですが、日本の戦闘機はどれくらいの速度が出るので?」

?戦闘機において速度は大事である。特に一撃離脱戦法が主流の現状であると速度が速い方が圧倒的に有利だ。

「申し訳ありません。それは機密情報ですのでお答えできかねます。」

「そ、そうですか・・・。」

?マイラスは大体予想はできていたとは言え少しがっかりするのであった。

次の日

? ムー国と日本がまさかの同じ世界の同じ星出身であるという驚愕の事実が発覚した後、一行は海軍基地へと自動車で向かった。

? 列強1、2を争う軍事力を誇るムーの勇姿を見せつけるため、マイラスは自信満々でラ・カサミの停泊する港を案内する。

「ほお・・・戦艦、ですか。」

? 目の前に停泊する戦艦ラ・カサミを値踏みする様に眺め回す丹波。

「おおっ! 絹沢さん、見てくださいよ戦艦ですよ戦艦! やはり戦艦は男のロマン! 最高ですね!」

「そうですね。」

? 無言でじつくりと舐め回す様にラ・カサミを見る丹波とは裏腹に芒野のテンションは上がり、絹沢はもともと興味がないのか淡白な反応だ。

(日本人でもわかるか。戦艦は男のロマ・・・ん? 待てよ、戦艦を知っている?)

「ふむ、海軍の戦艦三笠に似ているな。」

? マイラスは絹沢の横に立ちラ・カサミを見ていた鈴鹿の言葉をマイラスは聞き逃さなかった。

(ま、まさか・・・日本も戦艦を保有しているのか・・・?)

? マイラスの背中からドツと汗が噴き出す。

? 今まで以上の強烈な嫌な予感に苛まれつつマイラスは先ず『戦艦は存在するのかしないのか』を確かめる事にした。

「日本にも戦艦があるのですか?」

「あ・・・えーつと。」

? その質問を絹沢達にすると、芒野や絹沢は気まずそうに、はたまたどうすれば良いのか悩んでいるかの様に曖昧な声を出した。

? マイラスは地雷を踏んだか、と思い内心戦々恐々としつつ彼等の方を見る。すると、いつの間にもやら絹沢達の後ろに立っていた丹波が絹沢達に変わり返事をした。

「現在、我が国は10隻の戦艦を保有しております。」

「そ、そうですか・・・。」

(・・・ふむ。とすれば、日本は我が国と同等レベルの力を持つという事か。)

? マイラスは冷や汗が頬を伝う感触を感じつつ日本の戦力を推察する。

? 取り敢えずは自国と同等だろう予想した彼は次の疑問。『ミカサ』なる戦艦に似ているという事について聞いてみる事にした。

「ところで、先程『ミカサ』に似ていると仰いましたが、日本にも似た様な艦があるので



すか・・・？」

「はい。今より41年前に我が国において『敷島型戦艦』という船が就役しました。その戦艦の4番艦、『三笠』にこの艦、『ラ・カサミ』は似ているのですよ。」

「そ、そうですか・・・。」

？日進月歩の機械動力戦艦において40年の差は大きい。

？・・・誠に驚きだが、どうやら日本の造船技術は我が国をはるかに凌駕している様である。

「で、では次の場所へご案内します・・・。」

？マイラスは引きつった笑みを浮かべながら他の場所へ日本大使団を案内した。

？その後、マイラスは翌日には首脳陣に届く報告書を書き上げた。

？普通なら到底信じられず受け入れられない内容だが敵対的でなく強力な武力を有している可能性が高い点は重視された。

？特に第八帝国の脅威が迫る中で友好的かつ大きな戦力を期待できる日本を拒む理由もなかった。

？ムーは日本と国交締結を決定。2ヶ月後には無事に通商条約も結ばれた。

ムー国視察が終わった後

大日本帝国所属あるぜんちな丸 電信室

『・・・よって、ムーは我が国にとって軍事的には脅威になりえないと判断される。

?しかし、彼の国はパーパルディア皇国と違い我が国に迫る技術水準であるため十分に注意が必要。

?しかし、パーパルディア皇国と違い友好的であるためすぐさま脅威となる事はない。』

?外務省所属の丹波・・・もとい、帝国海軍所属の丹波利道はあるぜんちな丸の電信室にて本国の軍令部に報告を行っていた。

?彼は陸軍に所属する鈴鹿と同じく外務省に外向という形で今回の使節団に参加。列強ムーの戦力の推察を命じられていたのである。

「さて、こんな所か。」

?報告書の文を練り終わった彼は電信機を使い本国へと報告するのであった。

その後、時期を前後してドイツもムーと国交を締結。通商条約を結ぶのであった。

## アルタラス王国

? 時は少し、日本がまだムーへの使節団を派遣したぐらいの頃まで遡る。

### 第三文明圏南部 アルタラス王国

? 国内に魔石を大量に産出する鉱脈を持ち、魔石輸出により築いた莫大な富を使い文明圏国並みの力を持つ文明圏外の大国、アルタラス王国。

? 円を基調としたデザインの建築が特徴的な王都ル・ブリアスの外務局をとある国が訪れていた。

「ふむ。文明圏外国にしては発展しているな。」

「ですね。」

? ドイツ国の外交使節団長、アイグナーは文明圏外の中でも極めて強い力を持つ国、アルタラス王国へ国交開設の為に赴いていた。

? この国は外務局の担当者の雰囲気も良く、温和な国民性はアイグナー達ドイツ使節団には好印象であった。

? 今通されている応接室もほどほどに豪華でケバケバしさがなく、過ごしやすい印象を受ける。

?それからすこし経つと、応接室のドアが開き一人の女性が数人の部下を引き連れて応接室に入室してきた。

?アイグナー達は立ち上がり、礼をする。

「初めまして。ドイツ国外務省のアイグナーと申します。本日はこの様な会談の席を設けていただき、誠に感謝します。」

?アイグナーの挨拶が終わった頃を見計らい、アルタラス王国側の担当者も挨拶を返す。

「初めまして。今回の交渉を担当させていただきました。外交官のルミエスと申します。」  
?お互いが挨拶を終えたところで、二カ国は国交締結に向けて協議を開始した。

すこし前 アルタラス王国 外務局

「ドイツ国・・・?あの、ロウリア王国を退けた国、ですか?」

?国内に豊富な魔石鉱山を有し、その強い財力を活かして文明圏並みの力を持つ文明

圏外国、アルタラス王国。

？王都ル・ブリアスに位置する外務局で外交官であり、この国の王女でもあるルミエスは聞き覚えのない国の名前を聞いて首を傾げていた。

「はい。そのドイツ国が国交を開設したい。と外務局を訪ねてきています。」

？ルミエスは急いで頭の中の『ドイツ国』の情報をかき集める。

？・・・確か、ここ最近ロデニウス大陸付近に突如出現した新興国でありながら同じ新興国の『大日本帝国』と力を合わせロウリア王国の侵略を撃退。さらには帆を使わず航行する船を有するなど不思議な噂の絶えない謎の国。と情報局から聞いていた。

？幾ら二カ国で、とは言えあのロウリアの侵攻を跳ね返すとは只の新興国ではなからう。それに他の文明圏外国とも友好に接している様であるし、特に国交開設を拒む理由もない。

「・・・わかりました。私が出向きましょう。」

？その後、ドイツ国はアルタラス王国と国交を樹立。その1ヶ月後には通商条約を結ぶのであった。

中央歴1639年11月18日 アルタラス王国 外務省

「ふう……。これで漸くひと段落。ですかね。」

？大日本帝国外務省職員の町田はアルタラス王国の王都ル・ブリアスのホテルで最後の交渉に向けて身だしなみを整えていた。

？外務省内ではどことは言わないが約束を守らなかつたり宣戦布告をせずに攻撃してきたりする自称列強だつたりと何かと悪い噂しか聞かない新世界各国との交渉だが、この国は暖かくて過ごし易く、温和な国民性のためとても居心地がいい。

(こりやあたりを引いたかもな……。)

？そう思いつつ、最後にちよこつと残つた諸々を終わらせる為に外務局へ向かう町田であつた。

(・・・?何だ?やけに騒々しいな。)

?アルタラス王国外務局に到着した町田は何やら違和感を感じた。

今までとは違い、外務局内では怒号が飛び交い皆が殺気立っている。

?何が起こっているかはわからないが一大事が発生した。

?そう考えた町田は大慌てで窓口に駆け寄り、担当者に問いかける。

「すいません。大日本帝国外務省の町田です。お忙しい中申し訳ありませんが、何か

あったのでしょうか?」

?と聞くと、外務省の担当者は早口で急かす様に返答した。

「大日本帝国の方々ですね?国王様がお待ちです。案内の者を付けますので大至急の間へ向かってください。」

「は、はい?わ、わかりました。」

?町田はお辞儀をしてから自分を先導するアルタラス王国の外務局員に連れられて王の間へ向かった。

「そなた達が大日本帝国の使者殿か。」

？王の間に椅子に座り、こちらを見る男。

？アルタラス王国国王、ターラ14世は目の前で礼をしながら挨拶をする同じ文明圏外である新興国の役人を見据え、真剣な表情で語りかけた。

「本日、パーパルディア皇国が我が国に宣戦布告をしてきた。．．直に、この王都も戦火に包まれるであろう。大至急避難していただきたい。」

「そ、そうなんですか☒」

？町田は国王が一国の大使に対応するという事だけでも驚いていたが、まさかの列強が侵攻してくるといふ事態に直面してさらに驚いた。

？日本、特に外務省では列強とは思えない未熟な対応に加え少し前の海軍駆逐艦襲撃事件を受けてパーパルディアは蛮族というイメージが強い。

『文明圏外人だから』と公然と、平気で人を殺すような国が文明圏外国の外交使節をどう扱うかは想像に難くないだろう。

？町田が頭の中で対応を考えていると、ターラ14世はさらに驚くべきことを町田に



告げた。

「……誠に不甲斐ないが、国力差を考えれば我が国は負ける。王族は皆処刑となるだろう。

? ……大日本帝国の使者殿よ。我が娘、ルミエスは知っておるな?」

「は、はい……。」

? 王女ルミエス。彼女は外務局で外交官として働いており、国民からの人気も高いアルタラス王国の若き王女だ。

? 町田も国交開設に向けた協議で何度も会話を交わしている。

「もし、ルミエスが捕まればこの世の地獄を見るだろう……。大日本帝国の使者殿よ。どうか、我が娘。ルミエスを匿ってはくれぬか……。」

? 頭を下げるターラー4世。既に王としての彼はなく、只々娘のことを思う父親の姿がそこにあつた。

「……ほ、本国に、確認します。」

? まさかの一国の王が娘を助けてもらうように一国の外交官に頭を下げる。

? 想定外にもほどがある状況に直面した彼は頭が半ば真つ白になりながら辛うじてこの言葉だけを吐き出した。

? 町田から事の顛末を聞いた大日本帝国では戦争準備が整う前にパーパルディアと衝突する火種を持つのは好ましくないとしてルミエス保護に否定的な意見が多かった。

?・・・しかし、アルタラス王国がパーパルディア皇国皇都エストシラントに極めて近い事を受けて地理上対波戦争に使えるという事で極秘にルミエスを保護するということが決まった。

## ルミエスのその後と大東洋諸国会議

大日本帝国外務省管轄貨客船あるぜんちな丸

? 第三文明圏の南端付近に位置し、文明圏外にして文明圏内国に迫る力を誇った文明圏外の大国、アルタラス王国。

? そのアルタラス王国の西端から西に数百キロ進んだ海上。

? 寒さ厳しい冬の海では冷たい潮風が吹き荒び、その寒さは痛く感じるほどだ。

? アルタラス王国の若き姫、ルミエスは外交交渉に来ていた同じ文明圏外である新興国、大日本帝国の有する船に乗り1人国を思っていた。

「……っ！」

? 固く結ばれた両手は一時も離さず、ずっと国の民と自らの父である王の無事と安寧を。それだけを一心不乱に祈っていた。

「姫様……。」

? 些事の確認の為に声をかけようとしたルミエスお付きの女騎士、リルセイドは物陰で静かに涙を流す。

? 先程まで一緒にいたアルタラス王国関係者達の前では気丈に明るく振舞っていた

ルミエス。

? その様子を見てリルセイド含むお付きの者たちは元氣をもらっていた。

(やはり、姫様も無理をしておられるのだな……。)

? しかし、今は元氣で明るい雰囲気は微塵も感じられず顔は悲壯感に包まれている。

? だが、それも無理はないだろう。

? ルミエスはこちらに何の落ち度もないにも関わらず、列強の横暴で国を侵略され無垢の民と、唯一の肉親である父を失うのだ。

? しかも、それでいて自分は何をしているのかというと偶々王都を訪れていたまだ国交も(正式には)結んでいない国に匿って貰いながら逃走しているという始末。

? ……いくら王の、実の父の頼みと言えども心優しいルミエスは民を裏切ってしまった、と考えずには居られず罪悪感に苛まれていた。

(父上……どうかご無事で……!)

? そんなルミエスに乗せたあるぜんちな丸は順調に進み、大日本帝国の帝都東京を目指した。

「い、これは……。」

? 思わず漏れた、呻きにも近い声。

? あるぜんちな丸のデッキに上がったアルタラス王国の関係者達はそのあまりにも異様な光景に瞠目していた。

? 何かもわからぬ素材で作られた港に、停泊する謎の巨大軍艦。

? それらはあまりにも巨大な魔導砲を搭載している。

? その奥にはずらりと広がる市街地が見えており、その規模は計り知れない。

? ……少なくとも、アルタラス王国王都、ル・ブリアスの何倍もの規模があることは間違いないだろう。

「……。」

? ルミエスの隣に立っているリルセイドはポカーンと口を開けて立ち尽くしており、先程から一言も発していない。

? ……どうやら、刺激が強すぎたようだ。

? 彼女以外のアルタラス王国関係者も度肝を抜かれたのか目を白黒させて目の前の、謎の新興国の大日本帝国が誇る巨大都市を眺めていた。

「そろそろ到着します。お忘れ物のないようご注意ください。」

？ルミエス達に降りる準備をするように日本側の担当者が声をかけるまで、ルミエス達は日本の首都・・・帝都東京を眺めていた。

「・・・いやはや、あの船に乗った辺りから気づいていましたがこの国はそこらの国と格が違うすぎますね。」

？日本の客船・・・たしか、あるぜんちな丸と言ったか。

？それから降りて自動車と言う内燃機関を搭載した輸送機械に揺られること数十分。

？帝都東京に所在する外務省の一室に通されたルミエスはリルセイドと雑談をしていた。

「特にあの軍港らしき所に停泊していた恐ろしい大きさの軍艦！

アレに搭載されている巨大な魔導砲・・・。考えただけでも恐ろしいです。」

？あの情景を思い出したのか少し身震いするリルセイド。

? その様子を微笑みながら見るルミエスであつたが、内心はリルセイドと同じ意見であつた。

? 王国の一外交官として活躍しているルミエスにとって軍事は全くの領域外であり、軍事・兵器は全くの素人だ。

? . . . しかし、そんな素人のルミエスでさえあの軍艦の恐ろしさはわかる。

? この国は . . . ムーや神聖ミリシアル帝国並みに危険だと、自らが培つてきた外交経験が物語っている。

? 出来るだけ友好的な関係を築けるよう . . . それこそ、対立などしないように気をつけなければならない。

? しかし、そこで疑問も生ずる。

「 . . . それにしても、何故大日本帝国は我々の受け入れを承諾したのでしょうか? 」

? リルセイドはふと頭に浮かんだ疑問をルミエスにぶつける。

? アルタラス王国を出発した後に船中で大日本帝国外務省の者から正式に大日本帝国がルミエス達を匿うということを知らされた彼女は、一人祈るルミエスを見た後は自室でその理由を考えていた。

? この国の力であれば憎き敵、パーパルディア皇国など容易に吹き飛ばせるだろう。

? だからこそ臆せずパーパルディア皇国と戦争中の国の王家という、ほかの文明圏

外国どころか列強ですら嫌がるような人物を匿えたのだろうか、こんな事をして大日本帝国に何の得があるのだろうか。

「・・・もしかすると、大日本帝国はこれを機に我が国の魔鋹山を手中に収めるつもりなのかもしれません。」

? ルミエスは暗い顔で話す。

?・・・しかし、日本は今までの国交開設に向けた交渉からして理性的な国であるということはわかっている。

? 少なくとも、パーパルディアよりはマシなはずだ。

? そう思っていると、この部屋の扉が開けられた・・・。



大日本帝国帝都東京のとある家

? アルタラス王国の亡命した姫、ルミエスは大日本帝国外務省の者に連れられて暫しの東京観光を楽しんだ後、市内某所の一軒家に落ち着いた。

「……。」

? しかし、ルミエスの雰囲気は重い。

? それもその筈、彼女はつい先程日本の外交官から『祖国の敗戦』というとても残酷な事実を教えられたのである。

? アルタラス王国とパーパルディア皇国の戦争はアルタラス王国の悲惨な敗北という形で終わった。

? それはつまり、ターラー14世を筆頭とした王族の皆殺しを意味する。

? ……しかし、彼女達にも希望はあった。

「……それにしても、まさか日本でこんなにも反波感情が高いとは思いませんでした。」

? リルセイドが街で見た新聞やデモの様子を思い出しながら気分を変えるように話すと、ルミエスも返答する。

「……ですね。……上手く行けば、この国の支援を取り付けて祖国を奪還できるかもしれません。」

? と、口では強気な事を言うがやはり父親の、親族の死というのは流石に耐えられな

いのかフラフラとしながらルミエスは自室に籠り、1日の間出て来なかった。

クイラ王国 大東洋諸国会議

? 大東洋に位置する各国が参加して行われる大東洋諸国会議。

? 何か大きな出来事が起こった際に臨時的に開催されるこの会議では元々会議の主催国が文明圏外国であつたため列強を含む文明圏国は『参加するだけ無駄』として不参加を表明している。

? 今回行われた会議は毎回の開催国であるクワ・トイネ公国の治安・財政悪化を受けてクイラ王国に変更されて行われていた。

「これより大東洋諸国会議を始めます。」

? 開催国であるクイラ王国の代表が始めの挨拶をして会議を始める。

? 無論の事議題は最近できたばかりの新興国、ドイツ国と大日本帝国についてである。

? 各国代表には事前に日本とドイツがした事がまとめられた紙が回されており、要約すると以下の通りである。

・日本とドイツはロデニウス大陸北東部に突如現れた新興国であり、本人達曰く異世界から転移してきたらしい

・ドイツはクワ・トイネ公国の国境で、日本はドイツの仲介でクワ・トイネ公国と国交を結んだのが初接触である

・クイラ王国から大量に謎の石・液体を輸入しており、代わりに武器・インフラを輸出している

・日独はロデニウス大陸の戦争においてクワ・トイネ公国側陣営として参加。理由は恐らくクイラ王国の石や液体の確保と思われる。

・フェン王国の軍祭では皆周知の通りだとは思いますが日本は驚異的な大きさと威力の超巨大魔導砲を搭載した軍艦を保有。

? ドイツは海中に潜る船と言って良いのかわからない船を持つ。

・パーパルディア皇国のワイバーンロードを20騎叩き落としている

「そして、最後に日独と接触した国々で共通しているのが『強大な力を持った国』という事だ。」

「各国の認識をお聞かせ願いたい」

「クイラ王国の代表が各国へ発言を促すと早速マオ王国の代表が挙手し、発言を開始した。」

「マオ王国です。我が国は日本とドイツと国交がないが極めて危険な国だと思つてい

る。

？ 何故なら日本とドイツは『気に入らないロウリア王国』を滅ぼしたからだ。

？ 圧倒的な戦力で、ロウリアほどの大国を滅する。特に日本は帝政。つまり帝国主義である可能性が高いし、ドイツも日本に準ずるか匹敵する力を持つのであればいつ拡大政策に乗り出すかわからん。

？ よつて、日本もドイツもパーパルデア皇国の様に侵略してこないと言い切れるのだ。

？ ……それに、ドイツ国のロウリア統治は過酷な物であると聞いている。両国がパーパルデア皇国とは違うとは言い切れん。」

？ それを聞いて各国の代表が『うーん……』と唸る。

？ すると、トーパ王国が手を挙げた。

「トーパ王国です。我が国は日本とドイツと国交がありますが、取り敢えずは『理性的で話ができる国家』と思っています。」

「少なくともパーパルディア皇国の様に文明圏外国だからとあからさまに馬鹿にしてきたと言うことはありませんでした。」

「……少なくとも、彼らにとつて不利益になることをしなければ目を付けられる事はないかと。」

「この発言に日本とドイツと国交を結んだ国々は確かにな、と頷く。」

「それに、本当に文明圏外を武力で併呑する気があるならばクイラ王国の戦力を強化したりしないだろう。」

「……だが、マオ王国のいうことも最もであるし何よりも日本の『帝政』が足を引つ張っていた。」

### 『帝政』

「第三文明圏外諸国がこの言葉を聞いて真つ先に思い浮かべる物とえば、間違いなく帝国主義とパーパルディア皇国であろう。」

「無論なこと、神聖ミリシアル帝国の様に理性的で帝国主義的ではない帝政国もある」

のだが、彼等に馴染み深い帝政の国であるパーパルデア皇国は理不尽な暴力で各地の国々を併呑する典型的な帝国主義的・・・と言うよりは覇権主義・膨張主義的な国である。

？その為、彼ら第三文明圏外諸国には最早アレルギーの様に『帝政Ⅱ覇権主義・膨張主義』という刷り込みが行なわれていた。

？その為に日本とドイツがいつ侵略に乗り出すか、と心配でならないのである。

？結局、その後も日本とドイツへの対応・反応は長々と協議され結局、

『大日本帝国とドイツ国とは敵対しない』

『パーパルデア皇国は情勢を慎重に見守る』

？ということが決まった。

## 開戦

パーパルディア王国 とある港町に停泊する客船

『・・・以上、開戦日は『二月一日』とする。』

? パーパルディア王国の皇都エストシラントから少し離れた田舎の港町に停泊する客船で日本国外務省の役人、守口は電信機を使い本国からの指示を受けていた。

『・・・はい、はい。わかりました。以上、定期通信を終わります。』

? 最後に電信終了の言葉を告げると守口は電信機の電源を切る。

(にしても、漸くこの国から離れる目処が立ったな・・・。)

? 思えば、前回皇国の第三外務局に約束を破られてからそろそろ2ヶ月ほど経つ。

? しかし、また行ったところで難癖を付けて会談をしてくれないだろうしそもそも開戦は決定事項な為余計なことをされないようにと外務局へは寄り付かないようにしていた。

「次にあそこに行くときは宣戦布告の文書を突き出す時か・・・。」

? 守口は電信室の椅子に座り、これから1ヶ月後のことを思い描いていた。

大日本帝国皇居 御前會議

? 新年を迎えたく。

? 珍しくも帝都東京が雪に包まれた正月二日後の一月三日。

? とうとうパーパルディア皇国皇軍が行動を開始したという情報が陸軍情報局を通じて政府に届いた。

? なんでも、各国を通じて集めた情報によればパーパルディア皇国皇軍は進路的に友邦フエン王国を目指しているらしい。

? 少し前に海軍の駆逐艦隊が殲滅した監査軍とは違う、本物の、最新鋭の、第三文明圏最強の艦隊がフエンを目指してやって来ているのだ。

? この情報は日本政府を驚かせ、対応策を練る為に緊急の御前會議が開かれた。

「断固迎撃すべきである!」

? 海軍大将にして軍令部長、永野修身は陸軍参謀本部長、杉山元陸軍大将と共に断固迎撃すべきという意思を示した。



? 最近、兵器の共同開発などで少し仲が良くなった陸海軍は手を取り合つて政府に対抗することが多くなり『陸軍としては海軍の提案に反対である!』などと足の引つ張り合いをあまりしなくなつた。

? その為、政府側としては非常にやりにくい。

? ……だが、今更ここまできて開戦を渋るのも得策ではないとも思う。

? 既に国内世論では新聞が煽りまくつたこともあり戦争するのが当たり前という空気分になつており、ここでひよつたと聞けば暴動が起ころるかもしれない。

? 一応開戦日は二月一日と決めていた為、1ヶ月ほど早い事になる。

? しかし、既にフェン王国の基地の建設は済んでいるし、大した問題はなからう。

? 最終的に、天皇陛下の許可を得た日本政府は直ちに現地での外交官にパーパルディア皇国に宣戦布告の文書を送るように通達。

? フェン王国に駐屯する海軍第二機動艦隊にも戦闘用意の命令を下した。

パーパルディア皇国第三外務局

(まさか、これ程までに早くこの地に訪れるとはな……。)

? 大日本帝国外務省の役人、守口は個人的に嫌いな国 No. 1、パーパルディア皇国の第三外務局の門をくぐる。

? 宣戦布告の文書を送るという大任を任された為内心はともドキドキしており、背中からは変な汗が少々出てきていた。

(落ち着け……落ち着け……相手はただの蛮族……蛮族……。)

? 落ち着くように心の中で念じながら守口は第三外務局のいつもの窓口を目指した。

パーパルディア皇国 第三外務局

? パーパルディア皇国第三外務局の窓口勤務員、ライタはいつものように仕事をしていた。

? 数多くの文明圏外国の相手……というか、某文明圏外国関係の報告書に忙殺されたのかこの一年程度で彼はげっそりと痩せていた。

(ちくしょう……なんで、なんで俺がこんな貧乏くじを……。)

? 出世願望があつたあつたライタだが、これでその道は完全に閉ざされたであろう。

バイバイ出世。こんにちは窓際。

? 半分泣きそうになりながら落ち込んでみると、彼に1人の男が話しかけた。

「こんにちは。大日本帝国の者ですが……。」

? 聞き覚えのある、男の声。

? ライタが顔を上げると、そこには大日本帝国の使者が無表情で立っていた……。

神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパスの酒場

? 今日も今日とて活気に満ちている神聖ミリシアル帝国港町カルトアルパスの酒場。

? いつも通りこの酒場では昼にもかかわらず酒を搔つ食らう飲兵衛や情報交換をする商人・軍人で賑わっていた。

? ここでもフロアの客の大半が顔を向き合わせて話し合っている。

? 様々な声が交錯する喧しい酒場。普段から大声を出しているであろう酒場の従業員でさえもこの酒場によく通る声を発するのは難しい。

? いつも通りのいつもの風景。……しかし、そのいつもの風景は突如として非日常

に姿を変えた。

？この酒場に設置された平面水晶体から突如緊急ニュースが流れる前に鳴らされる音が鳴った。その音を聞いた酒場の客たちは一瞬で静まり返る。

？先程までは飲兵衛の笑い声や情報交換の声飛び交っていたにもかかわらず、今は平面水晶体からの音しか聞こえない。

？テレビショッピングの放送がされていたチャンネルはいつのまにかニュース番組に変わっていた。

？画面の奥ではニュースキャスターが慌ただしく準備をしており、数秒後、ニュースキャスターの男は驚愕のニュースを読み上げた。

『本日、第三文明圏外国である大日本帝国及びドイツ国が列強。パーパルディア皇国に宣戦を布告しました。』

？これを受けて我が国は・・・』

？第三文明圏を支配する列強に、文明圏外国が宣戦布告。

？このあり得るはずがなかった珍事は瞬く間に世界を駆け巡る・・・。

パーパルディア皇国領 アルタラス島 ル・ブリアス 地下

「とうとう始まったか……。」

? 慌ただしく列強と文明圏外の二カ国との開戦を伝えるラジオ。

? その奥にいるキャスターの声は明らかに驚きを含んでおり、この出来事がいかに予想外かと言うことを知らせている。

? アルタラス島の地下に根をはる反波組織のリーダー、ライアルはその言葉を冷静に受け止めた。

(まあ、俺もまさか本当に皇国に正面から喧嘩をするとは思わなかったが……。)

? フツと笑った彼は拠点に山積みになされた物資の中から自分局の黒いブツを取り出す。

? そして、彼はそのブツを分解して整備を始めた。

神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパスの酒場

? 中央世界に存在する誰もが認める最強の国、神聖ミリシアル帝国。

? 帝国南端付近の港町、カルトアルパスは世界最大の交易拠点だ。

? そんな港町のとある酒場では酔っ払いたちが話をしていた。

「列強パーパルディア皇国と文明圏外三カ国が争うらしいぞ。」

「また3つも国が滅び、皇国の版図が広がるのか……。にしても、最近の皇国はよくやるねえ。戦争戦争また戦争じゃねえか。第三文明圏と文明圏外を統一する気かね。」

「その意図は無くも無いだろうね。パーパルディア皇国と言えば中位列強国。やっぱり神聖ミリシアル帝国やムーには劣るからね。」

「しっかしその三カ国も勇敢だな。国民のほぼ全てが不幸になるつてのに、従属しないなんてな。」

「剣の国フェンと新興国の大日本帝国とドイツ国だとき。」

「何? 大日本帝国とドイツ国だと? ……あーあ。こりやあ、皇国も久し振りにダメージを負うかもな。」

「どう言うことだ?」

? 大日本帝国とドイツ国に関する情報を求めた男はカウンターに酒を注文する。

? そして、その酒が渡されると日本とドイツを知る商人は情報を話し始めた。

「おりゃあこの前、ドイツ国に商売に行ったのさ。なんでも、ロウリア王国を二カ国がかりりでは言葉跳ね返した国だからな。新しい市場開拓に期待できると思ったんだ。

?・・・そしたら、ドイツは恐ろしいぐらい入国審査が厳しいんだ。

?その時はクワ・トイネ公国からドイツ国に入ろうとしたらドイツの警察に止められてな。馬車を全てひっくり返されたよ。」

?彼は酒を飲みながら話す。酒を払った男以外の者達は聞いてない風に装っているが、しつかりと聞き耳を立てている。

「それから一週間くらい待たされてからようやくと入国許可証が出たからいざ新天地へ!とドイツ南部のミュンヘンという街に行ったんだが・・・そりゃあもうすごかった。

?・・・なんせ、ムーみたいな内燃機関を搭載した輸送機械が沢山走ってるんだ。」

「はあ☒」

「嘘だと思うだろ?・・・俺も、最初は信じられなかったが見ていくうちにわかった。あの国の力は本物だよ。特にあの国の首都、ベルリンというところはそりゃあもう物凄

?あの国は少なくともムーには匹敵する力を持つぜ。」

?こうして、酔っ払い達の情報交換は進む・・・。

パーパルディア王国 皇都 エストシラント 皇宮

? 皇女レミールは激怒していた。

? その理由は、我が国に宣戦布告をしてきた『大日本帝国』と『ドイツ国』である。

? ただでさえ『大』に加えて『帝国』と国名に付けてみたり、監査軍を破ってみたりなど生意気さが目立っていたにもかかわらず今度は身の程もわきまえずいつちよ前に皇国に宣戦布告。

? どれだけ皇国をバカにすれば気がすむのだ! と怒鳴りつけたい気分だ。

? 人一倍愛国心が強く、プライドが高い良くも悪くも列強パーパルディア皇国民の模範的な存在のレミールは文明圏外の新興国に馬鹿にされたということでも怒りが収まり切らず、パツと立ち上がった。

「どけー皇帝陛下に直談判してくる!」

? レミールはお付きの女性を突き飛ばすように跳ね除け、皇帝ルディアスの元へ向かった。



「その後、日独の外交担当官はレミールとなりルディアスはレミールの提案を飲み日独に対して『殲滅戦』を宣言した。

フエン王国日独共用海軍基地 日本海軍第二機動艦隊

？フエン王国に建設された日独海軍基地に停泊する、1つの艦隊。

？その艦隊は日本からすれば只の1艦隊に過ぎないがドイツからすれば喉から手が出るほど羨ましい艦隊である。

？空母5隻を含むこの艦隊はフエン王国において『パールディア皇国軍侵攻』の報を、そして『パールディア皇国が日独に対して殲滅戦を宣言した』という情報もついでに受けていた。

？司令長官である小沢治三郎海軍中将率いる第二機動艦隊は帝国に侵攻してくる蛮族を跳ね除ける為、静かに行動を開始した。

## フエン王国沖大海戦①

フエン王国沖西に120 km 第二機動艦隊所属 第二水雷戦隊

? 大東洋沖の冬の海の波を割りつつ進むいくつもの船影。それらは船体に取り付けられた煙突からもうもうと排煙を上げつつ敵を目指して進む。

? 軽巡洋艦神通を旗艦とする大日本帝国海軍第二機動艦隊所属の第二水雷戦隊はフエン王国に向けて侵攻中というパーパルディア皇国皇軍撃破の為に大東洋を進んでいた。

「穏やかな海だな・・・。」

? 第二水雷戦隊司令長官、三条は目の前に広がる海を見つつ感想を述べた。

? かつての世界の冬の日本海のような荒れ模様は無く、寒いものの穏やかな潮風が吹いていた。

『こちら電探室！敵艦隊は当艦より西に150 km付近を航行中！』

? 内地で取り付けられた試作型水上レーダーを運用する電探室から報告が入る。

? それを聞いた三条は艦隊の針路を微調整すると誰ともなしにぼやいた。

「全く。最近では試作型の物が多くないか？電探は試作型、ソナーは試作型。特に新鋭艦

の秋月型など試作電探試作ソナー試作砲弾と試作ばかりではないか。」

？彼の隣に立っていた神通艦長、東堂大佐はそれを聞いて苦笑しつつ返答する。

「まあ、内地の技術者達は独逸に追いつけ追い越せと凄い事になっていてというじやないですか。おそらく一刻も早く実戦での情報が欲しいでしょう。」

？・・・まあ、ちゃんと動作するかは確認済みらしいですし大丈夫ですよ。」

「そうでなければ困るのだが・・・。」

？三条は若干不満そうに鼻を鳴らしてからまた正面に広がる大東洋を睨んだ。

日本海軍第二機動艦隊 旗艦：蒼龍

？転移後、大日本帝国のドイツ大使館を通じて太平洋戦争、ひいては第二次世界大戦の戦局を色々探った日本海軍内部では『武蔵が米海軍の航空攻撃で沈んだ』という情報を手に入れ、航空主兵論者の勢いが強くなっていった。

？この勢いに乗り遅れるなど言わんばかりに山本五十六や井上成美により色々な艦

隊からの寄せ集めであつた南雲機動艦隊は正式に機動艦隊として再編成され、当艦蒼龍は同じ二航戦の飛龍と新造の軽空母3隻を含む第二機動艦隊を編成。

? 蒼龍は旗艦としてこの艦隊を率いる事になった。

? そんな新設日本海軍第二機動艦隊の初代司令長官、小沢治三郎海軍中将は蒼龍艦橋で作戦参謀達と共に作戦の最終確認を行つていた。

「本作戰では航空攻撃により敵の竜母艦隊を真つ先に潰した後、第二水雷戦隊が突入して敵主力戦列艦隊を沈める事になっております。」

? テーブルに広げられた大東洋を示す地図。それはとても大きく、周辺国家の名前や地形など詳細な情報が書かれていた。

「また、第二防空駆逐隊および第四戦隊は空母部隊の護衛として待機します。」

? 先のロデニウス沖大海戦時。

? 4400隻のロウリア艦隊を対米戦に向けて編成していた南雲機動艦隊で迎え撃つた日本海軍はその後、絶望的なまでのコスパの悪さに驚愕した。

? なにせ、戦列艦ですらないちっぽけな木造船をわざわざ空母6隻、戦艦2隻を含む大艦隊で迎え撃つたのである。

? ただでさえ燃料を大量に食う戦艦をただか木造船を破壊するために投入するこ  
とができるほど日本は裕福ではない。それは航空母艦や艦載機も同様である。

? よって、日本海軍ではこの戦訓を活かしてパーパルディアの持つ『竜母』という空母的な物のみを航空攻撃で撃破し残った戦列艦は全て駆逐艦・軽巡洋艦による砲撃で片付ける事にしていった。

「二水戦からの報告によると電探には2つ反応があり、1つは現在フェン王国より西に270 km程、もう1つは西に300 km距離程の地点を航行中とのことです。」

「うむ。」

?・・・そこで、話が止まる蒼龍の作戦室。

? ここにいる人間は皆が皆それぞれ思い思いの表情を浮かべているが、心の内では同じ事を考えていた。

「・・・空母は、竜母はどっちだ?」

「現在、彗星1号が270 km地点を航行中の艦隊を偵察に向かっています。もう少しすれば、攻撃目標が定まるかと。」

? 小沢長官が皆が思っていた事を代弁すると作戦参謀の1人がすぐさま返答する。

? それを聞いた男達は大人しく彗星1号からの報告を今か今かと待っているが、その間も刻一刻と時間は過ぎていく。

? 各空母の甲板には飛行準備を整えた大量の航空機が並べられており、蒼龍の飛行甲板からも力強い発動機の音が響き艦橋内部まで聞こえてきている。

? いつでも発艦は可能だ。

? 秒針が正確な時を刻み、60に到達すれば分針がまた一目盛動く。時計以外に全く動きがない艦橋内の空気はまるで少し突けば崩れてしまいそうに感じるほど張り詰めていた。

? 小沢長官の頬を焦りの汗が伝い、床に落ちた瞬間。とうとう運命の時はやって来た。

「彗星1号より入電! 『眼下ヲ航行中ノ敵艦隊ニ空母ハ確認デキズ』とのことです!」  
「よくやった!」

? 正確に言えば空母ではなく竜母なのだが、今はそんなことはどうでもいい。

? 作戦参謀たちは一丸となって敵目標が定まった事を喜び、直ちに発艦命令を出す。

「攻撃隊、発艦開始!」

『攻撃隊、発艦開始!』

? 小沢長官が発した発艦開始の命令は敵目標の位置と共に無線機を通して5隻の空母に届けられる。

? 各空母で発艦のために飛行甲板で待機していた戦闘機隊は一斉に大空へ飛び立った。

パーパルディア皇国皇軍 竜母艦隊

? パーパルディア皇国皇軍竜母艦隊は整然と隊列を組み、冬の大東洋をフェン王国目指して進撃していた。

? 竜母はワイバーンを搭載し、発着を行うため通常の戦列艦よりも少し大きい。

? これらはパーパルディア皇国の高い造船技術のなせる技であり、皇国の技術力と武力の象徴でもある。

? そんな竜母艦隊は主力の戦列艦隊よりも少し後ろを進撃していた。

? 艦隊副司令、アルモスは見る者全てに威圧感を与えるこの立派な艦隊を見て愉悅に浸り満足げに微笑む。

? そして、横に立っているワイバーンの竜騎士長に話しかけた。

「竜騎士長! 何故、パーパルディア皇国皇軍が強いかわかるか?」

「総合力です。」

「うむ! そうだ! だが、中核の戦列艦もだが皇国が無敗である真の理由はこの中核たる

竜母艦隊があつてこそ、だ！

陸上においても海上においても。制空権を制するものが戦争を制する！」

？ 自信満々に堂々とした態度で話すアルモス。

？ それを見て竜騎士長も長年の経験を元に適当に音頭をとる。

「流石であります！ 副司令殿！」

？ それにますます気分を良くしたのか、まるで演説でもするかのように大仰なアクションをしつつ竜騎士長に再び話しかけるアルモス。

「そして見よ！あの最新鋭の旗艦、『ミール』を！……あれは素晴らしい！戦体は大きく、機能美に満ちている！そして私が乗っていれば尚の事良し！」

「そうであります、副司令殿！」

？ 竜騎士長は最後の言葉は何も聞こえなかったことにしてさらに音頭をとる。

？ ……だが、アルモスの言うことは間違つてはいない。

？ パーパルディア王国の誇るこの竜母艦隊は確かに第三文明圏内外を問わずあらゆる国を恐怖に陥れた最強の艦隊だった。

そう、だったのである……。



パーパルディアア皇国皇軍艦隊より東に100 km程の地点

第二機動艦隊第一派攻撃隊 編隊長機の彗星

『敵艦隊ノ位置ハ・・・』

? 母艦の方から送られてくる敵竜母艦隊の位置。

? ドイツ製の物のコピーから始まった航空機無線の改良は技術者達の睡眠時間と引き換えにどんどんと改良が進み転移前と比べ精度がかなり向上していた。

? それら無線機は水偵や一航戦に優先的に配備されていたが、量産が進むにつれ全空母・水偵の中で標準的な装備になってきている（一部軽空母では未だ不足気味のようだが）

? 攻撃編隊長の松田は彗星の後部座席で地図を見つつ針路の微調整を行っていた。

「ふむ、敵艦隊に大きな進路変更は無し、と。」

? 母艦からの連絡からすれば目標のパーパルディアア皇国皇軍龍母艦隊に大きな動きはなさそうだ。

? 次に彼は無意識の内に針路がズレていないかを確認する。

？何も目印がなく目に映る物といえは雲と眼下に広がる大海原しかない海上では砂漠よろしくいつのまにか針路が曲がっていた、と言うことになりかねない。

？特に新造の軽空母の搭乗員は一航戦や五航戦、そして松田らの属する二航戦と比べ少し練度が低めである為いつも以上に針路には気を配っていた。

？第二機動艦隊から飛び立った攻撃編隊、合計100機の大編隊は敵竜母艦隊を目標として蒼空を進むのであった。

？パーパルディア皇国皇軍竜母艦隊で最も早く異常に気づいたのは上空直掩に当たっていた一騎のワイバーンロードであった。

「・・・ん？あれはなんだ？」

？皇国の竜騎士であるドグナは、艦隊前方から向かってくる謎の黒点らしきものを偶々見つけた。

？一瞬見間違いかとも思ったがその黒点は瞬きをしたら消えた・・・と言うことはな

く、むしろ急速に数を増やし、一つ一つの大きさも大きくなっていった。

「……まさか……敵騎か!?」

? 驚愕するドグナ。

? ここは付近に陸のない大東洋の真ん中。文明圏外国の保有するワイバーンでは航続距離が足りず、竜母のような高等技術が必要な船を持っている国はいない為敵の先制攻撃はまずあり得ない。

? そもそも直掩を上げる意味が無い、と考えていたドグナにとって凄まじい衝撃であつた。

? そうこうしている間にもその不思議な黒点はみるみる内に大きくなっていく。

『ここから直掩四番騎、敵ワイバーンらしき物を確認!』

? あまりにも驚き過ぎた為少しもつた声となつたが自らの属する竜母に魔信は届き、急遽警戒を知らせるムー製の警報機が鳴らされた。

『全機突撃！強襲攻撃！』

？未だ小さくしか見えないパーパルディア竜母艦隊から警報機の音が鳴り響くのを聞いた第二機動艦隊第一派攻撃隊編隊長、松田は無線機を使い編隊各機に強襲攻撃命令を下した。

？精度の良くなつた無線機は松田の声をノイズの少ない音声で各機に伝える。

？今回の航空攻撃では二つシナリオが用意されていた。一つ目は『奇襲』であり、二つ目は『強襲』である。

？奇襲攻撃の場合は水平爆撃が初撃を加えてから急降下爆撃隊が攻撃をすることになつている。

？その理由は『水平爆撃の命中精度向上』である。

？先に急降下爆撃機が攻撃してしまうと水平爆撃をする頃には急降下爆撃の命中弾による火災などで煙が立ち登る事が当たり前だが予測される。

？高高度から爆弾を投下する水平爆撃にとつて視界不良は致命的な問題だ。

？その為、基本的には水平爆撃↓急降下爆撃という順番に攻撃する奇襲を取るよう  
に、と事前の作戦説明時には言われていた。

？しかし、敵がこちらの接近に気づいているのなら話は違う。

？敵が気づいているにも関わらず悠長に水平爆撃などをしてると敵迎撃機に迎

撃される可能性が高くなってしまふ。

? その為、敵がこちらに気づいている場合は空母（この場合は竜母）を急降下爆撃で先に沈めて迎撃機を上げられなくする必要が出てくる。

? よつて、強襲では急降下爆撃↓水平爆撃という順に攻撃するのだ。

? 話を攻撃編隊の隊長機に戻す。

? 松田から強襲攻撃の指示を受けた編隊各機は展開を開始した。

? 彗星や九九式艦上爆撃機で構成される急降下爆撃機は高度を上げ始め、護衛の零戦隊も戦闘に備え高度を上げ始めた。

? 急降下爆撃隊が遙か上空に消えた頃。

? 先程までは小さかったにもかかわらず、今はかなり大きく見えるようになったパールディア竜母艦隊では今も警報機が鳴り響いており、飛行甲板では竜騎士が発艦準備をしようとしているのが小さくだが見える。

? ……しかし、今すぐ上げられそうな竜騎士は少なく油断していたのか直掩機も少ない。

（絶好の機会だ）

? 松田がそう思った瞬間、上空からいくつもの機影が竜母を目指して急降下してきた。

パールディア竜母艦隊 旗艦：ミール

「急げ急げ！早く上げろ！」

？ 竜母の中で大人しく檻に入っていたワイバーンロードは久し振りの外だと若干興奮している。

？ 人間の成人を普通に超える大きさのワイバーンロードが興奮して暴れるのは非常に不味い。

「はい、どうどう。落ち着け！出撃だぞ！」

？ 皇国の竜騎士、マグスは相棒をいつものように叱りつけ大人しくなったのを確認してから跨る。

？ 少々幼い性格の相棒はこうしてマグスが喝をいれないと外に出られる度に興奮してしまい、なかなか言うことを聞かないのだ。

？ 相棒に跨り飛行帽を被りいざ敵を迎撃せんと飛び上がろうとしたその時。

『敵機直上！まっすぐ急降下してくる！』

？見張員の絶叫が飛行甲板に響いた。

？マグスがふつと上空を見てみると、そこにはまるで生物ではない・・・例えるならば、ムーの飛行機械のように見える不思議なワイバーンがありえない角度でこの竜母に突っ込んできていた。

？それはこの船の帆よりももうちよつと高い位置で何やら黒い糞みたいな物を落とすと機首を上げて離脱していった。

「な、何だったんだ？」

？と、言おうとした彼の体は次の瞬間に発生した高熱と爆風、そして衝撃波により消し飛び、その言葉が全て紡がれることはなかった。

## フエン王国沖大海戦②

?それは、まるで巨大な魔導砲の攻撃のようであった。

?付近を航行していた竜母『クース』の乗員は後にそう証言したと言う。

?上空7500mから急降下した日本海軍の彗星艦上爆撃機は500kg航空爆弾を真下の目標に向けて投下した。

?爆弾は彗星の胴体から青空に放り出されパーパルディア竜母艦隊旗艦『ミール』に吸い込まれるように向かっていき、甲板を貫いて大爆発を起こす。

?脆い木造の船体は頑強な海上要塞である戦艦を撃沈する為に開発された500kg爆弾の圧倒的な破壊力に耐えきれず、瞬く間に四散する。

?その皮膚を焦がすような熱波が過ぎ、周りの艦の水兵がミールの方を見た時には既に遅し。

?そこには燃え盛るミールだった物が浮かんでおり、原型をとどめていない船体の半分は海中に没していた。



「な、何だ！な、何が起こっている!？」

？ 艦隊副司令のアルモスは先程までやれ素晴らしいだの機能美だのと賞賛していた最新鋭竜母、ミールのあまりにも不甲斐なく呆気ない最期を目の当たりにして軽く混乱していた。

「き、旗艦との通信が途絶！」

？ アルモスが混乱して甲板で狼狽していると、艦橋の通信手から焦った声で報告が入る。

？ ・・・既にほぼ全てが海中に没した旗艦に指揮能力を期待する方がおかしいだろう。

？ 最新鋭である期待の竜母が沈んだことで取り乱していたが、アルモスも伊達に皇国主力竜母艦隊の副司令を務めてはいない。

？ 何度か深呼吸をして落ち着きを取り戻すと、直ぐに『艦隊司令は戦死』と判断し命令を下す。

「通信手！ 艦隊司令戦死につき私が臨時指揮をとる！」

？ アルモスは身を翻して艦橋内部へと向かった。

「おおー．．．派手に吹っ飛んだなあ．．．。」

? 一番槍の彗星の爆撃をみて呑気に感想を述べる零戦三二型に乗るこの男。

? 名を松浦と言い、この編隊では護衛の戦闘機隊に属する。

? 彼の属する部隊の任務は上空6000m付近に待機し、爆撃隊の迎撃に上がってきた敵騎を逆に撃退することである。

? ．．．だが、敵の残った竜母から新手が上がってくる気配もないし、敵直掩機は既に他の味方に葬られて肉片へと姿を変えている。

? 彼としてはさっさと降下して敵船団に20耗をぶち込みたいのだが、敵迎撃騎が登ってこないとも言いつれないので仕方なく上空に待機しているのである。

? そうこうしていれば遙か下方の海面からまた爆弾が炸裂する轟音が響いてきた。

? 何事かと下を見やれば今度は少し小さめの空母．．．いや、竜母と言ったか? が派手に爆発していた。

「こりゃあ俺たちの出番はないかもしれんな……。」

? 彼は上空から戦局を見守りつつ、敵迎撃騎に備えた。

『敵機直上——!!』

「回避!・面舵!」

? 見張所から放たれ、甲板上に響き渡る敵機来襲を知らせる見張員の絶叫。

? その必死な声を聞いたアルモスは素早く回避行動を操舵手に指示する。

? その次の瞬間には先程まで当艦が進む予定だった海面に敵の黒い何かが落下し、轟音と共に巨大な水柱を立てた。

? 戦闘開始から約30分以上たった今。

? アルモスは自らの座乗する竜母クースを守り抜くべく脳味噌をフル回転させて必死に回避行動を取っていた。

? 既に二回の敵の攻撃の回避に成功しており、この船が速度性能で空母に劣る竜母で

ある事を考えるとこの回避数は奇跡に等しい。

? 大戦初期の帝国海軍の急降下爆撃の命中率が8割であったことを考えるとアルモスは目覚ましい活躍をしているのだが、そんな事を知らない彼の胸中は悔しさでいっぱいである。

(くそっ！第三文明圏の覇者たる列強パーパルディア皇国の竜母艦隊がこんな無様な負け方してなるものか……！)

? あの後、数騎の迎撃騎が何とか飛び立ったものの待ち構えていた日本軍騎に早々に迎撃され全滅。今やこの艦隊の上の空は日本の独占状態となっている。

? 日本軍騎の攻撃により竜母とその護衛艦は瞬く間に姿を減らし、今や竜母は当艦のみだ。

(絶対に、逃れきってみせる……！)

? もしも、自分が生きて帰れば後から他の皇軍の指揮官たちから弱腰だの逃げ腰だのと後ろ指をさされるだろうがそれでも構わない。

? 誇り高き皇国軍の一司令官としてこれ以上文明圏外国如きに遅れを取るわけにはいかないのだ。

? そう決意を新たにした時、

『敵騎『正面』！真っ直ぐ突っ込んでくる！』

? 再度甲板上に響き渡る敵機発見の報。

? アルモスは『またか!』と思いつながら半ば条件反射的に上空を向き、コンマ数秒後に『正面』という単語を認識した。

(上空・・・ではなく、正面・・・!??)

? 大慌てで上空を向いた顔を正面に向けた時。彼の目に映ったのは先程からこの船に上空から突っ込んでくるワイバーンとはまた違った種類の物である様に見えた。

「なっ! 新手・・・!」

? と、アルモスが言った後で

『ドガガガガガッ!!!』

? という、鳴き声とは到底思えない重く、速く、大きく、そして何よりも無機質な音がした。

「おっ!」

? すると、周りに立っていた水兵たちが突然摩訶不思議な声を立てつつ血を吐き糸が切れた操り人形のように膝から崩れ落ちる。

「な、何が起こった!」

? 突如として血飛沫となった部下を目の当たりにしてアルモスは動揺する。

?・・・そして、その動揺が命取りとなった。

「敵機直上——っ！」

？見張員の絶叫が混乱したアルモスの頭に響き、アルモスは自分の使命——敵の攻撃を避けることを思い出す。

「しまった！」

？大慌てで上空を確認すると、超高速で本艦上空から離れていく敵ワイバーンと凄い勢いで大きくなっていく黒い点が見えた。

？この空襲により、皇国竜母艦隊は数隻の戦列艦を残して全滅。

？艦隊司令・副司令や旗艦ミールなど多数の戦力が海の藻屑と化した。

「りゆ、竜母艦隊と通信が途絶。ぜ、全滅したものと思われます……。」

？艦隊旗艦であり、皇国の持ちうる最新鋭の技術を惜しみなく投入した文句なしの最強艦——120門級戦列艦、パールの魔信室から送られてくるあり得ない報告。

? それは、『文明圏外国のワイバーンによる空襲で皇国竜母艦隊が全滅』と言うものである。

「ば、バカな……。」

? 普段であれば『ありえん』として切り捨てるような情報だが、今回は違う。

? なんせ、もう何十分も前からずっと当艦に向けて竜母艦隊の副司令が乗る艦から救援要請が届いていたのである。

? その救援要請はまるで断末魔のようであり余程逼迫した状況であつた事が伺える。

(ぶ、文明圏外国)とときの軍勢に、皇国主力が敗北……。)

? 現在、当艦隊は反転し竜母艦隊から最後に魔信が発せられた地点を目指して進んでいる。

? ……一体、竜母艦隊に何があつたのだろうか。

(まさか、敵も戦列艦や竜母を保有して……? いや、まさかな。)

? 脳内で今回の敵の戦力を想像していると、またもや魔信室から緊急の報告が入った。

『戦列艦ロプーレより入信! 艦隊後方に多数の船影を確認!』

「おー……あれがパールディアの戦列艦隊か。」

？日本海軍第二水雷戦隊旗艦、神通艦長の東堂大佐は呑気にパールディアの戦列艦を見てそう呟いた。

「何だお前は。物見遊山じゃないんだぞ。もつと緊張感を持たんか。」

？東堂の緊張感のない声を三条が嗜める。

？神通の周囲には二水戦に属する駆逐艦16隻が展開しており、白波を立てて海上を進んでいた。

「三条長官。そろそろ敵艦隊が射程距離内に入ります。」

「うむ。」

？パールディア艦隊は突然の我々の出現に慌てたのか必死に旋回しようとしており、側背面をこちらに晒していた。

「各艦砲撃用意！」

「各艦砲撃用意！」

？三条の命令は神通の無線機から各艦に送られ、周りの駆逐艦も前方の戦列艦に照準



を合わせるのであった。

「しかし、速いな……。」

？ 將軍シウスは敵艦隊を観察し、その感想を素直に述べた。

シウスは望遠鏡で日本の艦を注視する。

？ ムーの機械動力艦と同様に帆が無く、今見える限りでは砲は2門しか積んでいない。  
い。

？ ……だが、その形状と大きさからしてムーの回転砲塔と同じか似たようなものなのだろうと推測する。

？ ……とても、嫌な予感がする。

それから少し時間が経ち、皇軍の旋回もあらかた終わった頃。

？ 両軍の先頭の距離が10キロに迫った時に日本艦隊に大きな変化があった。

「日本艦隊発砲——！！！」

? 日本艦隊の大砲から発砲炎と黒い煙が吐き出される。

? そして、少し遅れて大砲の発射に伴う爆音が海域に木霊した。

「・・・まだ10キロほど離れているな。何のつもりだ?」

「儀式か・・・威嚇のつもりでしょうか?」

? 決して、それこそパールディアの技術をもつてしても届かない距離からの発砲。

? シウスとダルダは日本軍の意図を測りかねた。

? その時である。

? 突如として艦隊の先頭、100門級戦列艦が水柱に包まれた。

? 戦列艦のマストよりも高い水柱はたつぶり数秒かけて霧散する。

? 水柱が霧散して見えるようになったそこには、大破して沈みゆく戦列艦の無残な姿があった。

「戦列艦ロプーレ轟沈!」

? その光景を見て皇軍将兵のみならず、シウス達も驚愕する。

「な・・・ど、どういう事だ?」

? シウスとデルタは突然のあまりにもあり得ない出来事に混乱していた。

(どうして皇国よりも射程距離が長い魔導砲を有しているのだ!?)

? 未だ敵艦隊は我が方の艦隊の射程圏外におり、こちらから攻撃を仕掛けることはで

きない。

「て、敵艦隊再度発砲！」

「な、何という装填の速さだ……！」

? 日本艦隊から飛来した多数の砲弾は艦隊の前方にいた各艦に向けて襲ってくる。

『戦列艦ミシユラ轟沈！戦列艦レシーン中破！戦列艦クシヨン轟沈！戦列艦パーズ大破！』

? 沈んだり損害を受けたりする船の数が多すぎて報告が追いつかない。

? この頃になると初めは皇国の圧勝を前提に話していた参謀達も顔を真っ青にしていた。

『敵艦隊、進路変更！』

? パーパルディア艦隊が敵の予想外の攻撃に戸惑っていると、日本艦隊は大砲をこちらに撃ちつつ、腹を見せる。

? 射線が通った後部砲塔とパーパルディア艦隊を射程に収めた日本艦が増えたこともあり、射撃の密度はどんどんと上がる。

『戦列艦トグル轟沈！戦列艦ミシルス大破！戦列艦ドンタ轟沈！』

? 敵艦隊が近づきにつれてどんどんと被害が増えていく。

? 始めは外れたり致命傷にまで至らない砲弾もちらほらと見受けられたが、今は大半

の砲弾が一撃で戦列艦を沈めるか戦闘不能にまで追い込んでいた。

「こゝ、こんな事があり得るものかああああ!!」

? 旗艦である120門級戦列艦『パール』の甲板で叫んだシウスは強烈な衝撃と顔を焼かれるような熱波を受けて甲板に倒れた。

? 駆逐艦巻雲の放った12センチ砲弾が容易くパールの装甲を突き破り、艦内で炸裂したのである。

? 大穴が開き艦内に海水が流れ込んだ『パール』は徐々にバランスを崩し始める。

「い、いかん！総員退艦！」

? なんとか生きていたシウスはパールの艦長として最後の務めである『総員退艦』を命令する。

? その十数分後、パールディア皇国の武力の象徴の1つであった120門級戦列艦、パールは大東洋に沈んだ。

? こうして、パールディア皇国の戦列艦大艦隊183隻はもの数時間で海の藻屑となった。

? 戦列艦大艦隊殲滅後、戦列艦隊の後ろを航行していた揚陸艦なども含め日本艦隊はパールディア皇国艦隊を殲滅。

？こうして歴史に残る大海戦、『フェン王国沖大海戦』は日本の圧勝で幕を閉じた。

## 勝利の影響

パールディアア皇国 皇都エストシラント 第1外務局

「ふざけるなああああああ!!!」

? 第1外務局に響く若い女性<sup>!</sup>の怒声。

? その声はまるで拡声器でも使ったのかと思うほど大きく、部屋に置いてある物は彼女の声でビリビリと揺れていた。

? 外務局鑑査室に属しており、日独の外交担当官でもあるパールディアア皇国の皇族、レミールはあらん限りの力を振り絞って怒鳴った。

「皇国の! 皇国の力と技術を結集した! 戦列艦183隻の大艦隊と!! 最新鋭の竜母を含む竜母艦隊が! 全滅か!」

? 彼女の前ではなるべく彼女の怒りの矛先が自分に向かないように出来るだけ体を小さくする男達がいる。

「さらにはフェン王国侵攻の為に用意した陸戦隊も乗っていた船と共に全て沈められたそうだな!」

? ギロリと皇国軍最高司令官であるアルデを睨みつけるレミール。



とした恐怖政治で支配しているため、文明圏外国ごときに正規軍が負けるといふ事がどれだけ重大な事をレミールは正しく理解していた。

「蛮族がああああ．．．もう、もう絶対に許さんぞお．．．。」

？まるで般若か鬼神のような威圧感を発する皇女レミール。

？．．．しかし、そこにさらにレミールの怒りを増幅させる特大の燃料が投下されようとしていた。

「会議の最中失礼します！」

？突如として開け放たれる扉。伝令役の兵士はどうやらとても焦っているようであり余程重大な事件であるということがうかがえる。

「どうしたっ！」

？レミールが多分に棘を含んだ口調で報告を促すと伝令兵は萎縮しつつも、皇国からすれば信じられない事実を口にした。

「ムーが大日本帝国とドイツ国へ観戦武官を派遣することを決定しました!!」



大日本帝国 外務省の一室

? かつての世界同様にカラツとした寒い晴れである冬の帝都東京。

? 開戦に伴い一時は緊迫した空気が流れていたこの街も新しい1日を迎え、人々が活動を開始しようとしていた。

? 大日本帝国に保護され、東京市内に住んでいたルミエスは日本の外務省から『話がしたい』と呼び出されていた。

? 送迎の車に揺られて外務省を目指し、来賓室に向かう。

? 外務省の職員が来賓室の扉を開けると、中に居た日本の外務省の官僚たちが一斉に起立した。

(只事ではない)

? そう察したルミエスはお付きのリルセイドとともに日本の外交官の前に立ち、外務省次官に促されて椅子に座る。

「ルミエス様、お待ちしておりました。お忙しい中急に呼び出してしまい、誠に申し訳ありません。」

「いえ、保護していただいている身ですし、今日も送っていただきました。」

? ルミエスと次官の挨拶が終わると、外務省の役人である町田が話を切りだした。

「外務省の町田です。先日、我が国がパーパルディア皇国と開戦した事はご存知だと思います。」

「はい。聞き及んでいます。」

？ルミエスは記憶の中から数日前の新聞の一面を引っ張り出す。

『神国日本、鬼畜波皇に宣戦す』

？と、新聞に大々的に書かれたその文字を見てルミエスはリルセイドと共に瞠目したものだ。

「そこで、ルミエス王女には君主、つまりアルタラス女王としてアルタラス王国の正当政府を名乗っていただけではないでしょうか？」

？勿論、我が国はこれを承認すると共に現在我が国と国交がある国にも承認するように働きかけます。」

？ルミエスとリルセイドは少し驚いた表情を浮かべるが、すぐに平静に戻った。

？わざわざ皇国に正々堂々と喧嘩を売るような国のすることでは一々驚かなくなつたのかもしれない。

「それは私にとつて願つてもなく、ありがたい事です。．．．しかし、私は何をすればよろしいのでしょうか？」

「はい、具体的には．．．。」

? パーパルディア皇国の知らないところで話は着々と進んで行く……。

パーパルディア皇国領アルタラス島 ル・ブリアス

「軍長! 日本から通信が入りました!」

? 通信室から出てきた若い男は大急ぎで軍長ことライアルに東方の新興国……もとい日本から通信があつた旨を報告する。

「どうやら今回の定期便はガラタ入江に来るようです!」

「そうか。」

? ライアルは自分の得物……日本製の二六年式拳銃を手入れしつつ部下からの報告を聞く。

? この定期便とは、日本海軍の伊号潜水艦やドイツ海軍のUボートにより行われているアルタラス島の地下組織への援助のことである。

? アルタラス王国の王女ルミエスが大日本帝国に保護された頃。

? 大日本帝国とその情報を掴んだドイツ国はすぐさま諜報員をアルタラス島へ派遣した。

? …すると、案の定。パールディアに反感を持った者達が集まった地下組織があることが判明したため両国の諜報員はすぐに接触した。

? 最初は警戒していたアルタラス島の地下組織だが、魔信を通じてルミエスの肉声を日本が聞かせ、ルミエスに『時が来るまで待つように』と聞かせられてからは日本とドイツを信用するようになった。

こうして地下組織の信用を得た日本とドイツは隠密性の高い潜水艦を使い大量の武器を輸送しているのである。

? そうした結果、ドイツにおいて軍縮で余った型落ち品や日本製の旧式兵器などが多数アルタラス島に流れ込み、アルタラス島の地下組織は並みの文明圏内国を凌ぐ武装を有していた。

「今日はカスプタの支部に受け取らせろ。」

「はっ！」

? ライアルの指示を聞いた伝令役は返事をすると通信室に駆けて行った。

神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパス

? 今日も今日とて酔っ払いたちが跋扈する港町カルトアルパスの酒場。

? 様々な人々が集まり、様々な情報を交換するこの場で多くの人々が酒場に設置された平面水晶体に注目していた。

? そろそろ週一回で予定されている主だった世界情勢の動きが報道される番組が始まる時間だ。

? 貿易で働く者たちにとってこの情報は大きい。

やがて平面水晶体から導入の音楽が流れ始め、ニュースキヤスターが画面に映った。

『こんにちは。世界のニュースの時間です。本日は驚くべきニュースをお届けします。』

『最初のニュースです。先日、大日本帝国及びドイツ国・フェン王国と戦争状態に突入した第三文明圏の列強パーパルディア皇国がフェン王国沖で日本軍と衝突。パーパルディア皇国派遣軍は壊滅しました。』

? パーパルディア皇国は今回の戦闘により海上戦力の三分の一を失った模様です。

? 今回日本軍が使用した兵器は不明ですが今回の戦闘が第三文明圏に与える影響は極めて強いものとなると予測されております。』

『次のニュースです。グラ・バルカス帝国こと通称〈第8帝国〉は……。』

? ニュースを聞いた酔っ払いたちが興味を惹かれた話題は1つであった。

「おい! 聞いたか? まさかパーパルディア皇国が敗れるとはなあ。」

「列強が文明圏外国にやられるだど? 信じられん。実はパーパルディア皇国が大したことがないだけじゃないのか?」

「またあれか、東方の新興国の日本とドイツが絡んでるな? 全く、最近話題に事欠かないな。レイフォルが崩壊したり、列強が文明圏外国に局地戦とはいえ敗北したり。」

「……でもまあ、なんにせよ中央世界は安泰だ! 日本とかドイツがいくらすごかろうと帝国は別格だからな!」

「そうだな!」

? 酔いどれの話は続く……。

## ムーの視察①

ムー 政治部会

? パーパルディア王国と大日本帝国・ドイツ国。

? この両陣営どちらとも国交を有するムーでは今回の戦争——通称、『大東洋戦争』においてどちらに観戦武官を派遣するかで会議が行われていた。

? 負ける側に武官を派遣してしまうと、戦闘に巻き込まれ死亡する可能性が高くなる。

? 優秀な武官の死亡は国家の損失である。派遣先は慎重に見極めなければならない。

? 仮にムーが観戦武官を派遣したいと要請すればどちらも了承するはずだ。

? 空軍参謀がマイラスを含む日本人・ドイツ人と接した者達からの報告と幹部たちからの意見をまとめた資料を提示しつつプレゼンをする。

? その中にはこっそりと撮られた日本とドイツの戦闘艦の写真もあった。

「——以上の報告から勘定するに大日本帝国及びドイツ国は高度な機械文明を有しており、我が国に匹敵する技術力があり部分的には我が国を上回る物さえあります。観戦武官はドイツと日本に派遣したいと思うがよろしいか。」

?その後は少々問答をしつつ、ムーは日本とドイツに観戦武官を派遣する事を決定した。

?ムー空軍基地のアイナック空港を飛び立って5日。

?マイラスは祖国ムーから遠く離れた大東洋の文明圏外国、ドイツ国付近の上空を飛行していた。

?そろそろこの旅客機『ラ・カオス』はドイツ国の領空に侵入する為、ここから先はドイツ空軍の護衛がつくらしい。

「どんな戦闘機が来るんだろう?」

?ドイツに渡った友人からドイツも飛行機械を有しているという話を聞いていたマイラスは興奮していたが、同じ技術士官のラッサンは冷めていた。

「どうせ大した事は無いだろうよ。・・・所詮はこんな、文明圏外のド田舎だ。」

「君もドイツの戦闘艦の写真は見ただろう?あれは少なくとも我が国に匹敵する技術が



使われている。憶測だけで軽視しているとろくな事がないぞ。」

「? どうやらラツサンは派遣先がこんなところという事が気に入らないようだ。」

「頼むからそういう態度を見せるのは私だけにしておいてくれよ・・・。」

「? マイラスがラツサンに釘を刺した瞬間、機内においても分かるほどの轟音が何回か聞こえた。」

「な、なんだ☒」

「? 2人は条件反射的に窓の外を確認し、瞠目した。」

「な、何だあれは!! プロペラが無いぞ☒どうなっているんだ☒」

「? ラツサンは自分が理解できない目の前の飛行物体に恐れを抱く。」

「? 2人を乗せた『ラ・カオス』はドイツ国防空軍のジェット戦闘機、Ta183に先導されつつ徐々に目的地に近づいていった。」

「? ドイツ国の首都、ベルリンのテーゲル空軍飛行場に降り立ったマイラス達はその異

様な光景に終始瞠目していた。

? コンクリートで整備された近代的な滑走路の脇には文明圏外国らしいワイバーン・・・ではなく、超技術の産物である先程のような、プロペラのない謎の飛行機とプロペラがついた単葉機がずらりと並べられている。

? そのどれもが未だムーでは試作どころか設計すらできていないものである事は技術士官である彼らからすれば一目瞭然である。

? しかも外に見える街では内燃機関を搭載した車が走り回っており、列強パーパルディア皇国と戦争中にもかかわらず市民達が恐怖に怯えている様子もない。

『本当にここは文明圏外国なのだろうか』

? マイラス達に一抹の不安が湧き出した時、前から1人の男が歩いてきた。

「お待ちしておりました。ドイツ国外務省のメンデルと申します。

? 本日より皆様のご案内を担当いたします。以後お見知り置きを。」

? 黒くパリツとした民族衣装に身を包んだドイツ国の外交官の挨拶に対してマイラス達は返事をしつつ、この異常な文明圏外国の空軍基地を眺めていた。

「総統閣下、ムー国の技術士官の皆様が到着しました。」

「そうか。」

？ 夕方の総統官邸。

？ ドイツ国の首都にしてこの世界でも一、二を争う大都会、ベルリンに建つこの建物の二階にある自らの私室で報告を受けたヒトラーは満足気に頷く。

「現在、外務省の担当者により一階のレセプションホールにて滞在期間の予定について説明しております。」

「列強、ムーの技術士官、か．．．とても良いタイミングで来てくれたものだな。」

？ 復興が進み、活気に満ち溢れた首都ベルリンを窓から眺めつつヒトラーは語る。

？ その意を汲んだ秘書官はヒトラーに同意の言葉を送った。

？ ベルリンの街は綺麗な夕焼け色に染まっていた．．．。

「これは……想像以上だな……。」

? ベルリンのとあるホテルにて、ムーの技術士官であるマイラスは同僚のラツサンと共にドイツの空軍基地で見かけた驚異の飛行機械について話し合っていた。

「プロペラが前後に2つついていたり、そもそもプロペラがなかったり……何が何やら。」  
? ラツサンが首を振る。

? マイラスもマイラスでドイツ軍の、特にプロペラのない航空機はどのようなエンジンを積んでいるのか、そしてそれはどのように設計されているのか皆目見当もつかなかった。

「……まあ、それらがどのように戦闘をするかは明後日『戦車』と言う謎の兵器と共に演習で見せてくれると言うじゃないか。」

? それに、明日は新造艦の竣工式に立ち会わせてくれるという。」

? マイラスは眼を輝かせながら言う。

「そうだな。この国の総統閣下はなかなか太っ腹なようだ。」

? そして、2人は明日に備えてベッドに入った。

?翌日。

?綺麗に晴れたドイツ北部の造船所。

?雲ひとつない蒼空はこの日竣工するこの船を祝福しているかのようだ。

?奥にはドイツ海軍元帥のレーダー提督や国家啓蒙・宣伝相ヨーゼフ・ゲツベルス、そしてドイツ国総統、アドルフ・ヒトラー、とドイツ国の要人が一堂に会していた。

「この船は我らがアーリア人の叡智と技術を結集……」

?ヒトラーの演説はマイクを通じて式典の会場に響き渡るが、マイラス達の耳にはそれは全く届いていなかった。

?そう、彼らの目は目前の巨大『空母』に眼を奪われていたのである。

?それはドイツ国防海軍所属の中型空母、その名も『バロン・リヒトフォーフェン』。

?商船改造空母にして、ドイツ初の航空母艦である。